



始



特 230
380



文學博士芳賀矢一編
東京帝國大學教授
文學博士橋本進吉訂補

女子新國文提要

東京會社
富山房發行



女子新國文紀要に就いて

本書は女子新國文新訂版の教授用参考書として編纂されたものであります。全十巻の讀本に應じて本書も亦全十巻より成り、簡潔にしてしかも使ひよい事を念願としましたが、必要と認められた個處には随分繁と思はれる程の注解を施しました。畢竟、本書を女子新國文を御使用になる教授者諸彦の参考書とし、その目的水準を生徒に置かなかつたからであります。地名・人名その他の名辭で殆ど常識的といつてよい程普遍化されたものの注解は簡明に、そして修辭的・文法的に疑義の生じ易い點、若しくは異論の多い章句、講義上特に力説強調すべき個處等に接する時は、その都度出来るだけ記述を豊富に致して置きました。以下實際御使用に際しての御便宜の爲、本書各篇に就いて略説させていたゞきます。

豫備篇 この篇は、實際教授に際し、講義の發足ともなるべき諸要件を記したものであります。その課の位置の指摘、その課の特色は勿論の事、進んではその課の表題に就いても一々説明を施し、併せて作者の小傳並びに出典の解題を加へて置きました。殊に古文に於て歴史的事實を必要とする課に接した場合には、その課の文章の由つて來る所以を明瞭ならしめる爲に、歴史的背景を點出することに努めました。これを要するにこの篇を利用せられる事によつて、教授の豫備工作が完了するやう可及的に記述して置きました。

教授篇

この篇には、本文の解義を進めるに際して、必要と認める語彙の注解、並びに章句の闡

明を爲して居ります。就中、教授上特に必要な全文の焦點の把握に意を注ぎ、先づ全文の中心となるべき個處を指摘し、然る後に一々の語釋に移つて居ります。熟語・單語共に大略摘出しては解義を施しましたが、句の解釋に重點を置いたことは御使用の際御氣付のことと存じます。

【参考篇】 この篇には、その課の講義上、折に觸れ、事に應じて參考として授くべきものを擧げて置きました。本文中にある筆蹟の解説は勿論のこと、その課に關聯したエピソード、若しくは本文作者の逸話等を始めとし、必要と認められた時には全文の梗概、全文の段落等も間々この篇に於て試みてあります。

なほ教科書挿入の繪畫に對しては、卷末に詳解を施してあります。

以上述べたところにより本書の概略は盡くされましたが、實際教授に當つて御氣付の點に就いてはその都度御批正を仰ぎ、本書のよりよき完成を志したいと存じます。

尙上欄に摘出しました語法上の注意句の解説に就いては、別冊として「語法篇」を附添へました。語法の取扱に就いては、同書の序篇に詳述して置きました。

女子新國文編纂者小傳

〔芳賀矢一〕 文學博士。慶應三年五月、越前國福井に生まれた。大學豫備門を経て明治二十五年東京帝國大學國文學科を卒へた。第一高等學校教授兼高等師範學校教授より東京帝大助教授に任せられ、三十三年ドイツに留學してベルリン大學に學び、英佛を巡遊して三十五年に歸朝した。歸朝後直ちに東京帝大教授に任せられ、三十六年文學博士となる。大正五年再度の渡歐をしたが、大正十

一年教壇を退いて名譽教授となつた。その間國語調査委員會、教科用圖書調査委員會の各委員に擧げられた。これより先、大正十年、皇太子殿下歐洲御見學を卒へさせられて御歸朝あそばされるや、東宮職御用掛を拜命して國文學を御進講申上げた。昭和二年二月六日、大正天皇御大葬の前日國學院大學長現職のまゝ薨す。年六十一。著書に「國文學史十講」・「國民性十論」・「日本人」・「東海道五十三次」・「月雪花」・「攷證今昔物語」等の他、「芳賀遺稿」(二卷)があり、教科書に「國文讀本」・「明治讀本」・「帝國讀本」・「女子國文」等がある。

〔橋本進吉〕 文學博士。東京帝國大學教授。明治十五年十二月、福井縣敦賀町に生まれた。第三高等學校を経て、明治三十九年、東京帝國大學文科大學文學科を卒業した。同四十二年、同大學の助手となり、昭和二年助教授となり、昭和五年教授に進んだ。昭和九年三月「吉利支丹教義用語の研究」を以て文學博士の學位を受けた。著には上田萬年博士との共著「古本節用集の研究」他に「文祿元年天草版吉利支丹教義の研究」等がある。なほ帝大の外に東洋大學その他にも出講してゐる。

女子新國文 提要 卷二

目次

一、二	御修學時代の皇后陛下……………	大島義脩	一
三	月雪花……………		九
四	農家の春秋……………		六
五	星と花(詩)……………	土井晚翠	二六
六	天龍川下り……………	和辻哲郎	元
七	手紙二信……………		三三
	一 火事の見舞……………		三三
	二 寫眞を贈る……………		三四
	手紙の話(自修文)……………		三六
八、九	爽かな心……………	河野省三	四
一〇	南京の壺……………	柴田鳩翁	五
一一	小さい旅人……………	薄田泣菫	五
一二	諏訪湖畔の冬……………	島木赤彦	三
一三	埠頭……………	長田幹彦	充
一四	久能山東照宮……………		六
一五	たき火(童話)……………		八三

一	たき火……………	葛原 幽 谷
二	寒雀……………	川路柳虹 谷
一六	師走日記……………	服部躬治 谷
一七	新年……………	三
	縁起の話(自修文)……………	關根正直 谷
一八	多年一日の修養……………	村上專精 二〇三
一九	教化の力……………	橋 南 谿 二〇
二〇	近江聖人の母……………	村井弦齋 二六
二一	麥 笛……………	加藤武雄 二四
二二	新 柳(詩)……………	與謝野晶子 二五
二三	三都氣質……………	鶴見祐輔 二七
	英國の強み(自修文)……………	穂積重遠 二四
二四	禮儀作法……………	二五
二五	家庭に於ける禮讓……………	鳩山春子 二五
(挿畫解説)		
	[明治天皇畝傍御陵親謁](口繪)……………	吉田秋光 一五
	[仲 秋]……………	深田直城 一五
	[水田の六月]……………	中村徳二 一五
	[たき火](一枚刷)……………	青柳喜美子 一五

〔白鳳出現〕(一枚刷)……………太田天洋二
〔山陽の幼時〕……………水野年方一
〔麥 笛〕……………田中針水一

一、二 御修學時代の皇后陛下

大島 義 脩

修備篇 私ども婦人の龜鑑として上に戴く國母陛下が、學問に於て十二分の御勉學を積ませられ、深き御慈愛を以て廣く社會事業に御力を注がせられ、内には主上に對し、皇子、皇女方に對し、御女性として、御母として深く御心を用ひさせられ、天皇陛下と御趣味、御性格がびつたりと合致させられてをられるといふ事は、國民として、女性として、この上ない喜びであり、幸福である。本課に於ては、特に若き女性の爲に、陛下御勉學時代の事を、嘗て女子學習院長として、又、御學問所講師として、親しく陛下御教導の任に當られた大島氏を煩はし、親しく氏の見聞した陛下の御勉學振り、御日常、御性格の一端を記して頂いたのである。

〔御修學時代の皇后陛下〕本文中にもあるやうに、本課は主として、大正七年東宮妃と御内定されてから特に久邇宮邸内の御學問所に於て御勉學あらせられた頃の皇后陛下の御勉強ぶり、御日常を記したものであ

る。

〔大島義脩〕氏は兵庫縣に生れ、明治二十七年東京帝國大學文科大學哲學科を卒業し、文部省に入つて、視學官、書記官等を経、後、名古屋の第八高等學校長、女子學習院長、東京帝室博物館長の職にあつたが、昭和十年歿、年六十五。本文は昭和十年初めに特に訂補者の求めによつて執筆され、同五月頃、親しくその校正刷まで目を通されたのであつたが、持病の胃腸病の爲本書の出版を見ず、九月歿したのであつた。

教授篇 陛下が御仁慈の御心に富ませられてゐるところは、既に世に知られてゐるところであるが、一御學友の爲に、寒中わざ／＼橙湯を御手づから作らせられて、「身内が温まるさうだから」と御すゝめ下さるとは、教育や修養では能はぬ事、御天性と申し上げる外はあるまい。かうした側近の者に對する細かい御心遣を以ても、國民の上に加へさせられる御慈しみが、更にどんなに深いかも知實に知る事が出来るのである。關東大震災に於ける際、御手づから針を取らせられ避難者への衣類を縫はせられた事などかうした御心の自然の御發露ではあらせられやうが、恐懼に耐へぬところである。その外、陛下の

御逸話には、恐多い事ながら、國母陛下としてののみならず、一般女性の緊要なる婦徳の完全なる具有者として、女性の以て龜鑑と仰ぎ奉るべきものが、凡て悉くである。本課は筆者が親しく見聞した所のものであるだけに、非常に我々に直接的に迫るものがあり、それだけに、陛下に對する親しみ、敬慕の一層切なものを覚えるのである。本文の効果をこゝに求むべきであらうと思ふ。

〔皇后陛下〕 御名は良子。故久邇宮邦彦王第一王女、明治三十六年三月六日、御生誕。同月十一日御命名、同四十二年四月十一日學習院女學部初等科御入學。大正四年四月同部中等科に御進級。大正七年一月十七日、東京妃冊立の御沙汰あり、よつて二月四日、女學部御退學。四月十三日より宮邸内に新設の御學問所にて御修學、同十一年六月二十日御婚約勅許、同九月二十八日御納采、叙勳一等、同十三年一月二十六日御入典、皇太子妃宣下、昭和元年十二月二十五日皇后とならせられた。

〔國母〕 皇后、又は皇太后といふ。こゝは文字通り國民の母の意。

〔陛下〕 我が國では、天皇、皇后、皇太后、太皇太后

の敬稱。その他の一切の皇族に對しては殿下の敬稱を用ひる。陛下はもと支那戰國時代には諸侯にも用ひたが、秦の始皇に至つて天子の尊稱となつた。天子のいまます宮殿の陛(キサハシ)の下に戈を執つて護衛する者があり、天子に上言するには直接に言を呈するを憚り陛下の下にある人の取次を経て上聞に達すとの意。

〔久邇宮邦彦王〕 故一品朝彦親王殿下の第三王子にあらせられ、明治六年七月二十三日、京都御苑内下立賣御門なる賀陽宮御邸に御誕生あらせられた。初め御名は彦宮と稱せられたが明治十九年邦彦と改められた幼時京都にて小中學校の教育を受けさせられ、明治二十三年東京成城學校に御入學、同二十六年同校を御卒業後軍籍に入られ、同四十二年陸軍大學に御入學遊ばされた。三十七八年戰役には、第一參謀として従軍遊ばされた。四十年御渡歐遊ばされ、獨逸軍隊に入隊せられ、獨逸の軍事を御研究あらせられ、四十二年御歸朝あらせられた。大正十二年陸軍大將に進ませられた。昭和四年薨、御年五十七。

〔東宮妃〕 「東宮」は皇太子のおはします宮殿、即ち東宮御所。轉じて皇太子の尊稱となつた。今義解に「御

子ノ宮ハ御所ノ東ニ在リ、故ニ東宮ト云フ也。伴ニ云フ、四時ノ氣東自リ發ス、即チ春此ニ准ズ。故ニ東宮春宮ト爲ス、其ノ義別無キ也。」とある。

〔御沙汰〕 御たつし。仰せ出。

〔學習院〕 宮内大臣の管理に屬する特殊學校。明治十年十月創立。十八年九月女子部は分立して、華族女學校となつたが、三十九年四月同校を合併して男子部、女子部の二部とし、次いで大正七年女子學習院を設けて再び女子部を分離した。學科は初等科(六ヶ年)、中等科(五ヶ年)、高等科(二ヶ年)、外に幼稚園がある。華族の子弟でないものも、特に入學を許される事がある。女子學習院は現在は明治神宮外苑にある。

〔民間の子女〕 人民の女子。

〔御學問所〕 殿下の御學問遊ばされる所。

〔それ〴〵専門の云々〕 宮家御邸内の御學問所で御修學遊ばされた高等普通諸學科は、修身を杉浦重剛、修身、國語、禮法、家政を後閑菊野、漢文、作文を竹田道子、地理、歴史は依田豊、數學、理科を鈴木元美、佛語を兒玉錦平、本野清子、ジユリーモレル、音楽は神戸絢子(ピアノ唱歌)、山本浪子(琴)、和歌は大口鯛

二、坂正臣、習字は小野紹之助、繪畫は高取熊夫、體操、薙刀は土取信子、國體講話(憲法皇室典範)人文講話を大島義脩、點茶は松浦益子等御擔任申し上げ、この外、臨時御進講の美術史、國文學史、社會事業、陸海軍講話をお聽講あらせられ、裁縫、手藝、活花は別に時間を定めずに御學びになられた。編者芳賀矢一も國文學史に就いて一年ばかり御進講申し上げた。

〔至高の御身分〕 最も高い御身分。即ち皇后の御身分。

〔ふさはしい〕 適當した。似合はしい。

〔思召を體せられ〕 御心持を身に奉せられ。

〔とりわけ〕 特別。

〔高い博い〕 程度の高い、範圍の廣い。

〔たぐひ稀な事で〕 くらべるものの少い事で。筆者大島氏が、直接語られた事であるが、或る一學科についてこそは相當に高く深い學問を積んだ女性があるとしても、陛下のやうに、あらゆる學科に亘つて、いづれも最高最深の所まで究めさせられた方は、全く他にはあるまいと。

〔けだかく麗しい御姿〕 氣品高く美しい御容子。

「生き／＼として云々」 御活潑で、行儀の正しい御動作。

「お優しくつゝましやかな云々」 お優しくてひかへめな御言葉遣ひ。

「今陛下として拜し奉る云々」 現在皇后とならせられては實に神々しいまでに拜せられるが、その神々しさは、その時分から、もう御身に備へてをられたのである。

「理解に敏く」 物事をしつかりとのみこむのが早い。

「要點を捉へる」 大切な所をつかまへる。

「聰明」 何事にもよく通じ知ること。心のさといこと。

「御學友」 學問の御相手をする人。

「御競技ぶりを云々」 「競技」は互に技術を競ひ、優劣を争ふこと。目立つた御競技ぶりを見せられた。

「健脚」 脚の丈夫なこと。歩行の早く、疲れがたいこと。

「敏捷」 すばやいこと。

「體質」 身體の素質。

「久邇宮家」 伏見宮から分れた宮家で、伏見宮貞敬親王の王子朝彦親王を祖とする。初め親王は、仁孝天皇

藝に御趣味深くあらせられる。

「だんらん」 親しいものゝ楽しい集合。まどろの楽しみを一層楽しみ深いものとされるのであつた。

「乙女心にふさはしい云々」 少女の心に似合はしい御孝行の一つと御察し申し上げた。即ち、手作りの花を捧げられて御心を慰められるとか、手作りの新しい野菜物を御一緒に召上がられるとかいふのは、いかにも若い女の優しい心に似合はしいといふのである。

「心遣」 氣をさま／＼にくばること。心をいろ／＼にはたらかすこと。

「感涙に咽ぶ」 感激の涙が流れるのをすゝり上げる。

「奉仕」 つかへまつること。お仕へ申すこと。

「御不快げな御様子」 面白くなささうな御様子。次の「拜する」は「拜見する」の意。

「御間近にをりますと……」 「至高の御身分にならせられる御方の側近くにをる事ですから、家の人達や、あたりの方は、さぞ御窮屈で、御骨の折れる事とせうと、よく言はれた事でしたが、陛下(當時殿下)のお傍にをりますと、却つて、家にをる時より、朗らかでした」とは、一學友の筆者(紀要)に直接語られたところ

の養子となり、尋いで落飾されたが、文久三年復飾せられ、中川宮と稱せられ、尋いで賀陽宮と改められたが、明治八年久邇宮と稱せられるに至つたのである。「敬神崇祖の云々」 神を敬ひ、祖先をたふとばれる御心があつく。

「一區を淨めて」 一所を清淨にして。

「みたま」 御靈。

「御祠」 神を祭る御小舎。

「朝ごとの歩みを云々」 毎朝行かれて。

「額つき拜み給ふ云々」 額を地につけるやうにして拜まれる花のやうに美しい御姿を見申さぬ日といふものはなく……。

「さ／＼やかな」 ちよつとした、小さい。

「菜園」 野菜畑。

「専ら」 たゞ。一向に。

「御兩親の宮様」 御父宮は邦彦王、御母は俱子妃殿下。妃殿下は故従一位公爵島津忠義氏の第七女。明治十二年十月十九日の御誕生。三十二年十二月御入輿。極めて御質素御規律正しくわたらせられ、日常の御召物など御手づから御裁縫あそばさると承はる。和歌、手

である。

「お言葉を添へて」 ……と仰しやつて。

「だい／＼湯」 だい／＼を薄く切つて入れ、それに砂糖を加へた湯。だい／＼(橙)は芸香科の常緑喬木。幹は高さ三米ばかり、葉は互生し、卵形。初夏の頃、葉腋に白色五瓣の花を開く。果實は冬季に熟して黄色になるが、翌年の夏にはまた緑色にもどる。

「お湯の暖かさにもまして云々」 お湯の暖かいの以上に、その御情深い御心に感激して、寒さを忘れた。

「御日課の餘暇」 日々の課せられた御學業の間のもよつとした暇。

「御くつろぎの時」 御ゆつたりとしてをられる時。

「心ないお答を云々」 お答へすれば、こんな事になるのだといふ事を察する事の出来なかつた、考への足らぬ答を、恥ぢ、又、恐縮した。

「心ばへ」 心だて。心のおもむき。

「些細な事」 ちよつとした小さい事。

「震災」 地震の災害。大正十二年の震災とは、同年九月一日、午前十一時五十八分、相模灣附近を震源として起つた大地震で、關東大地震ともいふ。東京府、及

び神奈川、静岡、千葉、埼玉、山梨の諸縣に亘つて被害甚だしく、全潰家屋十三萬、半潰十三萬、東京及び横濱は地震と共に起つた火災の爲に大部分を焼失し、その爲に死傷者の數を夥しく増した。その他津浪は相模灣沿岸、内房沿岸を襲ひ、被害を與へた。死者十萬、傷者十萬餘、行方不明者四萬に及んだ。

〔滞在〕 他の所に長くとゞまつてゐること。逗留。

〔御妹宮様〕 赤倉に御一緒にゐらせられたのは、(挿圖寫眞に拜せられるのは)陛下のすぐ次に當らせられる御妹宮、即ち第二王女信子女王殿下で現在は伯爵三條西實義氏嗣子公正氏に御降嫁あらせられてをられる。〔頒ち賜はるやう云々〕 分けてやるやうにとの仰せがあつた。

〔御慈愛の御手は……伸ばさせられた〕 御情深い御心は、遂に小さい鳥の上にも及ばれた。

〔御髮〕 髮。

〔御學習の時間云々〕 自分を可愛がつて下さる御方の、身に近くゐられないのを見て、懐かしがつてゐる鳩の愛らしい様子が目に見えるやうである。

〔風情〕 様子。おもむき。

〔あはれに愛らしい〕 かはいさうでもあり、愛らしくもある。

〔入内〕 内裏に参入する意。中宮、又は皇后などが卍立前に式を具へて内裏に入り給ふこと。

〔舞翔り〕 舞ふやうに飛びまはる。

〔旋廻〕 ぐる／＼めぐること。又、ぐる／＼まはすこと。こゝは前者の意。尙「廻」は「回」が正しい。

〔見る者の眼に云々〕 見る人にほろりと涙を流させたと語り傳へてゐる。見る者を泣かせたといふ話であるの意。

〔雲居の宮〕 禁中。宮城。

〔萬民に臨ませ給ふ〕 幾萬の人民に對せられる……。

〔臨む〕は治者として被治者に對するのをいふ。

〔せんだんは二葉より香し〕 せんだん(梅檀)は發芽の頃から、早くも香氣あるやうに、偉人は子供の時からその器量が他に異なるのをいふ。せんだんは、せんだん科の落葉喬木。我が國の暖地に自生し、高さ約八米。樹皮は赭黒色、葉は三回羽狀複葉で、各小葉は卵形又は披針形。春、葉腋に淡紫色の五瓣花を圓錐花序に配列する。花後核果を結ぶ。但しここのは、これと

違つて印度のものといふ。

〔坤徳〕 皇后の御徳をいふ。天皇の御徳を「乾徳」といふのに對する。

〔撫育〕 なでそだてること。いつくしみそだてること。

〔民草〕 人民。民の殖えるさまを草にたとへていふのである。あをひとぐさ(蒼生)といふのも同じ。

〔仁恵〕 めぐみ。いつくしみ。

〔天資〕 うまれつき。天性。

〔教養〕 教育。教へそだてること。

〔天成の玉も云々〕 自然と出来上がつてゐる玉も、人の手で磨かれて一層の光輝が出、四方に光りを放つといふ事が出来よう、陛下の御坤徳の如き、正にさうであらせられるのである。

参考篇

本課の文によつて、陛下の御修學時代の御有様を拜察する事が出来た。が、更に陛下の御坤徳の一端を拜すべき二三の御逸話を附け加へておく事とする。

陛下は毎朝聖上陛下よりも半時間早く御起床、御寝も半時間遅く、その間、御食事の事、御身まはり一切の事悉く御自身で遊ばし、總てに御心を碎かせ給ふと承はる。かく主上を御いたはらせ遊ばすので、主上にも後の宮

に御情厚く、各地行幸の際にもくさんゝの御土産をお選びあつて、御還幸の後、後の宮に贈らせ給ふといふ。

曾て主上が攝政宮時代、北陸地方に於ける陸軍特別大演習御統監の爲、晩秋の雪近い北陸路に行幸遊ばされた時は……妃殿下の御心遣は一方ならず、霜の晨、風の夕、遠く北國の空に御心を走らせ給ひ、松浦侍従に御心をこめさせられた御玉章と御手づから御作り遊ばされた薩摩芋一籠を御托しあつて、背の宮の許に御送りあらせられた。この温かい御贈物を受けさせられた背の宮は大層お喜び遊ばされて、早速妃殿下の爲に美事な御座布團を御買上あらせられ、御送り遊ばされたとも承はる。

陛下は御女性としてまことに御麗はしく拜せられるがその御化粧用の品々は、まことに恐多い程御質素であつて、決して流行の中心といはれるパリのものなどを用ひさせられぬ。いづれも皆一般婦人の使つてゐるのと同じ國産品である。御服地などもすべて國産品であつて、若い女性が外國品でなければならぬやうに心得てゐるのは大きな誤である事を、陛下御自身で明らかにされてゐる。その他御身廻りの御品も、皆國産をお用ひ遊ばされ御腕時計なども精工舎製のクローム側である。まことに

長い極みである。

陛下には今一皇子三皇女の御母宮として深き御慈しみを注がれ給ふのであるが、その御育兒の御有様は、まことに世の母たる者の模範とも仰ぐべきものであらせられる。

御懷妊の御頃から、やがて世に出でさせ給ふべき御子により御資質をとの思召から、御自身の御心を爽やかに保たせられ、御讀書も論語、孝經等の經書を始め、孝子節婦の傳記等、修養教訓のものを御選りあつて、御胎兒の爲に御修養を御怠りなく、又御運動・御食事等保健上の問題にも、侍醫の御進言を固くお守り遊ばされた。又育兒法、兒童心理等に就いては、その道の權威者をお招きあつて、御進講を聞き召され科學と經驗の上に立つ、眞に正しい知識を以て御養育の方針を立てさせ給ふのである。

この正しい御方針は、やがて生れました御子の御哺乳に、御母乳第一主義を執らせられることとなつた。從來皇后宮が皇子をお育て遊ばすのは、殆ど乳人主義によらせられ、御自分が御授乳あることは極めて稀であつたと承つてゐるが、陛下にはその舊習をお捨て遊ばし、母乳

は嬰兒の健康上又精神上最良のものであるとの御見地から、御自身で御授乳遊ばすのである。元よりの皇子皇女にも二人宛の乳人は御用命遊ばされたが、それはほんの補助としての御役目で、例へば陛下が公式御多端の場合とか、御風氣に亘らせられる折とか、止むを得ない御支障の時に奉仕するのみであつた。だから、これまでの御乳人が滿一ヶ年の光榮ある奉仕を終へ、御暇を頂戴して御殿を退る時、「僅かに深夜一回か二回かの奉仕でした」と語るのもまことに故ある事であつて、いかに陛下が御母乳第一主義を以て、御慈愛に滿ちた御養育を遊ばすか、それによつて窺ひ知られるのである。

三月雪花

繙備篇 この三つの眺を恣に鑑賞し得るのは、日本に生れた我等にのみ與へられた幸福である。本課を讀めば、我等は祖先以來月雪花と關聯した教育を受けて來て、我々の趣味性がいかに固く自然美に基調を置かれてゐるかといふことが明確になり、その優美な傳統的精神によつて情操を培はれてゐる國民としての誇を感じることが出来る。

〔月雪花〕 「つきゆきはな」と訓む。支那では轉倒して雪月花といふ。各その音調を以て次第したまでで、優劣の差異があるわけではない。月日、日月、後前、前後、雨風、風雨の類は皆さうである。花は、櫻花のことに我が國では殊に櫻花を賞する故に、花といへば直ちに櫻花の義となる。花の色はうつりにけりな「花さそふ嵐の庭の」花より團子等の類である。紀貫之の「花ぞ昔の香に匂ひける」は特に香といふ語を利かせて、その梅の花であることを示した。櫻は色を賞し、

梅は香を賞する。

教授篇 日本人は幼少の頃から月雪花によつて教育せられてゐることを説いて風流の眞義をのべ、更に、我等日本人の生活が、いかに月雪花と密接な關係を有つてゐるかをのべ、世界にはこの月雪花の美を知らず、味はふことの出来ない民族のあることをのべ、この三つの眺をほし、にすることの出来る日本人の幸福は、歴史を讀んで一層その感を深くするものであると説いてゐる。

〔大宮人〕 禁中に仕へる人。禁中に奉仕する文官。雲上人。昔の大宮人は多く風流韻事に長けてゐた。新古今集卷二「百敷の大宮人はいとまあれや櫻かざしてけふもくらしつ」(山部赤人) 萬葉集卷十八「ふせの浦をゆきてし見ては百敷の於保美夜比等に語りつぎてむ」

〔丁稚〕 商家に召使はれる小童。小僧も同じ。重ねていつたのは文のあやである。「あひみだがひみ」「時よ時節よ」等の類。丁稚の字義は明らかではない。一説に鎌倉大草紙に「狂言者のでつしをあつかふ如く心のまゝにしてありしかども云云」とある「でつし」の轉じたものであるといふ。でつしは弟子の俗訛であらう。

〔秋の月を祭る風俗〕 陰曆八月十五夜に中秋の月を又九月十三夜に後の月を眺め翫ぶ行事。八月十五日は秋七八九月の最中であるから中秋といふ。月下に清宴を催して詩歌を詠じ、民間では月見團子（その數十箇を用ひる）、芋、枝豆、栗などを盛り、神酒を供へ、又芒や秋草の花を花瓶に挿んで月を祀り、老若男女が楽しい物語にうち興するのを習としてゐる。我が國の起原は貞觀六年に初めて見え、支那では漢代に始まる。九月十三日は古來十五夜に次ぐ觀月の良夜とされてゐる。民間では團子（その數十箇を用ひる）を始め芋、枝豆等を十五夜のやうに供へて月をむかへる。我が國では延喜十九年に始めて見えてゐる。共に古來和歌や俳句の詠題とされてゐる。

〔雅興〕 風流ななぐさみ。

〔御月様いくつ〕 國中ひろく行はれる童謡であるが、地方によつて多少の相違がある。東京附近では「お月様いくつ、十三七つ、まだ年や若いね、あの子を生んで、この子を生んで、だれに抱かしよ、おまんを抱かしよ、おまんどこに往た、油買ひに茶買ひに、油屋のえんで、氷が張つて、すべつてころんで、油一升こぼした、

その油どうした、次郎どんの犬と、太郎どんの犬と、みんななめてしまつた。その犬どうした、太鼓に張つて、たゞき破つてしまつた。」といふ。又「……その犬どうした、太鼓に張つて、あつち向いちや、どんどこどん、こつち向いちや、どんどこどん。」ともいふ。この童謡は何時の頃から始つたのか知りたければ、元祿の末に出た野良握拳といふ書に、神崎奇流といふ若女形を評する語に「諸藝はなほ申すに及ばず、お月さまいくつ、十三七つとすら、まだ若いかたの身ぢやもの云云」とあるより察すれば、當時すでにこの童謡の流行したことがわかる。十三七つとは、二十歳のことといふ他、諸説がある。

〔俚歌〕 るなかうた。俗歌。

〔雪よふれ〜〕 この童謡は、昔からあつたものと見えて、鳥羽天皇が未だ御幼少の時に、こんこんと降る雪を、御覧になつて、「ふれ〜こ雪〜とおうたひになつたと云ふことが、讃岐典侍日記に出てる。徒然草、第八十一段に「ふれ〜こ雪、たんぼのこ雪といふこと、米搗き飾ひたるに似たれば、粉雪といふ。溜れ粉雪といふべきを、誤りて、たんぼの、とはいふなり。」

桓や木の股にと唄ふべし、と或物識申しき。昔よりいひけるにや、鳥羽ノ院幼くおはしまして、雪の降るに、かく仰せられけるよし、讃岐典侍が日記に書きたり。又京都の童謡に「雪やこんこん、霞やこん／＼、お寺の松の樹に、いつばい積りこんこん。」雪ばな散るはな、空に蟲が涌くはな、扇腰にさいて、きりりと舞ひましよ。」などといふのがある。

〔風流〕 みやびやかなこと、俗ならず上品なこと。趣の多いこと。

〔歴史的懷舊の念〕 古人が月雪花にあこがれて詠じた詩歌、又は月雪花を背景とした古人の事跡を想ひ起して、なつかしく思ふ心。例へば月を見ては、安倍仲鷹が異境の海濱に故國の三笠山を偲んだ情緒を思ひやり、雪を見ては、清少納言が簾をかゝげた佛を髣髴し、花を見ては源義家が勿來關に落花を惜しんだ雅趣を懐かしめる類。

〔唐土人高麗人〕 支那人。朝鮮人。唐は今支那のことである。これ我が國が支那と初めて交通したのは隋唐の時代であつたから、特に「唐」といふことが最も深刻に我が國民の腦裡に印象され、爾來襲用の久しき、

唐が減んで宋が起り、次いで元明清の治世となつても、なほこれと呼ぶに唐を以てしたのである。高麗は古くは新羅、百濟と共に三韓の一國の稱で古朝鮮の地である。元來高麗と書して、高は元來朝鮮語で大なるの義、勾麗（マル又はマ）は城の義を有して居たのであるが、後「勾」の字を去つて高麗と書くに至り、轉じて朝鮮全國の稱となつた。二川相近の今様に「花より明るみよしの、春の曙見渡せば、もろこし人も高麗人も、大和心になりぬべし。」又賀茂眞淵の歌に「もろこしの人に見せばやみよしののよしの山の山櫻花」

〔逕庭〕 甚だしい違。大差。逕は狭少な道。庭は中庭、逕と庭とはかけ離れてある故にいふ。又逕を徑に作る。

〔弄ぶ〕 慰め愛す。

〔詩的教育〕 風流を味はふ情操を教養すること。

〔眞義〕 眞の意義。

〔塵世〕 塵の多い世の中。けがれの多いこの世。單にこの世の中をいふ。

〔活動社會〕 盛んに活動してゐる世の中をいふ。社會（Society）は共同生活をする人類の團體。互に助けあつて生活する人の群、世の中。

〔隱遁〕 世を捨てて山林などにかくれること。この世からかくれのがれること。

〔所行〕 おこなひ。行爲。

〔皎々〕 月雪などの白く見えわたるさま。しろく、きよく、ひかる有様にいふ語。

〔皚々〕 霜、雪などの白い形容。

〔營々〕 ある事にばかりせつせとつとめる義。利慾に營々たりは利を求めらるにあくせくすること。

〔人を高尚にし〕 人の心を上品にけだかくする。卑近でなく程度をたかくする。

〔溫雅〕 しとやか。おだやかで度量のひろいこと。やさしくてけだかいこと。

〔我等日本人は云々〕 月雪花を人事に結合して思想をいひ表した詞藻は殆ど枚擧しきれない。『月聊雲客』は貴人の人格を月に譬へたもの。『花嫁花婿』は新郎新婦の美を花の艶なるに比したものの。『星の数はど男あれど月と見るのはぬしばかり。』(俗歌)は男の風手を月に見立て、いかにしてうつし留めけん雲居にてあかす隠れし月の光を(後拾遺集)は月の入るのを後一條院の崩御に比し、『世の中のうけくにあきぬ奥山の木葉にふ

れる雪やけなまし(古今集)は世を厭ひて雪と消えんことを願ひ、『春は花秋は紅葉と散りはてて立隠るべき木のもともなし(拾遺集)は春秋に二人の子を失つたのを春花秋葉の散るに譬へ、『花見んと植ゑけん人もなき宿のさくらは去年の春ぞ咲かまし(新古今集)は櫻の木を植ゑたその人はすでに死んでしまつたのに、今年花がさいたとて何の益もないと人の蹉跌を怨み、くもりなき鏡の山の月を見て明らけき代をそらに知るかな(新古今集)は君が代の繁榮隆昌を月に寄せたのである。

〔月に叢雲花に風〕 好事に故障多き譬にいふ語。とかく人の世は思ふ通りにならぬ、完璧なことはありにくといふ語。源平盛衰記に「定めなき浮世の習は、風に散る花のためし、雲に隠るる月の理。」文子上徳篇「日月欲明浮雲蔽之、河水欲清沙土穢之、叢蘭欲秀、秋風敗之、人性欲平嗜欲害之。」

〔蹉跌〕 つまづくこと。轉じて志を遂げぬこと。失敗すること。てちがひ。

〔吟詠〕 詩歌をうたふこと。詩歌をつくること。

〔譬喩法〕 類似又は對比するものを假りて、事物を説

明する方法。修辭學の術語。たとへをとつて説明する方法。

〔月雪花に種々な美德を附加する〕 彼の「月は浮世の外よりや行く。」と言つて、月に俗世を避ける徳ありとし、『花は櫻木、人は武士。』といつて、櫻に武士道の徳ありとする類。

〔有情化〕 人の如く喜怒哀樂の情があると見做すこと。「もろともにあはれと思へ山櫻花より外に知る人もなし(百人一首)の類。

〔有徳化〕 前解のやうな美德があると見做すこと。

〔寸毫〕 一寸一毫。ともに小數の稱。少しも、微塵も。

〔光風霽月〕 うら、かな光と雨後の月と清い風、朗かな月、心事の高明でさつぱりと清いことに喩へる。宗史周惇頤傳に「黃庭堅稱、其人品甚高、胸懷洒落如光風霽月。」

〔君子人〕 有徳の士。人格のある人。『赤心』はまごころ。

〔月を蔽ふ雲云々〕 頼三樹三郎の詩に、「排雲手欲掃妖災、失脚墮來江戸城、井底痴蛙過憂慮、天邊大月缺光明。」

〔邪佞〕 心ねちけてへつらふ。又その者。

〔なぞらふ〕 他のものをこれにたぐへること。擬する。

〔雪は氷潔一點の塵云々〕 「氷潔」は氷の清いやうに、いさぎよくよこれぬこと。潔白な精神や節操。

〔嚴肅〕 おごそかなこと。きびしいこと。

〔節操〕 正義を維持して、心を變へないこと。みさを、節義。

〔聯想〕 一の事柄を見聞すると同時に、これと深い關係のある他の事柄を思ひ出すこと。

〔花は爛漫〕 節義の士が身命を擲つ。山本誠一郎の辭世の歌に「雨風に散るともよしやくら花君が爲には何かいとらん爛漫は花の咲き亂れてゐるさま。節義の士はいかなる權力を以てしても自分の操を狂げぬ潔白の士。

〔塙保己一〕 江戸時代の國學者。本姓は荻野、通稱辰之輔。五歳にして病み、七歳で明を失ひ、十歳母を喪つた。初め絃歌を學び、次いで鍼法を學んだが、皆不成功で、遂に國典に志し、刻苦勉勵、諸書を蒐集校訂して、群書類從を編した。性穎悟強記、溫厚で、人と交はり城壁を設けず、名聲一時に高かつた。文政元年

二月群書類従刻成り、同四年正月總檢校となつたが、八月これを辭した。群書類従を將に上刻せんとして果さず、九月十三日歿、年七十六。

〔逸事〕 散逸して世に多くあらはれない事柄。偉人傑士のかくれた行爲。

〔南殿の櫻〕 南殿は内裏の紫宸殿の稱。ナデン、ナンデンともよむ。朝賀、即位の公事を行はせられる所である。中央稍北に偏して玉座を設け、正面に御椅子あり、天皇南面して御坐させられる。階前左に櫻あり、左近の櫻と呼び、右に橘あり、右近橘と呼ぶ。櫻樹はもと梅で、桓武天皇遷都の時に樹ゑしめ給うたが、承和年中に至つて枯れ、仁明天皇改めて櫻を植ゑしめ給うたものが、今の左近櫻である。

〔目に見ねば〕 「南殿に」撫でんを言ひかけてある。目に見えぬから撫でて見るの意。

〔言の葉の云々〕 言葉の拙い我が身には、目が明いて居て富士の雪景を見たとして感吟名歌も出ないであらう故、却つて盲目で見ぬがましであるといふ意いふなかなか」は却つての意。世に盲目の人ほど不幸なものはない。人生快樂の大部分は眼にある。彼の豊川勾當が「こ

れかとして抱きついて見る櫻かな」と吟じ、盲人尾藤某が「手にとれば紙の音する蜻蛉かな」と言つたやうなあはれの深い句を吟誦したならば、誰か一掬同情の涙を止め得ようぞ。我等完全な眼を有する者は、常に我が身の幸福に満足しなければならぬ。

〔これに附加された傳説〕 例へば月に就いては竹取の赫夜姫、雪に關しては佐野源左衛門常世の鉢の木、花に因んでは花咲爺のお伽噺など。傳説はいひつたへ。かたりつたへ。口碑又は文書によつて傳へられた過去の事實、又は事實と信じられたことがら。

〔品性〕 個人の本來もつてゐる性質。

〔國民性〕 Nationality 一國民又は一民族に特有なる氣質。その國民固有の性質。我が國の大和魂の類。

〔髣髴として〕 ほのかに。かすかに。髣髴は彷彿とも書く。

〔心眼〕 心の働による無形の目。事理を洞見する明識。肉眼に對して心の働きをいつたもの。

參考篇 「青年子女に對して、強ちに月雪花の風流を求めよといふのではない。生存競争に奮闘する中にも、高尚な精神の慰安を忘れるなといふのである。

將來の發展を期待しながらも、過去の傳説を記憶せよといふばかりである。(月雪花序) 詩的懷舊の念に浸りながら、月雪花の眺を恣にすることの出来る我等の幸福は、我等の一生にとつていかほど大きいものであるか、この點を最も力説して頂きたいと思ふ。

四 農家の春秋

豫備篇

自然讚美の前課をうけて人事の教材を配して農村風景に關心を持たせたい。勿論我が國は古來農を以て國本としてゐる。都市繁榮は一面農村繁榮に俟つことの大きい關係を再確認せねばならない。春秋二季に於ける農繁期は都會人の想像の外であらうが、そのめまぐるしい状態を知つて、而して常食としてゐる米麥を想ふ時私共はそこに尊い汗の滴りを見出さずには居られないのである。かくして瑞穂の國である我が國古來の國柄の一斑をも知り得るであらうが、都會の生徒も、農村地方の生徒にも農家の春秋、即ち勤勞と食物とでも言ひ得られる様な關係をやゝもすると見逃がし勝ちな傾向のあるのを深く戒め内省させたいと思ふ。

教壇篇

豫備篇に述べた様に、春秋二季の農繁期の状態を知りこれが我が國古來の國柄であること、勤勞と食物との關係、都鄙全般子女への内省的注意喚起、而して非常時日本はまづ農村繁榮からといふ様な觀察も出來

るであらうが、都市と農村との關係を力強く確認させて欲しい。そして明治天皇の上御一人の大御心に想を馳せて感涙に咽ぶと同時に歴代の天皇が農事に對して如何に御軫念遊ばされたかについて、適切有効な説明を施されたい。又參考篇に掲げておいた祈年祭、新嘗祭、大嘗祭、各(祝詞本文は別に讀聞かすも有効)のことにも言及して戴き、本課の意義を徹底させたいと思ふ。

【毛附、毛上】 稻麥種蒔き、植ゑつけを毛附といひ、その收穫を毛上といふ。上毛野、下毛野、または毛なし山などの如く、毛とは地上の草木、特に草をいふ。就中、稻の穂をいふ。稻の未だ刈らないものを立毛、稻の檢見を毛見ともいふ類皆同じである。

【春は麥を刈取つて田を作る云々】 これは關西地方のことで、秋の末に稻を刈取つたあとに麥を蒔いてそこが麥畑になり、翌春麥を刈取つてこんどは水田となし、苗を植ゑる。しかし東北地方では稻は水田、麥は畑と別になつてゐる。そして多くは田植を終へて畑の麥刈となるのが普通である。これは季候の關係であらう。その相違について注意させたい。

【骨折時】 多忙な時くらゐの意。「骨が折れる」といふ

のは困難である、又面倒であるといふ意に用ひ、精出してつとめることは「骨を折る」といふ。

【ねむさうな聲】 眼を催しさうな聲。その聲を聞いてゐると、うとうとしさうなのをいふ。

【苗代】 稻の種籾を蒔いて苗を育て作る田。苗代田の略。

【梅雨】 支那の南方から、我が國にかけて、初夏の候にふり続く雨である。五月雨ともいふ。この現象の起るのは、北西の季候風が變つて、南東の季候風となつたけれど、春がまだ淺く土地がなほ冷却してゐるので多量の水蒸氣はその爲に凝結して梅雨を醸すのである。芒種の後の壬の日を入梅といひ、夏至の後の庚の日を出梅ともいふ、その間凡そ三十日程である。ここは梅雨の季節に入るからの意。梅雨は微雨とも書く。

【夏至】 太陽が夏至點に達し、北半球の晝最も長く、夜の最も短い時、北寒帯では太陽が地下に没することなく、南寒帯では太陽が地上に現はれることがない。毎年六月二十一日または二十二日頃に當る。冬至に對していふ。

【田植】 稻の苗を苗代田から水田に移し植ゑること。

種蒔後凡そ五十日頃にこれを行ふ。苗の生長したのを玉苗といひ、苗代から取るのを早苗取といふ。農夫男女入交つて、唄などを歌ひながら植ゑる。その歌を田植歌、田歌などといふ。女子の苗を取るものを特に早少女といふ。

【刈始める】 麥の收穫は立春から百二十日頃、即ち六月中旬から下旬頃で、これを麥の秋といふ。飯盜む狐追ふ聲や麥の秋。(蕪村)

【疲れに疲れて】 くだびれきつて。ぐんなりと疲れきつて。ひどく疲れたことをいふ。

【眼も眩む】 忙しいのに疲勞しきつて、眼がぐらぐらとする。眼まひがすること。

【明治天皇】 御名は睦仁、祐宮と稱し奉つた。孝明天皇の第二皇子、嘉永五年十一月三日御誕生。萬延元年七月十日立太子、御歳九歳。慶應二年十二月孝明天皇崩御、翌年正月九日御踐祚、御歳十六。翌年八月二十七日御即位。九月八日明治と改元。明治二年五月十八日東京御遷幸あらせられた。明治四十五年七月十四日御不例、同三十日午前零時四十三分崩御あらせられた。御壽六十一。天資淑明にましまし、よく明治興國

の基礎を確立し給うたことは國民須知のことである。

〔つばめとぶ影のみ見えて云々〕 明治四十年の御作。御題は「夏田家」とある。小山田の「小」は接頭語である。田植時に農家では、老若男女を問はず皆田圃に出で働き、家には燕の飛んでゐるのみで、居残つてゐる人もない程忙しいさまをお詠みになつたのである。

〔青田〕 稲を植ゑて青々した田をいふ。

〔毛附休〕 田植の後の休息。田植は農家の行事の重大なもので、餅搗き酒を酌んでこれを祝ひ、休養するのである。さなぶりともいふ。

〔馳走〕 もと馳けまはる意であるが、饗應の用意に奔走する意から轉じて、ふるまひ、もてなしの意となつた。

〔きしる〕 すれあつて響が出ること。すれあふ。すれつきしきし音がすること。「軌めく」といふ。

〔小山田の霧の中路ふみ分けて云々〕 田霧と題されてゐる。一首の意は山田に立ちこめた霧の中を畔傳ひに道ふみわけて人の來るかと思へたが、近づいて見れば人ではなくて動かぬ案山子であつたとの意。太田垣蓮月（太の字は大が正しいとの説もある）は幕末の

女流歌人。幼名は誠。京都の人、智恩院の廣間侍太田

垣傳右衛門光古の女である。幼にして聰慧、和歌を千種有功に學んで善くし、また武技にも通じたといふ。文政二年夫を喪ひ、四子また夭折したので、髪を薙つて法名蓮月と號した。されど周圍の人は蓮月の容色の極めて勝れたるより或は再婚を勧め或は入夫を申し込むものがあり、その煩はしさに堪へなかつたので、蓮月は秤の錘をもて上下の前齒をば悉くこぼち去つたといふ。手づから陶器を製し、これにその詠を描いて鬻いだ。頗る雅致に富み、世人購ひて愛翫する者が多かつた。蓮月常に詠歌を乞ふ者の多いのを厭ふて家居を定めなかつたので、人呼んで屋越の蓮月といつた。後、西賀茂なる神光院に住し、明治八年十二月十日歿、年八十五。その詠「宿かさぬ人のつらさをなさけにて臘月夜の花の下ぶし」の歌は普く人口に膾炙してゐる。

家集を海士の刈藻、蓮月和歌集といふ。

〔案山子〕 又、ソホヅ。古事記に曾富騰。田圃の中に弓矢を持ちて、鳥獸の寄るを威し防ぐ藁人形。俳諧歳時記栗草に「備中國湯川寺の玄賓僧都、迹を民間の奴に晦まして、田に入り稲を護り、以て鳥雀を驚かして

務とす。今に至つて鳥雀を驚かす雜靈を僧都とす。續古今集玄賓の歌に、「山田守る僧都の身こそかなしけれ秋はてぬれば訪ふ人もなし。」

〔稼穡〕 穀物を植ゑ又はとり入れること。農事、農作。正韻に「種之曰稼、斂之曰穡」

〔忙殺〕 極めて忙しく暇のないさまにいふ。「殺」の字ころすの意の時は音サツ。減削する、けづる、そぐ等の意の時は音サイ。ここでは甚だしい意味の助詞であつて、音サイが正しいが、俗にはサツを以て通じてゐる。

〔二百十日〕 立春から數へて二百十日にあたる日。大抵九月一、二日頃にあたる。この頃は早稲の花盛であるのに、暴風多く、その天候がひどく收穫に影響するところが多いから、農家では厄日の一として平穩無事を祈る。

〔中稻〕 稲の熟する時期について、その早いものを「早稻」といひ、次を「中稻」最も遅く熟するのを「晚稻」といふ。

〔皆無〕 全部むだになること。

〔わが國は古來農の國である〕 佐藤信淵の農政本論初編に「皇國上代の古例を按ずるに、皇子諸皇子を

始めとして、太政大臣より少初位の下官に至る迄、皆歛を賜ふこと有り、神武天皇以來農を以て政の本と成されて、崇神垂仁二帝殊に農政を勵み給ひたる遺例にして、尊敬すべきの最要なり云々」とある。日本書紀卷五に「六十二年（崇神天皇の）秋七月乙卯朔丙辰詔曰、農天下の大本也、民所恃以生也」とあり、續日本書紀卷二十八に「癸卯、勅、夫農者天下之本也、吏者民之父母也」等とあるやうに我が國は古來から農を以て國の本として來たのである。

〔上御一人〕 天子を申し奉る。禮記に「凡自稱天子曰予一人」とある。

〔照るにつけくもるに云々〕 明治三十七年の御作。御題は述懐。「民草」は民に同じ。民のつぎつぎに蕃息するさまを草にたとへていふ語。「あを人草」ともいふ。「民草のうへ」といふのは、民草についていふ意味にもとれるが、ここでは民の身の上、生活状態、民のなりはひといふ風に解するがよい。一首の意は、照れば照るにつけ、曇れば曇るにつけて、我が臣民のなりはひに妨はないかと思はぬ時はないの意。この御製の中に籠る御仁愛は、恰も慈母が嬰兒を寢る間も忘れ

すに健全に成長させて、幸福な身にしたと思ふのと
同じく、天皇の赤子たる七千萬の臣民の産業發達に障
はないかと、晴雨につけて大御心を惱ませられたこと
が拜察せられる。

〔二百二十日〕 立春から數へて二百二十日目、即ち九
月十一二日頃、この頃は晚稻の花盛で、暴風雨がある
とその害も大で、二十日に譲らないのである。とも
に農家の最大厄日としてゐる。

〔厄日〕 災厄ある日。

〔小春日和〕 陰曆十月頃の春のやうなあたたかい天氣
をいふ。小春は小六月といひ、あたたかい日の續く初
冬の頃をいふ。普通陰曆十月の異稱としてゐる。日和
は空模様、晴れてほがらかな空合などにいふ。

〔取入〕 作物をとり入れることで、主として稻の收穫
にいふ。

〔田をすく〕 「すく」はすき（田の草を除き土を除き土
を起すに用ひる農具）で田の土を起し草を除くこと。
ここは田を耕す意。

〔夜を日に繼いで働く〕 晝夜兼行で働く。日中の勞
作で未だ足りず、夜にかけてつゞいて働くこと。

をそれからそれへと求め行く意。

參考篇 明治天皇御製中より農家に關した御製を謹
載する。

山家餘寒

○雪きえぬ山里人は冬よりも春の寒さやしのぎかぬらむ
（明治三十年）

田家烟

○小山田のさとの煙もとしどしにたちそふ世こそ樂しか
りけれ （同三十二年）

田家春雨

○しづのをがかへす山田もうるほひてゆふべしづ
雨ぞふる （同三十三年）

農家

○しづがすむわらやのさまを見てぞ思ふ雨風あらし時は
いかにと （同三十七年）

田家竹

○おのづからおひたる竹をへだてて垣根もゆはぬ小山
田のさと （同三十七年）

田家翁

○こらは皆軍のにはいではてゝ翁やひとり山田もろら

〔有明の月〕 夜あけて、なほ天に残つてゐる月。陰曆
十六日以後の月。残月ともいふ。有明は月の空にある
まゝにて夜が明けることで、陰曆十六日以後の夜明を
いふ。

〔土塊〕 土のかたまり。

〔はつし〕 物と物が相撃つ音、光、火花などの發する
さまにいふ。また矢が物に中つて立つさま。敵の打ち
おろす刀を受けとめるさまなどにもいふ。「はつし」を
發矢と書くのは宛字である。

〔うなり〕 唸。惱んで發するやうな聲。くるしんでう
めくやうな聲。

〔いなゝき〕 嘶。馬聲が高く鳴くこと。いばゆともい
ふ。

〔山際〕 山の根又は山と空との接する所。山際の雲が
晴れては山の上の雲が晴れての意。

〔心忙しく〕 心が落着かずせかせかすること。

〔濶かい夢路をたどる〕 いはゆる白河夜舟で、よい
氣持で寝てゐるのにいふ。「夢路」から「たどる」といつ
たのである。「たどる」はたづねさがす、不案内なる路
に迷ひながら尋ね行く意であるが、ここは夢の筋みち

む 田家 （明治三十七年）

田家

○をさな子をはぐくみながら田に畑にいそしむしづの暇
なげなる （同三十八年）

田家煙

○縣守こゝろにかけよしづがやのかまどの烟たつやたゝ
すや （同三十八年）

田家雪

○しづがすむ薬屋あやふくみゆるまでふりつもりたるけ
さの雪かな （同三十九年）

春かに農家

○ひとりしていくらの小田をまもるらむしづが假庵のか
ずぞすくなき （同三十九年）

田家燈

○ともしびの細き光をたのみにて山田のしづは繩やなふ
らむ （同四十年）

農

○にひはりの田にも畑にもみゆるかな廣くなりゆくしづ
がなりはひ （同四十年）

田家花

○咲く花をやどにのこしてしづのをは長き日ぐらし小田
にたつらむ (明治四十一年)

田 家

○田に畑に處ゆづりてしづがすむいほりちひさく見えわ
たるかな (同四十二年)

「農民を歌へる」 福田正夫氏の詩を掲げる。

農民の言葉

「野良へ行つてるといゝ氣持になる

家へ歸るのさへ忘れる」と

農民は語る。

實さい——今年のみのりは

洪水に倦んだ年々をとり返して

新しい路をひらいてくれる。

「これであと洪水がなけりや上等だ、

久しぶりでいゝ年が来る。」

村の人達は呪ひ呪うた多摩川べりさへも

和らかに踏みしめながら

未來の歡喜に酔ふ。

早稲と中稲はすつかり胎んでゐる

晚稲はいま花で

この二三日が大切だが

それもどうやらよい運命をわたるらしい。

渡る風を見ながら

自分さへ農民の言葉をきいて

祈る念するやうな

卒然たるよるこびにうたれる。

【祝詞解説】 文部省發行の日本思想叢書第四篇の「祝
詞宣命」中から祈年祭、神嘗祭、新嘗祭について山田
孝雄博士の解説を轉載しておく。

【祈年祭】 「トシゴヒノマツリ」とよむのが正しい。後

世には「キネンサイ」ともよむ。これはその年の穀物の
豊熟を神祇に祈り請ふ祭で、月次祭・神嘗・新嘗の祭と
共に中祀とせられた。これは毎年二月四日に行はれ今
も行はるのであるが、昔時この祭に與り給ふ神は延
喜式神名帳記載の官社（今の官幣國幣の諸社に似た）
すべて全國三千百三十二座が皆この御祭をうけらるる
のである。その式に行はるるのは神祇官の廳と國司の

廳とに於いてである。そのうち國司の祭る神二千百九
十九座はそれ／＼の國司の廳で祭り、その他の社七百
三十七座を神祇官で祭らるのである。この區別が官
幣（神祇官が祭る）國幣（國司が祭る）の本義である
——この御祭の儀式及び御供物等の事は清和天皇の時
に出來た貞觀儀式・醍醐天皇の時に出來た延喜式に明
かである。祭の前にあたつて荒忌三日眞忌一日の齋戒
があり、祭日の先十五日から忌部八人及び鍛工・木工
等に御供物の調度を作らせる。又畿内から白い鶏一・
近江國から白い猪一、又左右馬寮から各馬十一匹を供
進する事になつてゐた。そのうち白鶏・白猪は白馬と
共に御年神に奉らるるものであり、馬二十二匹は伊勢
兩宮・御年神等二十二社に奉らるのである。この御
祭を享けらるる社は官社すべてであるが、特に御年神
を主として特別の御供物がある。この御祭に當日の卯
刻（午前六時）に行はるのである。一體に古代の政事
はこの時刻に行はれ、遅くも正午までに終る例であつ
た。「朝日の豊榮登りに」とあるはこの時刻をさしては
めたのである。——この祝詞は、（一）一般の天社國社
に白す祝詞、この末に特に御年神に白す祝詞を附加し

である。（二）大御巫の祭る神、所謂神祇官の八神に白
す詞。（三）座摩の御巫の祭る神、（四）御門の御巫の祭
る神、（五）生島の御巫の祭る神、（六）伊勢の天照大御
神、（七）六の御縣にます神、（八）六の山口にます神、
（九）四の水分にます神に白す詞の九種があるのであ
る。而して第二以下は特に皇室に特別に關係ある神々
である。このうちでも伊勢のは特別の形式になつてゐ
るのは、深い敬意をささげてゐる爲である。さうして
これら各段の祝詞の經はいつも「宣る」とあるが、そ
の「宣る」といふ語を宣した時にはこれを承つてゐる神
主祝部が一同に「ヲ」と唱へて、これを承つた旨を答
へるのが禮儀であつたのである。

【神嘗祭】 正しくは「カミニヘノマツリ」であるが、又
は「カムアヘノマツリ」ともよむ。後世には訛つて「カ
ムナメマツリ」とも「カムナベマツリ」ともいつてゐ
る。この祭は伊勢の大神宮の祭である。この祭は大
神宮に限られてゐるのであつて、十一月の新嘗祭に先つ
て祭らるるのには尊敬の極みである。——神嘗祭は神宮
の祭の中で最も重いもので、起源も亦古いもので、こ
れを中祀と定められ、朝廷に於いては、月のはじめよ

りこの日まで齋戒せられたのである。奉幣使は毎年九月十一日に發遣せられ、御祭は豊受宮をさきにし、大神宮を後にする例により、九月十五日と十六日の朝とに豊受大神宮に大御饌供進の儀ありて、十六日齋主と勅使と參入して幣帛奉納の儀を行はれ、大神宮には十六日夕より十七日にかけて同様の儀を行はれるのである。而してこの儀は神宮に於いても極めて重い儀とせらるるのである。この祭は近世朝廷の式微によりて稍衰へ幣帛使を遣はされなかつた事もあつたが、中絶はしなかつた。江戸時代に入り、後光明天皇の時第一にこの祭を興され、明治以後ますます御鄭重な御祭になつた。その祭日は明治十二年から十月十七日に改められて今日に至つてゐる。

〔大嘗祭(新嘗祭)〕 正しくは「オホニヘノマツリ」とよむ。しかし訛つて「オホンベノマツリ」とよみ、又「オホナメノマツリ」ともいふ事がある。この祭は、今日新嘗祭といはれてゐる祭のことである。今日大嘗祭といへば、御即位禮の時に行はれる祭をいふ事になつてゐるが、元來これはいづれも同じ祭である。この祭はその年の新穀を以て酒饌を作り、天照大御神を始め

奉り普く天神地祇にこれを饗し奉り、天皇御自身も聞食し、諸臣にも給はる儀であつて、祈年祭に對してその結末をなすものである。これは後世には御代のはじめに唯一度行はるゝの大儀を大嘗といひ、毎年行はるゝのを新嘗といつたが、上古はいづれも大嘗といつたのである。而して新嘗は古代は誰人も行つたので天皇のみの行はせられたものでなかつた。

それ故にひろく新嘗といひ、天皇の行はれるのを大新嘗といひ、これを約めて大嘗といつたのであらう。而して今いふ大嘗祭は踐祚大嘗祭といふのが正しいのである。この御祭は我が國の朝儀中最も古いもので、起源が神代にある。天照大御神が既にこの祭を行はれた事が古史に見える。かの天窟戸の變も、そのもとと素盞鳴尊が大嘗宮を汚し奉つたことから起つたのである——この祭は毎年十一月中卯日に行はるので、その前に神に奉る新穀を奉るべき悠紀主基の國郡を卜定せられ、拔穂使を遣はされて、これを京に持來し、これを以て酒を醸し神饌をつくりて神に饗し、又召し上らるのである。その祭を行はるゝには古くは毎年新たに大嘗宮をつくられたのであるが、後には中和院の内に

設けられた神嘉殿で行はれた。これには夕の御儀と朝の御儀とあつて、夕の御儀は悠紀の御嘗で、卯月の夕刻から行はれ、朝の御儀は主基の御嘗で、辰日の朝未明までに行はれたのである。この祭儀は今日は新嘗祭として毎年十一月廿三日の夕と廿四日の曉とに行はせられることは昔とかはらない。

五星と花

土井 晩翠

準備篇

本課には明治新體詩史上逸する事の出来な
い晩翠の詩を採つて、自然讚美強調の資とした。新體詩
は古代の長歌や中古の今様などの系統よりも、歐洲の詩
の翻譯から出發してゐる。明治十年頃は歐洲文藝の翻譯
時代であり、明治十五年に「新體詩抄」が名詩譯集として
出版されてから、二十年から二十五年にかけて紅葉、美
妙等の詩集「新體詩選」や、新聲社同人の「於母影」等が出
で、二十四五年から三十四五年頃までは主情主義的な詩
が起り透谷、藤村等の抒情派の他に鹽井雨江、大町桂月、
武島羽衣等の擬古派、與謝野鐵幹の漢文調、それから更
に剛健高雅な情調を以て藤村と對峙したのが土井晩翠で
あつた。かういふ経路を経て今日の新體詩へと發展した
のであるが、現代詩人の詩風とは自づと異なる格調があ
るので、参考篇に百田宗治氏の本課に對する批評等を掲
げておいた。

「土井晩翠」

詩人、英文學者。本名は林吉。明治四年

十月二十三日仙臺に生まれた。第二高等學校を経て三
十年東大英文科卒業後、間もなく詩壇に出でて独自の
詩風を拓き、又は海外に遊び、歸朝後は久しく二高の
教授となり、今は名譽教授である。明治三十二年の處
女作「天地有情」をはじめ、「曉鐘」「東海遊子吟」「曙
光」「晩翠詩集」「天馬の道」等の詩集、又「衣裳哲學」パ
イロンの「チャイルド・ハロウドの巡禮」等の譯著があ
る。

教授篇

默々たる、そして慈父慈母の温い懷を思は
せる大宇宙、大自然の中より、か弱い女性的な美の象徴
として星と花とをビクアップして來て、それに限りな
い愛情を寄せた優しい美しい詩、曉に星が隠れる時、花
に露が宿つてゐることを、星といふ天上の花が凋む時、
花といふ地上の星に涙が宿るといふ所が、一篇の中心點
である。そして又、本詩は、参考篇目夏氏の文にもある
様に作者稀に作つた所の優雅體としても名高いもので、
愛誦措く能はざる詩篇であり、深く鑑賞詩作の資とさせ
たい。

「おなじ「自然」の云々」この句は自然の具象たる星
と花とが作者の詩的感覚に映つて、擬人的に美化され

てうたはれたのである。即ち天上といひ、地上といふ

も同じ自然といふものを母とし、その母の手に育まれ
た姉と妹といふ意。

「み空の花を星といひ」この句は次の句と關聯して
花と星とが、各その背景とする天と地のいかに美しく
對立してゐるかを、互にその位置の轉換によつて、強
調したものである。

「わが世」天上に對して、この地上をさしていふ。

「にほひ」ここでははなやかなこと、艶麗なことなど
の意があたる。天上の星、地上の花と遠く隔たつては
ゐるが、星と花とはいつてもそのはなやかさ、その趣に
は區別がないといふ意。

「ゑみと光」花の微笑と星の光である。

「かはすもやさし」互に交はし合つてゐるのもいち
らしい。「かはす」はやりとりすること。互に投げかは
すこと。「やさし」はすなほなこと。いちらしいこと。

「曙くも白く」ほのぼのと夜が白みかゝること。

「み空の花のしほむとき」空の星を花と見立てたの
で、星の光の消えるのを花が凋むといつたのである。

「白露のひとしづく云々」わが世の星である花に宿

る一半の白露こそは別れを惜しむ涙であるといふ意。

参考篇

左に散文譯を試る。

「第一聯」天上といふも地上といふも、同じ自然とい
ふものを母とし、その母の御手に育まれた姉（天上の
星）と妹（地上の花）、その姉である天上の花の如きを
星といひ、その妹である地上の星の如きを花といふ。

「第二聯」あの天上の星とこの地上の花と遙かに隔た
つては居るが、星と花とはいつてもそのはなやかさ、そ
の趣には區別がない、花の微笑と星の光とを互に交
はし合つてゐるのもいちらしいことだ。

「第三聯」さても、ほのぼのと夜が白みかかり、あの
天上の花である。星の光がうすく消えかかる時、その
時、見よ、このわが地上の星である花に宿るひとしづ
くの白露こそは、別れを惜しむ涙である。

「本詩に對する批評」詩人百田宗治氏の評言を掲げ
る。一種の星董調だが、晩翠の理想主義的な詩風がこ
の詩を墮弱な感傷から救つてゐる。今日から見れ
ば調子も古く、想も素より平凡たるを免れぬが、末聯
の「さればあけぼの……」以下の三行の如き、捨てられ
ぬ清新味が漲つてゐるではないか。み空の花を星とい

ひ、わが世の星を花といふも巧妙である。第一聯第二聯は平凡な叙述に過ぎないが、第三聯に至つて初めて獨特の精彩を示してゐる。曙の草の露の一しづくからこの詩感を得て來るところに、時代は變り感興の種類は異つても、いつも詩人の清新な詩想はある。

〔晚翠氏に對する批評〕 詩人日夏秋之介氏の文を掲げる。明治二十七八年戰役後、國民詩人出でよとか、雄渾剛健の理想を譲ふ詩家出でよとかいふ詩壇の提唱盛んであつた折柄、恰もその要求に應じた如くに出でた晚翠の詩は、漢語成語を中心として放吟に適する七五正調のバラッド體、サニング體で、主として英雄を詠じ、東亞の風雲を歌ひ、理想を高吟し、人生觀を直叙したので、鐵幹の所謂「男兒の歌」が志士の抱負を吐露して快哉を叫んだとひとしく、その方面の要求を満たした如く思惟せられたが、一面彼は又「星と花」や「はるのよ」の優雅體をも奏したので、畢竟晚翠の詩調の重んずべき點は、愛憐情痴を主とする短曲と史詩調の類と抽象思念に基く冥想體との三種のうち、第二種のものでその本領で、雄勁なれど單純な詩調詩念に最もよく適してゐたものであつた。——晚翠の譚歌史

詩の格調の清新性は當時の驚異であつた事は事實であり、先人何人にも多く感化せられざる晚翠独自の創造に俟つところのものである事も事實である。出づべくして出でた詩人であり、當時一部の要求に正しく應じて生れ出た詩人である。——藤村になく、透谷になく抒情詩派にも早稻田派にもない蒼古雄勁の詩調が、沈痛なる單純、素樸極まる悲調を以て、彼のみによつて完成せられた一事は、文學史上特記するを要する一現象である。藤村の詩調は、明かに「於母影」や新國文提唱の感化を引いてゐるが、晚翠の先達には、ただ晚翠あるのみで、一人の先聲と認むべきものがない。漢詩を碎いたにすぎぬといふ罵辭は全篇を通讀した者には通用せぬ蕪辭である。彼は恐らく藤村よりも詩論と詩學とについて研究したかも知れないが、そのあとは詩篇その物の上には明かに現はれてはをらぬ。外遊後公刊した「東海遊子吟」は彼の缺點のみを擴大し、如何に新天地を打開するかといふ評家の待望を裏切つた。彼が詩は青年時學生の愛誦するもの多く、これがため校歌、寮歌等は、一時晚翠調に風靡された感があつた。(日本文學大辭典)

六 天龍川下り

和辻哲郎

豫備篇

「天龍下ればしぶきが、もたせてやりたや檜笠」の俗語で知られた天龍下りの壯快さを敘した文である。が、夏のそのただく痛快、壯絶な氣分に對して、紅葉の色褪せた秋のそれは、壯快の中にも、何かしら一味の寂寥を籠めて、それが、その行事を何かしら意味深いものにさせてゐる。

落著いた、奥行の深い、思索的な作者の筆の跡を味はつてみたい。

〔天龍川〕 源を長野縣諏訪湖に發し、伊那谷を南下して靜岡縣に入り、掛塚邊に至つて遠州灘に注ぐ。信濃を流れる間は頗る急流をなすが、遠江に入るに及んで緩流となる。流程五五里。

〔和辻哲郎〕 哲學者、批評家。文學博士。兵庫縣の姫路中學校、第一高等學校を経て、明治四十五年東京帝國大學哲學科を卒業した。雜誌「帝國文學」の編輯に

携りつゝ、次第に文壇・學界に入り、今は東京帝國大學教授に任せられ、哲學上の論文等に筆陣を張つて一方の堅壘を擁してゐる。

教授篇

簡潔な筆の中に、よくその場合場合の景と情とを盡くしてゐる。中に「かういふ所にも人が住んでゐる。さうして激しい自然と戰つてゐる。それを眺めてみると、長く長く流れて行く天龍川の心が自分の胸にも通つてくる……涙ぐましい心持になつた。といふあたり、最後の夕暮の天龍の景と作者の氣持とを敘したあたり、いかにも作者の哲學者らしい心の深さと、文學者らしいデリケートな心持とが窺はれる文章である。

〔霧を貫いて〕 霧の中をくゞつて。

〔出發といふ波立つた心持〕 出發といふ何となく落着かぬ、ざわついた氣持。

〔瀬〕 河流の水が淺くて徒渉の出來る處。あさせ。又水流の急な處。はやせ。ここは後者の瀬である。

〔操縦〕 或はひきとめ、或ははなちやり、いろいろにあやつつて動かすこと。

〔天龍峽〕 長野縣伊那郡飯田町の南方二里。下川路村から時又、姑射橋に至る天龍川の懸峽で、絶壁の削立

する兩岸の間を流れる清流は矢よりも早く、奔湍岩を
囁むところはいはゆる十勝六峽となり「天龍下り」はこ
こに至つてその壯快を極めるのである。

「飛沫」 瀧水などが霧のやうに飛び散るもの。

「色が褪せる」 色がさめてうすくなる。

「受けた印象の量から云々」 受けた印象の多さから
推していつて見たら、かなり長い。即ち、時間にす
ればそんなに長いのではないが、その間に非常に多く
の印象を受けたの意。

「天龍川に親しみを云々」 天龍川に馴れて、恐しさ
を感じなくなつたの意。

「難船」 船舶が海上で風波に遭ひ、破損又は覆没など
をするのをいふ。

「茶々淵」 詳かでない。

「山が開けて」 山が川の兩岸から遠のいた意。

「容赦」 ひかへめにする。ゆるす。ここは遠慮會釋も
なくの意。

「下の淵に突進んだ時云々」 下の淵に船が突進む、
船はあはやその岩に突當るかと思ふと、ちやんと岩
を避けてゐる、船頭の迅速なる操縦振りをつたので

ある。

「激しい自然と戦つてゐる」 かうして激しい自然の
反抗も、人間はこれを征服せずには止まぬのである。

「長く／＼流れて行く天龍川の云々」 千變萬化し
てやがて悠々洋々と流れて行く天龍川——それは何か
しら人生の種々相、波瀾曲折といったものを自分の心
に思はせるといつた意。心が……通ふ」とは「心が……
わかる、心が……知れる。」といつた意。

「涙ぐましい心持」 涙があふれ出さうな感傷的な氣
分。

「滔々」 水の流れるさま。水の廣く湛へるさま。又辯
説などの流暢でよどみのないさまにもいふが、ここで
は當らない。

「まつしぐらに」 勢烈しく直進して、わきめもふら
ずに。

「落ち行く」 下つて行くの意。先に「木の葉」といつた
から「落ちて」といつたのである。

「南畫」 東洋繪畫の一流派で、南宗畫ともいふ。唐の
王維をその祖とする。南畫は山林の風を帯び、野鶴閑
雲の趣があるといはれる。北宗畫の對。

「突如」 不意に、だしぬけに。

「中部」 静岡縣の西端天龍川の右岸にある町。

「倦怠」 仕事に倦み怠る。なまける。

「西川」 静岡縣磐田郡、天龍川の右岸。

「戸倉」 右に同じ。天龍川の左岸。

「感じの深い村」 深い感じを抱かせられる村。氣を
ひきつけられるやうな感じのする村。

「巧妙な」 巧妙にの意。

「荒涼」 土地などの荒れはてさびしいこと。

「その倦み疲れた氣持が周圍の云々」 そのあき果
ててつかれた氣持が、周圍の荒涼たる夕暮の景色に一
層強められるといつた意。

「味氣ない」 しかたない。益がない。面白くない。な
さけない。ここはつまらなく心細いといつた意。

参考篇

船頭が櫂で舷をばんばんと敲く。出發だ。
一二の瀬を過ぎて天龍峽に入る。霧の中に兩岸の屹立し
た斷崖が見える。船は七八哩の速力で下る。飛沫がくる。
寒さが身にしみる。應接に遑ない程巨巖が走る。景色が
變化する。その中天龍川に親みを感じて來て、有名な茶
茶淵の難所もさして難所らしく感じない。天龍第一の難

所槽の瀧を過ぎて、山が開け、里が見え、河原に遊ぶ子
供を見て、人生を考へさせられる。信濃の國境を過ぎる
あたりの荒つばい大きな眺に心樂しませて、船は下る、
下る、漸く倦怠を覺えて來た夕暮、この氣持に如何にも
ふさはしい荒涼たる夕暮の景色に味氣なさを感じた。薄
曇りの空に月が現れたといつた内容の文章である。これ
を更に要約すれば、李白の「朝辭白帝彩雲間」の詩となる
といひたいところである。

七 手紙二信

(書翰文講話及文範)

準備篇 女學校を出ても用事のある手紙一本満足に書けない——これはよく女學生を持つ親から聞かせる言葉である。その當否は暫く措くとしても、實際手紙程簡単なやうで、その實容易でないものはない。友達同志の間に交換する意味のない手紙ならそれ程に感じられないが、父兄の代理として、見舞、贈遣、謝禮等の手紙を書くとなると、その主意を徹底させる事さへも難かしいこととなる。女學校を出ても云々の言葉はかうした所から發せられるやうになるのである。本教科書には、本卷では口語體の手紙模範文を、更に四卷には候文の書翰文を擧げて、力めて生徒の手紙に對する注意と興味とを喚起すべく試みた。次課自修文「手紙の話」を本課の教授に先だつて一讀せしめ、生徒の手紙に對する興味、必要、注意を大體ながら喚び起しておいて後、本課を教授される事が有效と思ふ。

【手紙二信】 手紙文の二つの通信形式を示したものと

いふ意で題した。が、實は三つの形式となつてゐる。即ち「火事の見舞」で一般見舞狀、「寫眞を贈る」で贈遣狀、兩者の返事で、謝禮狀の形式を。

【書翰文講話及文範】 文學博士芳賀矢一、杉谷代水共編著。大正二年富山房發行。もと菊判二冊のものであつたが、後縮刷版となり、一冊に合本された。近く前田晃の増補した縮刷版も出てゐる。

教授篇 本課の參考篇に見舞狀、御禮狀、贈遣狀の認め方一般の注意事項を擧げておいたから、それを先に一應話しておいて、本文に入り、その要所を理解せしめて頂きたい。又、一般に手紙は——敢へて手紙とのみは限らないが、誠意、誠實が籠らねば相手を動かす事は出來ない。更に又、相手と自分との地位の關係をも考慮しなくては、親しさが出て來ない。誠意と親密の籠らない手紙は全く用をなさぬのみか、却つて惡結果を招く。これも注意して置かねばならぬ事である。見舞と贈遣と禮狀と、この三種に通じたなら、大體の日用の手紙の用は足せる筈であるから、本課によつて、十分その認め方の標準を會得せしめたい。尙依頼狀も日用普通のものであるが、それは作文などで課して、會得せしめるやうにし

て頂きたいと思ふ。

一 火事の見舞

【夕刊】 朝刊に對して、新聞紙の夕方刊行するものといふ。尙、かうした突發的の事件(病氣、死亡)に對する見舞には、時候の挨拶などは抜きにして、直ぐに事件に對つての見舞の主意を書きつけるのが普通である。

【今朝お宅あたりが云々】 今朝あなたのお家の近所が火事だつたとの事が、夕刊に出てゐると父がいひましたの意。「……」の下に、「で御座います」の意が省かれてゐる。咄嗟の場合の氣持を出してゐる書き方である。

【類焼區域】 「類焼」は他家の出火によつて自分の家の焼けること。「區域」はくぎりをつけた境界。くぎり。

【まことにあやふやで】 全くはつきりしませんで。

「あやふや」はたしかでないさま。あいまい。

【憂目】 つらいこと。

【立つたりゐたり云々】 立つて見たり坐つて見たりすること、氣持の落着かぬさまをいふ。何でもないやうであるが、この際の不安な落着かない氣持を非常

によく現はしてゐる。手紙の上手下手はかうした誠實な氣持を卒直にうちまける所にあるが、しかし、ここに至るのは、容易なやうで、なか／＼出來るものではない。

【どうか御無事で云々】 どうか御無事であつてくれる事を欲するといふので、どうか御無事でくれと願つてゐるの意。

【お取込中云々】 混雜してゐる中でせうが……。この言葉も、相手の立場を十分に察し、同情してゐるのではないと書けないものである。手紙文を上達しようと思ふ人には輕々に見のがせない語句と思ふ。

【をり返し】 手紙を見てすぐ返事すること。

【ませ】 「ます」の變化で、「ます」は動詞について敬意を表はす助動詞。

【早々】 「草々」とも書く。取急ぎ、意志を十分に盡し得ませんでしたといふ意で添へるのである。

右の返事

【ほんたうに危いところ】 實際危く類焼するところでありましたがの意。

【空地】 建物などのない土地。

「むう／＼云々」 もう／＼寄せて来るといふのよりも、もつと身近かに強く聞える。

「思ひきつて云々」 覺悟してゐました。思ひあきらめてゐました。

「風足が早い」 風の過ぎて行のが早いのを、即ち風が強く吹くのを、風の足が早いといつたのである。

「この世ながらの地獄」 地獄とは死んでから、あの世にあるのだと思つてゐたのに、でなくて、この世にありながら、この世がそのまま、地獄であると思はれたの意。「地獄」は佛説に、地下五百由旬で、鐵圍山の間にあるといふ想像上の世界。即ち六道輪廻の最下層にあつて、現世で悪業をしたものが、死んでからこゝに落ち、苦報を受けるといふ所。閻魔がこれを主宰し、鬼類がこれに屬し、罪人を苛責するといふ。八大地獄、八寒地獄、八熱地獄等すべて百三十六の種類があるといふ。

「見るかげもない」 それと見える様子が無い。こゝは家らしい様子もなくなつたの意。

「お察し下さい」 この一語は、既に述べた簡単な火事の状況、並びに類焼を免れたこの一家の様子に對す

る想像をいやが上に逞ましくさせる。取込中で詳しく書いてをられませんから、以上でお察し下さい」との意味でもあらうが、實に効果的な語句である。注意すべき語句と思ふ。

「鉛筆のはしりがき云々」 この結尾も、いかにも取込中の様子をよく表はしてゐる。

二 寫眞を贈る

「贈る」 物をやる意。「送る」と違ふことに注意。

「と言つて」 それかと言つて。

「反身の氣取つた姿」 身體をそらして、いかにも勿體ぶつた姿。

「誰にもお見せになつては云々」 誰にも見せてはいやです。この語句、いかにもお互の間の親愛の情を表はしてゐて、次句と共に本文を生かしてゐることに注意されたい。

「後生お願ひです」 「後生」は來世、未來、死後生れかはつて行く所。普通人に哀願する場合にいふ。

「かしこ」 「かしこし」の略で、婦人の手紙の終りに書く。

右の挨拶

「お世辭」 「世辭」は他人に對してあいそのよい言葉。

「他人らしく」 友達らしくなく知らぬ他人らしく。

「心もち…」 さうと思へば、さうらしくも思はれるといつた程度に、ごくちよつと…の意。

「目許」 目のあたり。目つき。

「鼻筋」 眉間から鼻の先端までの線。はなみち。

「お髪」 「おぐし」と訓む。

「ほんたうにありがたう云々」 前に「ありがたう云云」と書き出し、最後に再び語勢を強めて「ほんたうにありがたう云々」と重ねた所、いかにもうれしい、ありがたい氣持が表はれてゐる。

參考篇

次に服部嘉香氏の著書から「見舞狀の認め方」と「贈遺狀の認め方」の注意事項中、直接本課に參考となるやうな部分を抜萃しておく。

見舞狀の認め方

見舞狀は、時候(暑中、寒中)病氣、災難(火事、地震、水害、風害、落雷)などにつき、安否を慰問し奮勵を鼓舞する手紙で、用途が實に多い。時候見舞は形式的にすることが多く、特に暑中見舞は、年賀狀と共に印刷交際の際の年中行事となつてしまつた。しかし印刷交際とはいへ、ま

るつきり出さなかつたり取りつ放しにするよりは、いゝ。病氣、災難の見舞は微塵も形式的であつてはならない。災厄は必ず突然に起るもので、その遭遇者の困惑、悲觀は想像以上にある。それに對しては上の空の見舞をしたのでは相手は一層自分の災厄をみじめに感じ、世の中をものはかなむだらう。心からの慰問でなければならぬ。同情の眞心は、文面にしみ／＼と表はれるやうでなければならぬ。

もと／＼災厄は突然に起る。それを聞いた時の驚愕も同情も咄嗟である。随つて文面も、冒頭からその心持を述べねばならぬ。安否は勿論、時候などの虚禮的挨拶を省くのである。

災難や病氣の見舞は、それを知ると同時に出すべきものだ。長患ひの人には時候の變り目とか、見舞品を贈るとかに見舞ふ。

見舞狀の返事は特に急速に出すことが必要だ。相手の眞情を無視し、その關心を侮蔑することは、結局自身身を輕侮することになる。もし本人に於て書くことが出来なければ、代筆をさせて差支なからうが、周圍のものが心得て、本人の指圖を待たず取計らふのが當然で、さ

もなければ、本人そのものの信用を失はしめてしまふ。
贈遺状の認め方

物品贈答の無用を唱へ、その繁雑を厭ふ人もあるが、日常の交際上、極めて頻繁なものであるから、随つて手紙にもその方面に關するものを認めることが多い。物を贈る時は必ず誠意を旨とし、手紙の文面にも十分誠意の表はれるやうにせねばならん。

進物には「差上」の語を避けるのがいい。「差上」も敬語ではあるが、今日では誠意ある語として響かないやうになつてゐる。「進上」「拜呈」「御目につけ」等を用ひる。目下には「差上」「差出」で差支ない。

到來品で珍しいものを贈る時は、手紙に「到來に任せ」「遠來の品」などと書く。贈る時は「御福分致候」と書き、貰つた方では「御裾分被下」とするのが禮である。

贈物の手紙には、必ずその由來を認めねばならん。無意味に物を贈るのは失禮でもあるし、先方が目上の時にはあらぬ誤解を受けやすい。

贈物を受けた時は、返禮は他日適當の時機を期するとしても、禮状は直ちに下さねばならん。先方から着否の問合せを受けた後に始めて禮状を出すのは、きまりの惡

いものだ。(書簡卓上便覽)

自修文

手紙の話

(書翰文講話及文範)

豫備篇

前課と關連して、手紙の効用その價值及び手紙を認める場合の心構へ等を會得せしめる爲に「手紙の話」を擧げた。實際、私どもが手紙を認める場合に、その一本の手紙の價值、その手紙の與へる効用、影響等を顧慮する事は殆どないといつてもよい。これが手紙でなく、その用件を以て他人を訪問するといふ場合などに於ては、服裝の果から、言葉の末に至るまで、相手に好感を與へようとか、自分の意志をよりよく相手に通せしめようとか心を配るものであるのに、手紙となると、全然この心遣ひを忘れてゐる。これは明らかに大きな間違である。本課によつてよくこの間違ひなる事を理解し、手紙の重大使命を會得し、現在、將來の社交上に利する所あらしめたい。

〔手紙の話〕 手紙一般の價值、効用、並びに手紙を認める場合の一般的注意を喚起した一文である。

教授篇

先づ手紙のこの人生に、社交の上に如何に

重要な使命を持つものであるかを説き、手紙は多く書けば書く程その骨が呑みこめて上手になるかに言及し、再び手紙の價值を述べ、特に手紙の文と一般文章とは要領の違ふものであるから、手紙の文は特別の修養を要する事を述べてある。前課の自修文として擧げたものではあるが、實際教授に際しては、本文は先に讀ましめて、手紙の使命、効用その特別な文章を理解せしめて、その後前課手紙文を學習する方が、前課の價值を一層適確に把握させる事が出来ようかと思ふ。

〔筆を持たずに云々〕 筆を持つて文章を書かずに書かれる人はまああるまい。筆は、文章を象徴してゐるとも見られるが、こゝでは、次の句に「筆を持つのは云々」と説明してあるから、實際に筆そのものをいつたと見るべきであらう。

〔就中〕 「なかにつぎ」の音便。とりわけ。

〔用文〕 用事のある文章。實際的に必要な文章。小説とか感想とかいつた藝術的な文章に對して、一般俗用の文章といった意味。

〔社會〕 相互に結合し、相互に協力して共同生活をなす組織又は團體をいふ。世の中、世間。

〔元來〕 もとく。

〔緊急な云々〕 さしせまつた用事、身まはりの用事、またちきに自分に關した用事を果すもので……。

〔この方の目的〕 さうした用事のめあてとする所。

〔響の聲に應じるやうに云々〕 聲を出すとすぐとそ
の反響が来る、このやうに、その手紙を書く事によつて、その用事に對して、どんな風かの變化が起つて來なければならぬ。手紙を書けば書いたで、それだけ先方を動かすやうでなければならぬの意。

〔反應が起れば云々〕 手紙を書いた事によつて何等かの變化が起る、さう變化すれば、その變化には自分にとつていゝ工合になるか、不利益になるかどちらかになるものである。

〔實際の必要を云々〕 實際日常生活上、いろ／＼の仕事をして行く上に必要だと感じて、その爲に文章を上手に書きたいと思ふのである。

〔覺書〕 後日思ひ出す便宜の爲にその事の大體を記しておくこと。

〔感に餘つて云々〕 非常に感激したので、その時の心持を記しておく。

その度合もわかる。即ち大した程度まで自覺してゐないの意。

〔床〕 床の間。

〔卓〕 テーブル。臺。

〔千金の値ある〕 千圓もの値打のある。

〔健全な自覺ある云々〕 偏りのないしつかりとした自覺を持つてゐる、新しい勢を以て盛んになりつゝある國民は……。

〔業務の忙閑〕 仕事の忙しいかひまであるか。

〔社交の程度〕 交際の度合。

〔機會〕 時。をり。

〔國風〕 國全體に行はれるならばし。

〔偶々〕 時々。時たま。

〔輕視〕 かる／＼しく思ふこと。

〔その方法を研究し云々〕 手紙を上手に書く方法を研究し、又、その手紙を上手に書いてだてをならひをさめることが、他の學問や藝道と同じやうであるのが當然の事と思ふ。「學藝」は學問や技藝。

〔總じて〕 大體。

〔物事を粗末にするのが云々〕 物事をなげやりに

〔文人〕 文章を仕事としてゐる人。文學者。

〔著述家〕 書物を書き著はす事を自分の仕事としてゐる人。文學者などもこの部類に入る人であるが、普通には文學的作品を書く人を除く、その他の文章を書き著はしてゐる人をいふ。

〔晴れなもの〕 おもてむきなもの。一般に文章はどうしてもそれを讀む人を豫定して（たとひ意識的ではなくとも）書くものであるから、心の中にあつた場合と文章として表はれた場合とを比較してみると、普通着と他所行着との違ひが出て來るものである。

〔身に近い〕 自分に直接な關係を持つ。「手近かな」と同じ意。

〔をりにふれ云々〕 をりにふれ（時に當り）も場合に當つても同意で、語を重ねて意味を強めたのである。何か事ある場合に當つて。

〔書翰文〕 手紙文。

〔巧拙に就いて云々〕 上手下手に就いて心配する人が少いのは不思議な事でないか。

〔自覺心〕 自分の地位や價値を意識する心。

〔自覺の程度も云々〕 どれ程まで自覺したかといふ

ぞんざいにするので、不幸がやつて來るのである。丁寧に、注意してやつたならば、不幸などはやつて來ないの意。

〔自覺的な云々〕 自覺してゐる世の中の内なりゆきと一緒になつてついで行く事が出來ない。世の中一般が自覺してゐるから、その中に入つて自覺のない人はのけものになされ、おきざりにされるといふのである。〔態々服装を整へて云々〕 その爲に特別に着物を着かへて家の外に出て行き……。

〔用事を談じ〕 用向きを話し合ひ。

〔くつろぐ〕 寛ぐ。ゆつたりした氣分になる。

〔どれだけ念入りに云々〕 どれ程氣をつかつて文句を考へて書いてもよいわけである。實際はがき手紙の果たす任務をこれ程に考へて見た時、今更ながらその重大さ、便利さに氣がつかせられる。この所は十分に心に留めおくべき所と思ふ。これだけの自覺があつたら、實際手紙の文章でもその書き方でも、自然と上手にならずにゐないであらう。

〔情意を交換し云々〕 お互の氣持とか、思ふ所を知りあひ、用件の趣意をはつきりとのみこんでしまふと

いふ事が出来ないから……。

「それ故手紙の文は云々」普通に手紙は話すやうに書けばよいといふ、然し、その話すといふ場合は、實際には（本當はさうでなければならぬが）その話の効果といふ事を豫め十分に意識して話すものではない、それ故にお互に聞き返してみたり、又甚だしい場合には誤解といふものが起るのである。又、直接話す場合には、語勢とか顔の表情とかいふものが非常に話す内容の理解を助けるが、手紙の場合には、さうした事が無い、そこで手紙を書く場合には、話すやうにといふ事以外に、更に特別な注意、従つてその修業が必要となつてくるのである。

【修業】 學業又は技藝を修めならふこと。

參考篇

手紙を認める上の極く大まかな注意を擧げて参考にする。前課に寧ろ附けるべきかと思ふが、本課は前課と關聯してゐるのであるから、共に利用して頂きたい。

「手紙を書く時の心づかひは敬と愛との二つに盡きる。先方の目上たると目下たるとを問はずその人格を尊敬し假にも人を見くびらぬ事これが敬である。又先方の境遇

や折節の喜憂をよく思遣つて同情するを忘れず、常に偽らざる赤心を披いて出来るだけ先方と親しむ務にする事、これが愛である。この敬愛二つを程よく調和させて行くのが手紙の極意である。これを具體的に説明すると、

- 一 認め方は必ず法式を守り、文字は成るべく丁寧に読み易く書け。
- 二 出来るだけ自筆で書け。——病氣以外の代筆は昔から無禮となつてゐる。
- 三 社交の手紙は力めてまめに書け。
- 四 社交が、つた手紙では、いつでも先方の事を先に書き、自身の事は（よし大切な用事でも）後に書け。
- 五 情の激した時には出来るだけ時間を置いて筆をとれ。
- 六 眞情を主とし、文藻を衒はぬやうにせよ。
- 七 滑稽は時と場合を考へよ、弔慰の時、嚴肅な場合は慎め。
- 八 いかなる手紙にも後々の事を忘るな。
- 九 返事は出来るだけ早く出せ。
- 一〇 手紙を書くには充實した精神を以てせよ。

（書翰文講話及文範による）

八、九 爽かな心

河野省三

（ラヂオ講演集）

豫備篇

明治維新によつて甦生した日本は、この六十年間、海外文化の攝取と消化と國力の伸張とに忙殺されて來た。そしてそれは泰西の文明に追着かうとする爲の知識吸引であり、機械輸入であつて、形態的な膨脹への過程でしかなかつた。それが主知主義の教育を要求したことはいふまでもない。かうして進みつた今日が思想國難を嘆ぜねばならぬ結果に及んでゐるといふことは見え過ぎた事實である。それは、今心ある人々の唱へる様に、我々日本人が六十年間あまりに多忙を極めたために、心を練るといふこと——古い日本精神を顧る暇のなかつたといふことではない。パトンを忘れた織走の選手がテニスを切つた利那の周章と同一軌である。ここに至つて我々は精神的に復古しなければならぬ。その進路を適確に示した金字塔は將にこの一篇であるに相違ない。その心持で、若い生徒の心の奥へこの「さわやかな心」を植ゑ付けたい。「神々しく、すがすがしく、晴れ晴

れしい心持こそ、實に我々日本人が、遠い遠い昔から養つて來た心の眞の姿」である。「このさわやかな心を基礎とした生活を、常に、快活にして眞面目なる態度」といふのである。この態度に徹底させるのが教育に係る者の最も重大な使命でなければならない。

【河野省三】 倫理學者。國學院大學々長。明治十五年埼玉縣に生れ、三十八年國學院大學卒業。「神道の研究」「國民道德史論」「國民道德概要」等の著がある。

【ラヂオ講演集】 ラヂオ放送に於ける諸名士の講演を集めたもの。東京中央放送局編、東京博文館發行。本文は大正十年の講演集。

教授篇

我が日本人の精神的代表である「東海の天に聳える富士」と「朝日に映る山櫻」、「日の丸の旗」、「明治神宮」、「松の緑の滴るお濠」。そこに作者は尊い、日本精神の發祥を見出してゐる。即ちかういふ物に對して、それに十全の内容を含めて意義つけて行く所に作者の人格の純眞さがあるのである。そこに擧げられた日本精神は

麗しい崇高な氣分

晴れ／＼したみやびやかな氣分

活動的な生き／＼とした気分

すが／＼しい尊い気分

神聖な気分

この五つの気分を産みだす源が日本精神なのである。そして、それは

遠い／＼昔から養つて来た心の眞の姿

であつて、更にそれが

わが國民性の本質

で

いはゆる大和魂の眞髓

に結合されてゐる。これらの心持を、作者は第一明治天皇の御製に抽象してゐる。かうして、大和魂を我々の實生活の上のどこに具現し、要求しようとするのか。

「この世に於て毎日毎日の生活を營むに當りまして最も大切な気分であり、かつ價値のある態度であるとしてゐるのである。また

「物に屈託しないゆつたりとした心」

「他を排斥しない穏やかな心」

「表裏のない」温味のある生き生きとした生活」

「建設的に、有意義にすべてのものを生じて行くこと

ろの積極的精神」

等の生活態度をうち建てさせようとするのである。尙、作者はこの間に「神道」を發見してゐる。次に我等が六十年間忘れられるともなく忘れて来た、

「明るく、淨く、直き心」に復歸せねばならぬことを高唱してゐるのである。ここに第二の御製が輝くのである。最後に作者が我等に強く望む所は

「このさわやかな心を基礎とした……一番よく眞價を發揮するものがあると信じます」

の一節に表れる快活な、眞面目な態度であるのである。

その一

「崇高な気分」 けだかい氣持。尊嚴な感じ。

「打たれる」 氣分が強く湧き起つてくるの意。

「映る」 ぱつとはえる。

「山櫻」 櫻の一品種。高さは五六丈にもなる。樹皮は暗紫褐色でつやと灰白色の斑紋がある。四月頃小さい花が咲くが、その色は淡紅白色であつさりした趣があり、昔から賞翫されてゐる。

「雅やかな気分になる」 優雅な氣持になる。上品なおくゆかしい氣持になる。

「活動的な」 勢のよい。はつらつとしたといつたくらゐるの意。

〔明治神宮〕 官幣大社。神宮は伊勢神宮、熱田神宮など、特に尊崇する神社の稱。東京市澁谷區代々木に鎮座します。明治天皇、昭憲皇太后の靈を合祀し奉つてゐる。例祭は十一月三日、即ち明治の天長節當日で、今は明治節といふ。大正四年三月二十五日新始祭を行ひ、造營に着手してより、約六ヶ年を費し、大正九年十一月一日に鎮座祭を執行された。神宮には内苑及び外苑があり、舊代々木御料地を内苑とし、舊青山練兵場を外苑とされた。御社殿は樓門、拜殿、本殿等の建造物を合せて總坪數六百五十坪、本殿は全部木曾御料林産の檜材で造られてゐる。拜殿に登つて近く拜すると、芳しい檜の香氣が強うつて、いかにも神の新しい宮居らしい一種の崇高な感じに打たれる。拜殿から中門を通して奥は即ち神靈のおはします内の院で、衆庶の濫りに窺ふことを許さない神聖な場所である。様式はすべて日光東照宮、香取、平安、兩賀茂各神宮、出雲大社、靖國神社等を參酌し、建造中最も高尚莊嚴なものを選んでゐる。内苑には泉水あり、樹木あり、

これ等を利用して土地の高低を設け、神殿の周圍は特に丈高き大樹を植ゑ神聖な雰圍氣を醸成させ、神宮前には南方二筋（他に西方山谷口よりするものあり）の參拜道路を造つてゐる。又外苑は内苑の東方約十町の地に位し、幅員二十間の大道を以て内苑と連絡してゐる。その總面積は十五萬餘坪で、舊青山練兵場一帯の地域及び青山權田原町の全部を以てこれに充ててゐる。

〔神宮橋〕 表參道から神宮前入口。

〔白木のお鳥居〕 これは表參道から、神宮橋を渡つて立つ第一の大鳥居である。この鳥居は臺灣産檜材（樹齡一千年）で造られ、柱の周圍十一尺一寸五分、柱と柱との間二十七尺、高さは二十八尺八寸、笠木の長さ四十三尺七寸の極めて壯大なものである。笠木の中央高く金色燦然たる菊の御紋章を鏤めてある。

〔清淨〕 又シャウジャウ。清くて汚れないこと。

〔參道〕 參詣者の歩く道。神宮の社殿に到る道。ここは表參道（南參道）である。明治神宮の參道には南北西の三道がある。青山方面よりするのを表參道（内苑内南參道と稱する）省線原宿よりするものはこの口による。千駄谷方面及び代々木驛よりするのを裏參道

(内苑内は北参道と稱する)と別に神域の西方山谷口よりするものがあつて、これを西参道といふ。このうち西参道が拜殿に到るのには最も近い。

〔吸ひこまれるやうに〕 ひきこまれるやうに。

〔すが／＼しい尊い気分云々〕 胸の中がからりとしてしかも、何ともいひやうのない尊い氣持がいつぱいになる。「すがすがし」はさわやかに快いこと。

〔隆盛〕 さかんなこと。繁榮。繁昌。

〔神聖な気分〕 尊くて汚れがなく、心身ひきしまるやうな氣持。

〔心の眞の姿〕 心のほんたうの姿。ほんたうの心のありさま。ほんたうの心。

〔肇國〕 國家の基礎をひらき立てること。國をあらたに立てること。

〔純粹な心〕 まじりけなく正しい心。

〔我が國民性の本質〕 我が國民本來の共有してゐる性質である。「國民性」は Nationality の譯で、國民一般が共有してゐる特性である。これは人種、言語、宗教及び政治的狀態の中に發生すると見做され、その發達については、物的要素と心的要素とがあると説かれ

皇の御威徳のなさしめられたところである。明治四十五年七月二十日崩御。御壽六十一。九月伏見桃山御陵に鎮し、後御靈は明治神宮に祀られた。

〔御製〕 天皇御作の詩歌をいふ。皇后、皇太子の詩歌は御詩又は御歌といふ。

〔さしのぼるの御製〕 御題は「日」、明治四十二年の御作である。「さしのぼる」は上へさして登つてゆく意。「さし」は強意の接頭語。「さわやかに」さつぱりしてはれたいこと。「もたまほし」は持ちたいと希望する意。東の空に、夜の暗を破つて、みづ／＼しく生まれたばかりの朝日のやうに、うららかに、明るく、すがすがしく新しく、健かな心、天皇はそれをさわやかといふ言葉を以てお表しになつたのである。じめ／＼した心、こせついた心、それをおいとひになつた御製である。

〔取りも直さず〕 そのまゝに。たゞちに。即ち。

〔純にして直なる気分〕 純眞であつてさつぱりした健かな氣持。

〔價値のある態度〕 値打のある態度。このさわやかな態度を以て事に當れば、單に自分自身が幸福である

である。故芳賀博士は我が國民性として次の十ヶ條を數へてゐる。即ち、忠君愛國、祖先を崇び家名を重んず、現世的實際的、草木を愛し自然を喜ぶ、樂天洒落、淡泊蕭洒、織麗織巧、清淨潔白、禮節作法、溫和寬恕。

〔大和魂の眞髓〕 大和魂は大和心と同じで、日本民族固有の國民精神。我が國民が自然に具へてゐる氣魄。眞髓は神髓が正しい。事物の眞の正味をいふ。

〔人生を美化する〕 人のこの世の中を美しくする。世の中を美しいものにする。

〔明治天皇〕 第二百二十二代。御諱は睦仁、祐宮と稱し奉つた。孝明天皇の第二皇子。御生母は従一位大納言中山忠能の女慶子。嘉永五年九月二十二日(陽曆十一月三日)御降誕。萬延元年七月十日御九歳で立太子。慶應三年正月九日御歳十六歳で御踐祚。翌年八月二十六日御即位。同九月八日明治と改元。十二月二十八日一條忠香公の女美子姫(昭憲皇太后)と御成婚。明治二年三月東京遷都。かくて明治の聖世が行はれ、日清、日露の役を初として内治、外交に我が國威は隆々と伸び、僅々四十五年にして東洋の一小島國は世界五大強國の一に列するの盛大を致したのである。これ一に天

ばかりでなく、相手の人をまで幸福ならしめる。仕事をすれば能率があがり、勉強すれば上達が早いといふやうに、この態度は、何事をなすにも最も値打のある態度であるといふ意。

〔屈託〕 思ひ屈すること。或事をのみ心配すること。

〔妄りに〕 やたらに。わけもなく。

〔かたよりのない〕 一方に偏しない、即ち廣い心持。〔正直な——態度は云々〕 不正直な生活をしてゐると、いつこの不正直が露れるかと、始終ひやひやした不安な弱い生活をして居らねばならぬが、正直であれば天地神明に對しても恥づることなく、孟子の「自ら顧みて直くんば千萬人と雖も我往かん」といふやうな心強い生活が出来るのである。

〔宗教の生命〕 宗教とは我々が人生に超越した崇高偉大なある客體を畏敬する感情に起因し、これを人格化して崇拜信仰し、よつて慰藉、安心、幸福を得て以て人生の缺陷を補はうとする事實。随つて一面には禮拜の儀式を生じ、他面には命令の權威を生じ、遂に同一の信仰を奉ずるものを統括する一定の組織が起る。その信仰、行事、教義又は組織の異なるによつて多くの種

類が分れる。佛教、キリスト教、回教、神道などがこれである。「宗教の生命もまた云々」とは、宗教はその対象となる神佛に、全くその身を捧げて、一意その命に従ふものであつて、私心を挿むことがない故、不正直といふことがない。随つて信者の心は、常に明朗宏潤、一點のやましいところがなく、力強い生活が出来る。これが宗教の生命であるといふのである。

〔天真爛漫〕 自然の性質が麗しく現れるさま。

〔建設的〕 建設は造り設ける。建てる。的は名詞の下について、さうした状態、性質を表す語。ものをつくり設けるやうにの意。ここは「建設的にすべてのものを生かす」「有意義にすべてのものを生かす」といつた文脈。

〔積極的〕 事物の積極なこと。積極は消極の對で、進むこと、改めること、働くこと、續けること、又は表、陽、正、肯定等を表す。「積極的精神」とは、こちらから進んで働きかけて行く心。

〔朝日の豊榮昇る〕 朝日の盛んに榮えのほる意。豊榮は單に榮えと同じ。豊は或語に冠して嘆美の意を表す語。例へば豊御酒、豊葦原等。

〔國體〕 國家を統治權の存在状態によつて分つ區別。君主國體と共和國體とがある。ここはその意ではなく國家成立の状態、一國の政治、風俗の有様、くじらなどがあたる。

〔國民道德〕 National morality. 國民として具有せねばならぬ道德の意もあるが、ここは一國民に特有な道德。

〔神道〕 惟神の道に基き、神祇を敬ひ、祭祀を慎しみ、我が國固有の教を發揚し、人生の救済を圖ることを目的とする宗教。又、敬神尊皇の旨を體し、天理人道を明らかにすることを理想とする我が國固有の教。

〔畢竟〕 つまるところは。はては。

〔原理〕 Principle. 物事の基礎となり根本となり、その秩序發生を規定する條理。

〔傳統的信念〕 「傳統」は系統をうけつぐこと。又うけつたへた系統。「信念」は信仰の念。自信力、代々うけつたへて來たところの信仰の念。

その二

〔看破する〕 見やぶる。見ぬく。「破」は讀破、說破といふ破と同じく、意味を強める爲の接尾語。

〔風靡〕 風の草木をなびかす如く、威風を以て民をな

びき従はしめること。ここは學説を以て衆を服する意に用ひてゐる。

〔本居宣長〕 享保十五年六月七日生。幼名富之助、通稱は彌四郎、後銀鐵、春庵、中衛等と改めたが、宣長の名を以て最も著れてゐる。別に鈴屋と號した。幼より讀書を好み、性強記絶倫、長じて京都に遊學し、堀景山に儒學を學び、醫術を武川法眼に受けた。嘗て賀茂眞淵の冠辭考を讀んで大に悦び、奮然志を立て、遂に眞淵に書を送つて教を請ひ、それより古い文献を研究した。彼の名聲天下に轟くに及び、弟子五百餘名に達した。後紀州侯に仕へ、國政に參與した。享和元年九月二十五日歿、年七十二。明治十六年二月贈正四位。三十八年十一月更に從三位を贈られた。著書は神代正語、歷朝詔詞解、字音假名遣、古今集遠鏡、源氏物語玉の小櫛、玉勝間等數百篇、中にも古事記傳は三十餘年を経て大成した畢生の力作とされてゐる。

〔敷島の歌〕 下句に「と我は答へん」と附けてみるといひ。「敷島の」はやまと(大和)に冠する枕詞。「句ふ」はかほるといふ意ではなくて、はえる(映る)といふ意。

〔たゝへる〕 ほめたゝへる。

〔發揮〕 あらはし示す。ふるひおこす。

〔ひたすらに〕 一向に。専心に。

〔主張〕 自分の意見などをいひはかること。

〔單純〕 まじりもののないこと。單一で少しもこみ入らぬこと。

〔嫌味〕 相手のものに不快の感を起させる言語。態度。

〔毒々しい〕 いかにも毒があるらしい。にくにくい。しつこくくどい。ここは最後の意があたる。

〔雅やかな〕 優雅な。上品な。

〔明るく、淨く、直き心〕 宣命、祝詞などによくいはれた言葉である。智に敏く汚れなく正しい心といつた意。

〔一途に〕 一筋に、一向にの意。

〔人性〕 人の性質。「人性の自然に存する」は、人の性質に本来自然にあるの意。

〔形に生した〕 生々と形に現したの意。

〔經典〕 不變の道理。違ふべからざる法式。又聖人の言を記した書、ここは最後の意で、神の言を記した書、神の教を記した書物のやうなもので、いつたやうな

意。

〔鎮守の森〕 鎮守の社の境内にある森。鎮守は一地方をしづめ守る神。

〔氏神〕 氏の先祖として祭る神。又氏に由緒のある神。藤原氏の春日神社、源氏の八幡神社のやうなもの。又鎮守の神をいふ。うぶすな神

〔簡素〕 簡略質素で、飾り氣のないこと。

〔尙ぶ〕 重んずる。尊ぶ。

〔五十鈴川〕 伊勢度會郡大床山に發し、宇治山田皇大神宮の神域を過ぎて、北流四里、二見に至つて海に入る。別に御裳瀧川ともいふ。

〔鎮座まします〕 「鎮坐」は神靈がその地に鎮まりますること。「まします」は「ます」(ゐる、在りの敬語)を尙一層敬ひていふ語。おはします。

〔伊勢の神宮〕 三重縣宇治山田原に在り、いふまでもなく天照大神を祀る。豐受大神を祀つた外宮に對してそれを内宮といふ。宮域は六十七町餘、附屬の神苑九千六百餘歩、七別宮、二十五座の攝社、十六座の末社があり、東南に神路山を控へ、五十鈴川はその麓をめぐつてゐる。第十代崇神天皇の御代(六年)神鏡を大和

國笠縫邑に移し、皇母豐瀲入姫をして奉齋せしめられたのが起原で、後八十餘年を経、第十一代垂仁天皇の二十五年(皇紀六五六年)皇女倭姫命をして鎮座の地を求めしめた結果、伊勢度會の地に大宮を定められた。そこが今の皇大神宮なのである。もと大神宮の「大」の字は點のある「太」の字を用ひたのであるが、明治五年九月十五日太政官の布告によつて「大」の字に定められた。

〔西行法師〕 俗名は佐藤義清。藤原秀郷九世の孫。左衛門尉康清の子。代々武を以て著れた。義清も亦勇敢で弓術をよくし、鳥羽上皇に仕へて北面の士となり、左衛門尉に任ぜられたが、常に名利を喜ばず厭離の心を抱いてゐた。遂に保延六年嵯峨に至つて剃髮し、西行又は圓位と號した。時に年二十三。爾來専らその天性好む所の歌道に没入して自然を友とし、東西に漂遊した。晩年は洛東雙林寺邊に草庵を結んで閑居し、建久元年二月十五日、七十三歳で入寂した。家集を山家集といふ。

〔なにごとのの歌〕 一首の意は、どんなに貴い神様がおいでになるのか知らないが——實は知らないの

〔拜誦〕 讀むことの敬語。

〔大御心〕 天皇の「御心」。「大御」は或語に冠して尊んでいふ意を表す接頭語。大御燈、大御門、大御寶、大御食等の「大御」はいづれもその例である。

〔因む〕 因縁する。よる。

〔挿話〕 文章又は話談の間に挿む短い語。英語の *digression* である。

〔御一年祭〕 崩御後、滿一年目に取行はれた祭式。佛家の一周忌(一回忌)にあたる。ここは大正三年七月三十日であつた。

〔遙拜式〕 遙拜の式。遙拜ははるかに離れた所で神佛などを禮拜すること。

〔伏見桃山〕 伏見桃山御陵を指す。京都市伏見區にある明治天皇、昭憲皇太后の御陵のある地。

〔祭壇〕 祭事を行ふ壇。まつりには。

〔榊葉〕 榊の葉。神事の際祓を行ふ時、榊の葉に幣をかけて用ひる。榊は山茶科の常綠喬木。高さ一丈乃至四丈に達する。樹皮は綠色を帯びた紫黑色。葉は互生し、長楕圓狀卵形で尖端全縁。革質で厚く、深綠色で光澤がある。五六月頃葉腋に淡黄白色の細花を綴り、

はなく、そんなことを考へる人間心が出ないのである。餘りに嚴肅な感にうたれて——宮のお前になると、ただ有難いやら勿體ないやらで、ほろほろと有難い涙にくれるばかりであるの意。

〔情操〕 *Sentiment*. 情緒の一層進歩したもので高尚な觀念に伴つて發する最も複雑な感情、即ち眞理をたふとび、道徳に従ひ、藝術を愛する如き感情をいふ。

〔淺みどりの御製〕 御題は「天」。明治三十七年の御作。「淺みどり」は薄い綠色にの意。「澄みわたる」はすうつと一面に雲もなく澄み晴れた。「おのが心ともがな」は自分の心ともしたいものであるわいの意。「とも」と「がな」の間に「したい」といふ意の語が省かれてゐるものと見る。「かな」は或語の語尾につけて「……わい」と詠嘆の意を表す感動詞。一首の意は、今更いふまでもなく明らかだ。先の「さしのほる朝日のごとく云々」の御製と共に、その雄渾流麗清新風爽の調、中にこめられた大御心、眞に日出づる國の大天子にふさはしい御製である。

〔御詠〕 陛下又は殿下御製の詩歌をいふ。ここは御製の意。

球果を結ぶ。

〔徐おもむろに〕 しづかに。ゆつたりと。

〔生薑しょうが〕 茗荷科の多年生草本。廣く栽培される。根莖は黄色辛味があり食用となる。

〔目撃めくげ〕 目にとまる。みとめる。

〔涙ぐましい感に云々〕 感激して自然と目がしらが熱くなる。思はず涙ぐむ程深い感激をうけたの意。

〔たゞへる〕 寒いで満たす。たぶたぶといつばいにする。

一〇 南京の壺 柴田鳩翁

(鳩翁道話)

豫備篇 心學道話の一篇である。學心道話といふのは佛説も、儒教も、國學も、天地自然の諸相も、日常見聞の事物も、いづれも取入れ、渾然として一體をなした精神修養談であつて、殊に、本文に見るやうに、興味多く通俗的で、老幼男女、賢者愚者、學不學の別なく、理解し易からしめたものである。興味を以ておのづから聖人の道を勵む、理窟なしに、感情を以て直接に聖人道を行はしめるといふのが、心學道話のねらふ所であつた。本課の眼目は「つかんだものを放しさへすれば、自由自在に手は抜けたものを、一度つかんだら首がちぎれて放すまいと、片意地な生れつき。それで自由自在の大安樂が出来ぬのぢや。」といふ我執の戒と、「どうぞお互に火は消えてはないかと、日々に吟味が致したもので御座ります。」の反省の工夫を強調したものである。こゝを力點として、授けられたい。

〔柴田鳩翁しばたきゅうわう〕 心學者。名は享。字は陽方、通稱を謙藏

といつた。京都の人。晩年頃に目が見えなくなつて、剃髮して鳩翁と號した。初め薩埵さつた徳軒に就いて、學び終に性理の奥義を究め、以來堵庵、道二兩先生の後を繼いで、當時三都をはじめ、天下を遊歴して、宣傳講説し、上は諸大名から下は寒村僻地に至るまで招かれればどんな所でもいとはず出かけて行つて懇切に道を語つてうます、その達辯な事は世に比類が少かつた。天保十年五月三日、五十七歳で歿した。その道話を集めたものに鳩翁道話、續鳩翁道話、續々鳩翁道話、鳩翁道話拾遺があり、その自叙傳として無由言がある。

〔鳩翁道話〕 柴田鳩翁の心學道話を、その息子の武修が筆記したもので、天保五年に成つた鳩翁道話三卷、天保六年に成つた續鳩翁道話三卷、天保九年になつた續々鳩翁道話三卷がある。本話は、續鳩翁道話の「湯の盤の銘にいはいく、苟に日々に新にせば、日々にあらたにして又日に新なり」の話の中に見える。

教授篇 「心學道話は、識者のために設けました事ではござりませぬ。たゞ家業に追はれて隙のない御百姓や町人衆へ、聖人の道あることを御知らせ申したいと、先師の志でござりまする故、隨分詞をひらたうして譬を

取り或はおとし話をいたして、理に近い事は神道でも佛道でも、何でもかでも取込んで、御話し申します。かならず軽口話の様な御笑ひ下されな。これは本意ではござらねども、たゞ通じ安いやうに申すのでござります。」と鳩翁自身道話の中に述べてゐるので、心學道話の本質がはつきりと分る事と思ふ。心學道話は、實に理窟を以て、義理詰に押詰めて道を行はしめるものではなくて、聞いて、感じて、發憤せしめて、おのづからに道にはげましめるといふ所にその使命があり、實際價值があつたのである。本課に就いて見ても、その譬喩の巧みさ、その妥當さ、そしてその叙述の進め方のうまさ、聞く人(こゝ)では讀む人であるが)——の心をびつたりと捉へて、時に笑はせ、時に肯かせ、而も、何時か、自然に道にふるひ立たしめずに置かないものがあるではないか。本課は何等の説明を加へる必要はない、生徒の自讀自得に任せ、時間に餘裕があれば、我執のいかに人生行路を障げるものであるか、自省といふ事が、いかに人格を完成する上に必要なものであるかを、分り易く説明されるやうにしたい。又、鳩翁道話の他の部分を読み聞かせて、生徒をして、心學道話に興味を持たしめ、延いて自己修養とい

ふ事に心を向けしめるやうに導かれたい。

「さる御町内に」 或る町に。

「婚禮ふるまひ」 結婚披露の饗應。振舞は酒肴を設けて人を招くこと。

「なにが」 何がさての略。何といつても。

「お年寄」 ここは町村の五人組の組頭をいふ。後述。

「町役」 町役人の略。名主、月行事、家持、家主等を指す。江戸時代幕領内で町奉行の下に町方に關する民政を行ふ公吏で、身分は町人であつた。

「家持」 家屋を所有する人。家主。

「馳走」 その用意に奔走する義。轉じて饗應の意。

「笹の露にも酔ふ」 少量の酒にも酔ふこと。「尺牘雙魚」の註に「釀酒、竹葉を以てその中に雜ふ、極めて清澄なり。故に酒を謂ひて竹葉となす」酒をササといひ、笹の縁語から露と言ふ。

「下戸」 酒量の少ない人。上戸に對する。支那で庶民の婚禮には、上戸八瓶、下戸二瓶などとあつて、酒を多く飲むを上戸、飲まぬを下戸といふに至つた。上戸、中戸、下戸は財産の多寡によつて三階級に分けた支那の制度である。

「亭主方」 主人側の者。

「氣の毒」 心の毒の義。他人の心配困難などを思ひやつて、自分の心を惱ますこと。

「ちと」 すこし。いさゝか。

「南京の古染附」 あを染のこと。古磁染附ともいふ。藍色に焼きつけた支那製の磁器。それが南京焼であつたのでさういふ。「南京」は燕京を北京といふに對して、

江蘇省江寧府の金陵を明の英宗の頃からさう呼んだ。「大輪の金米糖」 大粒の——。「金米糖」はスペイン語 Concha の訛り。砂糖製の菓子で凹凸がある。

「座中」 座敷に寄集つてゐる人。

「ひらに」 ひたすらに。切に。何とぞ。

「つゝこみしなに」 突込む際に。つつこむ時に。

「きしむ」 軋む。すれ合つて滑らかでないこと。

「どうぞして」 どうにかして。何とかして。

「こじ廻す」 こじりまはす。ねぢりまはす。

「眞顔」 眞面目な顔。

「無理無體に」 むりやりに。むやみに。亂暴に。

「景清と美保谷がしころ曳き」 「平語」 第十一卷宗高扇的の條に「武藏國の住人美尾屋十郎、同じき四

郎、同じき藤七、上野國の住人丹生四郎、信濃國の住

人木曾中次五騎つれてをめてかく。——楯の蔭より

大長刀打振りてかかりければ、美尾屋十郎、小太刀、

大長刀に叶はじやと思ひけむ、貝吹きて逃げければ、

やがて續きて追ひかけたり。長刀にて薙かむるか

見る所に、さはなくて、長刀をば弓手の脇に搦込み、

馬手の手をさし延べて、美尾屋十郎が兜の鍔を搦まむ

とす。搦まれじと逃ぐ。三度搦み外して四度のたび、

むすど搦む。暫しだまりて見えし。鉢付の板よりふつ

と引切りてぞ逃げたりける。——その後甲の鍔をば長

刀の先に貫き、高くさし上げ、大音聲をあげ、遠から

む者は音にも聞け、近くは、目にも見給へ、是こそ京

童のよぶなる上總の悪七兵衛景清よと名乗りすて、御

方の陰へぞ退きにける」とある名高い話である。

「骨接」 骨の折れたのや關節の外れたのを治す醫師。

「難波」は今の大阪こゝに有名な骨接の名人があつた。

「ゆくまいか」 いけないだらうか。

「興」 興味。たのしみ。

「五人組」 江戸時代町村に五戸宛組合せた小團體で、

その中一名を組頭(年寄)とする。浮浪人盜賊を取締

り訴訟、火の番より組内の吉凶災害を取扱ふ制度。

〔司馬溫公〕 名は光、字は君實、宋の陝州の人。神宗の時侍讀學士となり、後樞密副使に陞せられたが辭した。洛陽に在ること十五年、哲宗の時執政となり王安石の新法を廢して天下の害を除いたが在職八月、元祐元年薨、年六十八。太師溫國公を贈られ、文正と諡された。資治通鑑二百九十四卷は名高い。

〔溫公の幼き時云々〕 この話は宋史卷三百三十六、列傳第九十五に出てゐる。

〔はまる〕 陥ること。

〔難澁〕 困難。

〔しかつべらしく〕 然ありつべくの意。もつともらしく。

〔片意地〕 執拗なこと。頑固。意氣張り。

〔安樂〕 心配も骨折もなく安らかなこと。

〔器量のよいのを〕 有爲の才あるのを。才器徳量の義、轉じて容色の意がある。こゝは容色の好いのをといふ意とせぬが好いと思ふ。

〔癩氣〕 癩の氣味。氣に入らぬこと。怒り。

〔身代〕 その身の屬する財産。こゝは一家の破滅を譬

へた。

〔明德〕 天より受けた曇りのない本性。「大學」に「大學之道在明明徳」。

〔心安い〕 親しい間柄の。――。

〔旅籠屋〕 旅人宿。

〔七つ立ち〕 朝七つ刻(午前四時頃)に出發すること。

〔とぼく〕 足元のおほつかなき歩き方。

〔えて〕 とかく有りがちなこと。ともすれば。

〔目明き〕 目の完全な人。

〔おのれ〕 罵語で、貴様、てめへ。

〔どう盲〕 罵語で、「どう」は「ど」の延音で接頭語。

〔覺え〕 心當り。

参考 心學は、江戸時代の中葉、吉宗將軍の治下に興つて、廣く天下に普及した社會教化運動である。これを石門心學といふのは石田梅巖を教祖とする心學といふ意である。心學の旨とする所は、「あるべきやう」を、日常行動の實際に體現して、念々刻々の「ある」を創造する點にある。そしてその爲には人の人たる本性を味得し體認しなければならぬといふのである。梅巖は「性を知る時は、五常五倫の道はその中に備れり」とも「性を知

るは學問の綱領なり」とも言つた。性が意識の中に顯現して生々止まざる活動の姿勢をとつた状態を彼は心と呼んでゐるから、従つて「心を得るを學問の始とし終とす」とも、「心を以て性を養ふ」とも言つた。この論旨から言へば、彼の學は既に心學と呼ぶべきであつたが、梅巖は寧ろ「性」に就いて關説する所が多かつた爲に、本性の學又は性學と呼ばれたのであつた。心學第二世の手島堵庵は、一般民衆に呼びかける爲に性學の名を改めて心學と稱した。梅巖の教義を心學と呼んだのは、恐らく堵庵を以て初めとするであらうが、心學の語は既に早くから陽明學派を指す爲に用ひられた。(中略)又、朱子學派を心學といふこともあつた。かゝる状態であつたから、梅巖門流の人々は陽明心學に非ることを示す爲に、特に石門心學と唄へたのである。又心學は手島堵庵並にその門下の人々によつて廣く天下に普及した爲に、世間では往々これを手島學と呼んだ。(日本文學大辭典)

心學は石川梅巖によつて創始されたが、梅巖一代は、大衆教化の方面よりも、一味の道友が互に切磋琢磨する修行會輔の方面に力を注いだので、未だ目覺しい社會的進出は見られなかつたが、天明寛政時代に入つては、そ

の門下の俊才、中澤道二、手島堵庵、その子和庵、義子上河洪水、更に堵庵門の布施松翁、北村柳悅、吉田定誓、高田宗儀、井上宗甫、中山甫門、上田唯今、久世友輔、植村賢道、脇坂義堂等あつて、各地に心學を擴め、又、中澤道二門からは關口保宣、植松自謙、北條玄養、大島有隣、中澤道甫等があつて、各地に心學を擴めたので、既に心學の講舎は八十餘の處に達し、二十五ヶ國に及んだ。次いで文化文政頃に入ると、この勢は更に目覺しく、文政末年には百三十餘處、三十四ヶ國に及んだ。この期に活躍した人々は、有隣門の矢口來應、中村徳水、近藤平格、洪水門の薩埵徳軒、奥田頼杖、徳軒門の柴田鳩翁等であるが、この頃から、全國の心學統卒が亂れて、各獨立割據の形勢を示すやうになつた。天保以後となると、この形勢は益々甚だしく、概して心學は更に普及したやうであつたが、各講舎の勢力衰盛があつて、江戸末期となると漸く衰頽を示して來たのである。

一 小さい旅人

薄田泣董

豫備篇 小さい旅人——それは秋も深み行く頃から
びしょ／＼と冷たい時雨のする頃までに、あわたましい
旅を続ける小鳥である。いろいろの小鳥が小さな旅人と
なつて訪ねて来る。そしてそれ等の小鳥を迎へては送り、
送つては迎へたりする間に捉へた小鳥の観察と感想とに
よつて、その小鳥の特徴をよく知らせ、自然界との親し
みを味ははせるに十分なものがある。

〔薄田泣董〕 名は淳介。明治十五年五月、岡山縣淺口
郡連島町に生まれ、學歴は殆どなく、すべて獨學で、
詩壇に出で、明治三十二年、處女詩集「暮笛集」を出し
て、同年「天地有情」を出した土井晩翠氏と並び稱せら
れ、四十年前後まで高踏的な古典的な優雅な詩風によ
つて詩壇に覇を唱へた。詩集には「ゆく春」二十五絃「
しら玉姫」「白羊宮」「十字街頭」「子守唱」等があり、す
べて「泣董詩集」一巻に收められてゐる。詩壇を退いて
からは大阪毎日新聞社學藝部に入り、同紙上に「茶話」

「續茶話」等を連載した。今來は専ら隨筆小品の筆を執
り「艸木蟲魚」「太陽は草の香がする」「樹下石上」等の著
を出してゐる。

教授篇 一讀先づその美しい文章と、精微な観察と
に驚かされる。例へば「長い行列が漸次に雲の中ににじ
みこんでしまふ」とか「枯葉一つ寝返りを打つ音までが
はつきりと耳に入る静けさ」とか、その他いくらでも見
出せる。「ひたきといつたら、まるで悲哀を抱いてゐる人
のやうだ」以下のひたきの描寫、又四十雀の雛の高い枝
に止りそこねて落ちたあたりの描寫、冬の初めの山近い
田舎家の描寫、詩人らしい精微な觀察に敬服せざるを得
ない。そして又、年々渡鳥の数が減少してゐることに對
する作者の淋しい氣持が、小さい旅人への同情となつて
小さな旅人の旅愁が、全體を狭霧のやうに包んでゐる。
この文を通じて、秋の自然を賑はす小鳥の美しい詩味を
味はふと共に、自然に對する鑑賞眼を養ふ一助として十
分であらう。

〔吹きさらし〕 何のおほひもなく、あらはに風にあた
ること。何も遮るものない廣場を風が吹き拂ふこと
多くは秋又は冬の寒い風についていふ。

〔雁よ棹になれ〕 棹のやうに一直線に列つて飛べよの
意。

〔棹になつたら鈎になれ〕 鈎のやうな形（雁の列が
ねちれて曲つた形）になつて飛べの意。

〔にじみこんでしまふまで〕 「にじむ」は墨又は油な
どが染みてひろがることで、次第に姿が雲の中にかく
れてしまふまでの意。

〔聲をからして〕 聲をしやがらして。しはがれる程
大きな聲を出して叫ぶこと。「涸す」は宛字で「噎す」と
書くのが正しい。

〔よく／＼〕 念に念を入れて。極めてねんごろに。こ
こでは、よつほど、非常に、極端にくらゐるの意。

〔人氣遠い〕 「ひとげ」は人のけはひ。人のゐるけはひ
人のけはひから遠いことで、即ち人里離れて、人の來
ない意。

〔小鳥と言ふと〕 小鳥といふとすぐにの意。小鳥のこ
とを考へるとすぐに。

〔あの小さい旅人〕 海を越えて來るあの渡鳥の意。小
さな渡鳥を擬人化していつたのである。

〔あわたましい旅〕 海を越えて渡つて來たかと思ふと

ここに安住するのでもなく、又暫くすると他へ渡つて
行く、それはそはとして落附かない渡鳥の旅。

〔言はうやうのない〕 何ともいひやうのない。

〔淋しい旅心地〕 心細い旅愁。

〔百舌〕 燕雀類のもす科に屬する小鳥。形は鳩に似て
小さく、頭脊は赤褐色、翅は淡黒青で黒白の斑がある。
のど腹は白く、胸は赤褐で小波紋がある。常に小鳥、
蛙、虫の類を捕へて食ふ。秋の頃、頗るかん高い聲で
鳴く。

〔彼岸〕 春分及び秋分の日前後三日づつ合せて七日
間をいふ。春分(三月二十三日頃)を中間とするのを
春の彼岸。秋分(九月二十三日頃)を中間とするのを
秋の彼岸といふ。彼岸は梵語、波羅密多の譯語で、到
彼岸から來たのである。生死の此岸を去つて、涅槃
の彼岸に到達するの意味である。日本ではこの七日間
僧俗ともに佛事を修する慣例がある。極樂で安樂往生
を遂げようとする憧憬心に基づくのである。淨土三昧
經に原因し、淨土宗が盛になつて、一般的の風俗にな
つた。その起原については聖德太子といひ、延暦二十
五年からともいはれる。中日はいふまでもなく七日間

の中の日、即ち春分、秋分の當日の意味である。

【日影】 日の光。

【午過】 午は一晝夜を十二支に分つた昔の時間の名で今の晝の十二時(夜の十時)は子にあたる)で即ち眞晝にあたる。

【甲高い】 調子の高い。かんばしつた聲にいふ。

【矮小】 原文にはセビクと振假名がつけてある。たけが低くて小さいこと。

【くぬぎ】 殼斗科に屬する木。高さ二三丈に達し、葉は栗に似て、形は細長く周邊に刺があり、花もまた栗に似てゐる。雌雄異株で、果實はどんぐりと名づけ、その幹枝はおもに薪炭用に供せられる。

【すばぬけて】 づぬける(圖抜ける、頭抜ける)と同じ意。なみの程度をこえて、とびはなれて。ここは「すばりと抜けて」の意か。

【にれ】 楡。楡科に屬する落葉喬木。幹は高さ十餘尺、周囲十五尺餘にも達するものがある。樹皮は深褐色であつて裂目があり、鱗狀に剝脱する、春花を開いてから、葉を生じ、後に實を結ぶ。實は圓くて大さ三寸許。葉は櫻に似て短い。「はるにれ」「あきにれ」などの種類

がある。木の外皮は藥用にする。

【強い健かな氣持】 力強くいきいきした氣持。

【胸に流れる】 胸に流れこんで来る。胸に感ずる。

【ひたき】 鶉。鳴禽類。大きさは雀ほどで頭黒く、白い細斑がある。背部と翼とは灰赤色で黒い斑がある。

【ひたき】の名は「火焼」で、その背と翅との色に基づくといはれる。翅の上に白羽、黒羽が重つてゐる。嘴と脚とは蒼黒である。秋の末に来てよく囀る。保護鳥である。

【だるさうな】 心のすまないやうな。たいぎさうな。いや／＼ながら、だらしないなどの意。

【枯葉一つ寝返を打つ音】 地に落ちてゐる枯葉が一枚、風のために吹かれて、かさこそと裏返るさゝやかな音。

【やつれた人】 元氣なく瘦せ衰へた人。やつれた人の溜息」といふのは、さゝやくやうなひたきの啼聲を形容したのである。

【にら】 薺。薺は百合科、青葱屬の多年生草本。高さ一尺餘。葉は細長く叢生で、やゝ扁平で臭氣が多い。食用に供される。花莖は葉の間から抽きいで、夏季六

瓣白色の小花を開く。我が國各地に栽培されてゐる。

【拍子に】 はすみに、とたんに。

【昔馴染】 「なじみ」はなれ親しんだ仲。親しい仲。懇意な人。昔馴染は昔懇意にした人。渡鳥であるから、かうした言葉がしつくりと調和するのである。

【自分一人の爲に歌つて云々】 世の中の人を楽しませるとか、世間を導くとかいつたやうな對他的な心で歌ふのではなく、自分一人で歌つて、そして自分一人で楽しみ、慰め満足してゐる孤獨な淋しい詩人のことを聯想しないではゐられない。

【四十雀】 鳴禽類。秋の末、群をなして渡る。形は「やまがら」に似て、頭黒く、兩頬が白く、黒白の翅が頸にまで連つてゐる。背と胸とは灰青色で、翅は黒く、灰色の縦紋がある。腹は白く、胸から尾まで黒い雲紋がある。聲は滑滑でよく囀る。一名「白頬鳥」といはれてゐる。保護鳥で捕獲することを禁止されてゐる。四十雀の名の起原には諸説あるが、或は雀四十をその一鳥に代へるといふ意とも、或は四十は群る意であるとも、又は鳴く聲を寫したものだともいふ。

【時雨】 秋冬の頃、空が暗くなつて時々、ばら／＼と

足早く降つて来るかと思ふと、又すぐ霽れて行く雨。

【空を掠めて】 「掠める」は少しぬすむの意もあるが、ここは少し觸れること、その速力の非常に早いさまをいつたのである。

【おりのなり】 下りるや否や。

【眩しい】 目がちらついて正視することが出来ぬこと。いろ／＼の形や色が目さきに移り變つて煩しいさま。

【すばしこく】 敏捷に。

【雀のたご】 雀擔桶。古名「すまめのつば」で、「いらむし」の巢である。秋の末に木の枝に作られる。白乳のやうで「いらむし」が身をその中に隠してゐる。後に凝つて卵のやうに固まる。長さ五六分。薄黒くて縦に白い紋がある。雀は好んで中の蛹を食する。古くは藥用とした。一名「すまめの枕」ともいふ。

【背をそらし】 前文の「身をそらす」の「そらす」は外すの意であるが、ここは勿論反すの意で、背を後に曲げ胸を張ること。

【産毛】 生まれた時に生えてゐる毛。

【もんどりうつ】 とんぼうがへりをすること。蜻蛉の

進行中、俄に後へ返る際に、軽く身を翻すこと。宙がへりすること。或は(鰻筋斗うつ)戻りの音便かともいはれる。ここは四十雀の雛が高い枝にとまりそこねてクルリと廻轉して落ちながら下枝にとまつたその落ちて行く様子をいつたのである。

〔ませた身振〕老成じみた舉動。「ませる」は年齢よりも大人じみてゐること。大人ぶつた物馴れたやうな舉動をいふ。

〔樹肌のひゞ〕樹皮のひゞわれ。

〔山家育〕山里で成長したこと。

〔きさくな魂〕うちとけて氣輕な心、氣輕でうちとけ易い心。さくい心。

〔みそさゞい〕鶉鶉。鳴禽類。古名「さゞぎ」で、水にゐるから「溝さゞい」といふ。「さゞい」は「さゞぎ」の音便。巢を深山の崖の樹皮にかけて棲む。その巢は人髪、馬尾、麻などで、葦の花を綴り、形は囊のやうで極めて巧に出来てゐる。故に巧婦鳥の名もある。形は雀に似て小さく、嘴は尖つて錐の如く、身は灰色に黒と褐との細斑がある。形や色は種類によつて異なる。冬渡つて来て、春になつて囀る。聲は美しい保護鳥の一つ

である。

〔繰る〕絲などを引出して物に巻きつけること。

〔干菜〕冬、蕪、大根等の菜類の葉を、軒などに懸け、日に干して貯へて、食用とするもの。後出の掛菜もこれと同じである。かき／＼と小鳥のくゞる釣干菜(南窓)「みのむしの掛菜をくらふ靜かさよ」(白雄)

〔絲目が切れて〕絲のつなぎ目がきれて。

〔錘〕古言「つみ」の轉。絲をつむぐ機械の附屬具。太い鐵の針で、これにりうご(鼓の胴の形をしたもので、しらべ絲をつけて、紡錘を廻轉させるもの)を裝置して、りうごにかけた詞絲の運動に従つて廻轉し、綿を引出して絲をつむぎ巻くもの。「廣辭林」の絲車の圖で左手に見えるのがそれである。

〔掛菜をむしる音〕小鳥が――。

〔紡ぐ〕綿などを錘にかけ、引出して絲とすること。

〔舌打〕舌を鳴らすこと。舌鼓。

〔小刻みに〕動作を細くきつてすること。小鳥がびよん／＼と飛びはねるやうなさま。

〔頬白〕燕雀類の一種。鳴禽類。原野の地上に巢くふ鶯より大きく、灰白色で背に黒斑がある。眉と頬とは

白く、翅、尾はほゞ黒斑、尾の兩端に白い羽があり、腹は微赤黄で、胸の下に赤斑がある。脚は赤黄色である。春から鳴いて、その聲は圓滑で、多く囀るさまは小鈴を振るやうである。養つて聲を賞翫する、畫眉鳥。ほじろ。「篠吹くや秋の細みを鳴くほじろ」(三津人)

〔ぐしよぬれ〕すつかりぬれること。びしやく／＼にぬれること。

〔うづら〕鶉。鶉類。多くは原野に棲み、又人家に飼養される。形は鶉の雛に似て肥え、首小さく、尾短く、全身褐色で、黒白の斑點がある。肉は甚だ美味で多くは羹にする。その卵は滋養に富むといふので、近年殊に多く賞翫飼養される。保護鳥で、四月十六日から十月十四日まで(北海道では九月十七日まで)の間捕獲が禁ぜられてゐる。

〔しぎ〕鴨。鶉とも書く。涉禽類。夏秋の頃、田澤にやつてくる。形は「くひな」に似て小さく、嘴は長く、頭から翼まで茶褐色である。背は灰黒色で小さい白斑點がある。胸腹は白い。形や色は種類によつて違ふ。食用に供される。保護鳥で四月十六日から十月十四日まで(北海道では九月十四日まで)捕獲が禁止されてゐる。

る。「しぎ」の名は羽音のしぎが故にいふと。

〔鳴が来る〕原文にはこの後に次のやうに作者はいつてゐる。かういつた風に、私たちの幼い頃には、秋の中頃から春先にかけては、次から次へ渡鳥の群がやつて来たものだ。が、その後鳥撃といふ事が素人にも玄人にも行はれて、だん／＼その巧者も殖えて来るやうになつたり、その他いろいろなわけからして、鳥はめつきり減つてしまつた。で今では私たちのやうな小鳥好きもまあかうして動物園へでもやつて来て、金網につかまりながら羽のちぎれた、尻尾のぬけかゝつた、見すばらしい小鳥を見て、それでどうなりかうなり辛抱しなければならなくなつたのだ。

あのチェホフの短篇の主人公は、かうした状態に陥つて行くのは、たゞ鳥ばかりではない、獸も、家畜も、蜂も、魚も、水も、林も、また人間にしてからがさうで、神の世界の破滅はいづれもう遠くはあるまいといつて、深い溜息を吐いてゐる。私にはこの羊牧人ほどの絶望も想像力もないが、とにかく鳥といはず獸といはず「創造」のこさへたいろんな物象は、それ自らのもつた力の爲に、われとわが生命を食へ盡してしまふも

のらしい。で、とどのつまりは痛ましい『荒廢』で、その次は『荒廢』自らが創造する新世界が現れて来るに相違ない。——私たちはさう信じながらも、今だんだんと亡くなつてゆくあのちつばけな鷓鴣や鶉の運命を思ふと、次に廻つて来る新しい世界の全價値 賭けてまでやはりあの些細なものの生命を惜しがらないわけにゆかない。」

参考篇 本課は作者が京都岡崎の記念動物園を逍遙しながらの、渡鳥についての記憶である。うけふも動物園へ行つて見た。そろ／＼木の葉が落ちかゝつたり日光が黄色くなりかゝつたりすると、何だか急に渡鳥のことが思ひ出されるので、かうして小鳥の檻をのぞいて見ようといふのだ。

小鳥といふと、つい思ひ出すことがある。あのロシアの作家アントン・チェホフの書いた THE REED といふ短篇を読むと、樺の木の中で、老年の瘦せこけた牧人が雨濕のした幹にもたれて、手製の牧笛を吹いてゐるのがある。吹くといつても、調子にも合はない手前勝手、懶い、氣のめいりさうな節で、どうやら屈託さうな物思に沈みながら、思ひ出したやうに時折唇にあてては低く吹

鳴らしてゐる。で、どうかして不圖そこみ通り合はせた獵の男などを捉へては、自分は四十年來毎日のやうにじつと神様の仕事を見てゐるが、どうもだん／＼と悪くなつてゆくばかりで、昔はそこらの野原で鶉だの、蒼鶉だの、鷓鴣だの、小鴨だのと大層な禽の群がるたものだが、今はめつたにその影さへ見られぬ。神の世界はどうやら次第に破滅に傾いてゆくものらしいといつたやうな事をしんみりした調子で呟くやうに説きたてる……。

私は思ふ、これはあなたがち老人の愚痴ばかりではないらしい。私たちの國でも、鳥の事などに多少氣をつけてゐるものは、近頃になつてめつきり渡鳥の數の減つた事に思ひ當るに相違ない。私の母などの話によると、ちやうど御維新そこ／＼の母がまだ十二三の頃には、そこらの田圃へ摘草に出かけてみると、よくお伽噺の國から出て来る老人のやうに灰色の背をした眞名鶴が、稲束か何かの際からひよつこりと出て来る。そして子供つればかりだと見ると、ばかにしたやうな顔付で、のたりのたりと大踏に歩いて来たものださうだ。が、もう私たちの生れた頃には、そんな鳥はすっかり見られなくなつてゐた。それから「私たちが……」と本課の文に續くのである。

一二 諏訪湖畔の冬 島木赤彦

豫備篇 季節に囚んで冬の獨壇場である氷湖の教課を採るべく、作者の郷里である、諏訪湖のそれを描いた文を採つた。

諏訪湖の嚴冬の光景は他の季節とは打つて變つた詩的情緒がある。作者は歌人としての鋭敏な感覺を働かせて、又寫生歌人としての最大特長さを以て描き出してゐる本課、中にも氷原の夜の寂寞を破るかすかな響が、感受性の豊かな作者の心に浸みってくるさまが、手に取るやうに感じられる。これは新しい「砧を聞くの記」といつても宜い文章である。

〔諏訪湖〕 又、鷺湖とも云ふ。信濃國諏訪郡の西部にある。稍梯形で廣さ一四・五方キロメートル、平均深度四・五米、最深七米。湖沼中第一の魚産高を有し年額約五〇萬圓といはれる。冬季はスケート場として賑ひ、又天然氷を切り出す、(本課参照)。海拔七六〇米の高地にある山村水磨。これを匪つて繪のやうな風光で

ある。富士見分水嶺、八ヶ嶽の裾野、鷹ヶ峰鉢伏山などから出る溪流は、皆この湖に注ぎ入り、溢れて西方嶽の間を破つて、東海の大河天龍川となつてゐる。湖畔には諏訪下諏訪、製絲で名高い岡谷市がある。湖面は嚴冬には結氷して、厚さ三〇厘から六〇厘になり、人も馬も自由にその上を往來することが出来る。寒月天に冴ゆるの夜は、曾て銀波激澗の紺碧の水も、銷光宛として玻璃を布いた様に、微茫として際涯がない。この頃になると氷滑りをするために來遊するものが多い。又昔から御渡と蟹氣樓の現出が名高いが、参照篇参照。

〔島木赤彦〕 歌人。本名は久保田俊彦。明治九年十二月十六日、長野縣諏訪郡豊平村に生まれ、長野縣師範學校出身、郷里の小學校や郡視學の職を奉じてゐたこともある。若くして作歌に志して正岡子規につきこの時に従來氏の一貫した態度であつた萬葉調と寫生道とが芽出した。子規の死後、伊藤左千夫につき、齋藤茂吉、古泉千樫、平福百穂、中村憲吉、土屋文明の諸氏と共に作歌に精進し、やがて發刊された「アララギ」に歌を投ずるやうになり、左千夫亡後は大正三年以

來死に至るまで「アララギ」主宰者として活躍し、明治から大正の初年にかけて歌壇を占領してゐた新詩社の星菫派流を驅逐して、素朴眞率な萬葉の正道と、徹底的寫生道とを今日の如く決定的に歌壇の本流とした。大正十四年以來持病の神經痛に悩み郷里に靜養中であつたが、胃病が併發して十五年三月二十七日に至り遂に長逝、年五十一。氏の代表者としては歌論に「歌道小見」「萬葉集の鑑賞及びその批評」歌集に「馬鈴薯の花」「切火」「氷魚」「太虚集」「十年」及び童謡集に「第一赤彦童謡集」「第二赤彦童謡集」等がある。

教授篇 南信濃の嚴冬、湖畔山村の夜の風味が横溢した文であるし、又内容も筆觸も清新そのもので、湖畔の山村の夜の響が美しい韻律となつて描寫されてゐる。湖上の神秘である「神の御渡り」(参考篇参照)を想起した、諏訪湖の冬を目のあたりに見るが如き本文を味讀させた。「たたき」の漁法や、氷切り作業は諏訪湖ならではの想像もつかぬものである。又本課は「響き」が中心點となつてゐる。神秘の響きである。末句の「氷たたきの槌の音は、遠くて近く聞える。藁を打つ槌の音は、近くて遠い感じがする。響くところは相反するけれども、靜

寂に歸するに於て一である」といふ簡處、は本課が作者の實感として描出されただけに、殊に讀者の共鳴を惹起させること大なるものがある。そこに教授上の眼目をおきたいと思ふ。

〔富士火山脈〕 小笠原群島から伊豆七島を経て、伊豆を縦貫し、富士山から甲信を貫き、その間に、八ヶ嶽、立科山、飯綱山、戸隠山、妙高山、燒山などを含んで越後の海岸に至つて盡きる火山脈。

〔八ヶ嶽〕 信濃、甲斐の國境に在る山。八ヶ嶽火山脈中の主峰であつてその南方に聳立する最高峰、この山は二重式火山に屬するが、活動休止後、年久しくその外輪山なども西側は全く破壊され、北部より東方を繞り南西に互つて、高峰嶺々と半圓形を作るに過ぎない。最高峰である阿彌陀嶽は海拔二八〇七米。

〔丘陵〕 土の小高い所。小山。

〔傾斜〕 かたむいてななめなこと。またその程度。「傾斜の最も低い」は傾き具合のゆるやかな所。勾配が全く平地に近い所。

〔地をならす〕 「ならす」は平にする。

〔落葉樹〕 冬期になると落葉する樹。から松、けや

き、くり、えのき、なら、はんのき等はそれである。〔湖水から反射する夕日の光〕 夕陽が湖面に射してその光が傾斜面に照返して傾斜面にある村落を明るくする。また傾斜面の葉が落ちつくすと何の遮るものもなくなるので、冷たい湖面から地面を逼つて吹上げてくるのである。「反射」は照返すこと。他から投射して來た光線を更に投射して返すこと。

〔皮膚面に響きかつ裂ける〕 皮膚面がびりびりして皮膚が裂けるかのやうな寒さをいふ。

〔木槌〕 又キヅチ。槌は物をたくくに用ひる具で、木又は金にて造り木柄をつける。木で造つたものは木槌金で造つたものを金槌といふ。

〔俯目〕 うつむいて見ること。うつむき加減の見方。

〔視線〕 眼の物體に向ふすぢ。目を注ぐ方面。

〔視覚〕 物を見る感覺、即ち物の色彩、形狀、位置等を知覺する作用。

〔交錯する〕 物が入りまじること。即ちここでは視覺には時間がかからないが、聽覺には時間がある。で、この場合でも木槌を揮りあげて氷を叩いてゐるのは明瞭に見えるが、その氷と槌とがふれた刹那に發する音

が少しでもかけ離れたことには、現在さうした事が目には見えても、それと同時に音は耳には入らないで或時間を経て耳に入る。さうしてゐる内に又打つといふ具合に少しでも打つ動作を早めると、前の音と、次の槌の動きとが一時になる事もある。で、ここはこの動作が視力に入ると、音響とが早くなつたり、遅くなつたりして入りまじるといふ意。

〔微に徹して〕 細かい所まで。

〔硬度〕 鑛物學の語。瑕を與へんとするに對する物體の抵抗の程度。ここはかたさくらるの意。

〔勞作〕 骨の折れる仕事。

〔藥製〕 藥は藥と同字、後世藥となる。

〔雪沓〕 雪中を歩く爲のくつ。

〔かつちき〕 古語「かじき」の音便。北國で雪の深い時に、履く物で、履物の裏に密に鐵釘のやうなものをつけて、滑り躓くのを防ぐのである。又皮で作つたものもある。一名「がんせき」「雪ぐつ」「雪わらち」などといふ。

〔半纏〕 羽織に似て襟の返しがなく紐をつけないもの。

〔扮装〕 身仕度。服装。よそほひ。

〔鋸〕 鋸でひき切ること。鋸は材木などを挽き切る具で、縁邊に細かい齒を刻みつけたもの。

〔星の光は水にあつて氷の明りとなり云々〕

星の光が氷や水に反射されるのが、あたかも氷や水から發せられる明さのやうに思はるといふ意。

〔龜裂〕 龜の甲のやうに縦横に裂けること。

〔收縮〕 ちぢまること。

〔睡氣さまし〕 睡氣をさますこと。睡魔を拂ふこと。閉ちようとする眼を強ひて開いてるやうとすること。

〔夜が白む〕 あげがた東の空がほのぼのの薄明るくなつて來ること。あげがたになること。

〔墨壁〕 とりで。城塞。

〔想像〕 英語の imagination の譯。おしはかること。心に多分さうであらうとおもつてみる。

〔底のない響である〕 聞いてゐると気が滅入りさうなもの。底のない響のする響。

〔もの遠い感じ〕 何となく遠い所から響いて來るやうな感じ。

〔静寂に歸す〕 二つの響ともに心の浮立つやうな響

ではなく、物しづかな滅入つて行くやうな、しづかな響であることに於ては同じであるといふ意。

参考篇

歌人としての島木赤彦氏は作歌に對しその歌論に於て「自己の歌をなすは全心の集中から出ねばなりません。これは歌を作すの第一でありましてこの一義を過つて出發したら、終生歌らしい歌を得ることは出來ません。即ち全心の集中と思ふものでも案外一時的發作に終るやうな感動があります。さやうな感動は、十數日を経過するに及んで、心境から霧消して居ます。さういふものは、自己の根柢所に根ざした全心の集中といはれません。(中略)歌の道は、決して面白をかくし歩むべきものではありません。人鷹、赤人の通つた道も、實朝の通つた道も、芭蕉(これは歌人ではありませんが)の通つた道も、良寛、元義、子規等の通つた道も、つゝましく、寂しい道であります。この道を面白をかくし歩かうとするのは風流に墮し、感傷に甘えんとする儕でありまして墮するところ愈々甚だしければ、しまひには、詞の洒落や虚假おどしを喜ぶ遊戯文學になつてしまふのであります。私は、歌の道にある人々に向かつて、濫作は勿論、多作も勧めません。」といつてゐる。そして、これ

は、氏の作風の根本をなすものであつて、氏をして、どこまでも嚴肅な態度で作歌せしめた主張である。故に氏の歌はそれがたとひ平凡な作であつてもそれは單に修辭の上の失敗に過ぎぬものであつて、やはりその底には常に氏のいはゆる「全心の集中」といふ強い感激や、乃至は強い力が籠つてゐるのである。しかし、氏はこのやうに、まづ力強い心持を表さうとする所から、自然その歌調にも重いトーンを選んだ。つまりそれが氏をして萬葉調を好ませ、萬葉集の歌を頻りにものさせた重なる原因と思はれる。故に、同じく氏の作風といつても、その始と晩年とは甚だしく違ふ。尤も、それはその修辭の上のことであつて、その根本に於ては勿論變りはない。でその修辭の上の變化も始のものには、萬葉調が少く、次第に萬葉調の取り入れの方が多くなつて來ただけのことである。左にその代表歌を掲げておく。

○湖の水はとけてなほ寒し三日月の影波にうつろふ

○時鳥夜啼きせざるは五月雨の降りつぐ山の寒きにやあらん

○むらぎもの心澄行けばこの眞晝鳴く蟲の音も遠きに似たり

○天遠くおりて沈める雲の群にまじはる山や雪ふれるらし
尙、晩年の病中吟には次のものがある。

○信濃路に歸り來りてうれしけれ黄に透りたる漬菜のいろは

○神經の痛みにまけて泣かねども幾夜寝ねば心弱るなり

○隣室に書讀む子等の聲きけば心に沁みて生きたかりけり

○みづうみの氷をわりてえし魚を目毎に食らふ命生きむため

○吾が家の犬はいづくに行きぬらむ今宵も思ひ出で眠れる(最後の歌)

〔神の御渡り〕 この地方では諏訪の神が小坂の女神の許に通ひ給ふ道だといつて、この御渡りがあつてから、人馬の往來を始めるといふ。これはこの氷の神秘として必ずしも毎年の冬ではないが、この地の人々は神秘的な現象としてお祭までするといふ。これは實に神様がお渡りになつたわけではなく科學的にはすぐ説明がつく。即ち氷は攝氏四度に於いて最も容積が小さ

くなるのは誰も知つてゐる所である。四度以下となれば次第に容積が増し零度に至つて結氷する。ある寒い夜が俄に襲ふと、気温は低くなり四度となる。その際湖の水は最も容積が小となる。気温はズン／＼低下して直ぐ零度以下に至る。即ち湖水は一どきに急に全體として結氷するのである。然しその際増加した容積はどう結末がつくか、どうしてもどこかで増加容積がはみ出さねばならない。即ち氷面にもり上つた所が出来ねばならないのである。これが神の御渡りである。

一三 埠頭

長田幹彦

豫備篇 冬の埠頭の感情を叙した文であるが、これは作者長田幹彦氏の最も初期の作であつて、現代の文章のやうに、感じたまゝをすらくと卒直に書出したものではなく、非常に象徴的に感覺的に、技巧的に書いている。従つて、素直な文章に馴れた生徒には實は捉まへ所のない感じを與へる事と思ふ。

かうした文章は幾ら説明したとて、情操の發達しない者には味解出来ないものがある。従つてこれは、語句の上から眞向に説明して行く道を取らず、卑近な實例を擧げ、又は書かれた情趣に近い情景を描寫して見せる等の方法により、幾回も味讀させて、自ら感得せしめるやうにして頂きたい。この點詩の教授法と同じやうなものがあらうと思ふ。豫めこゝを注意して教授に臨まれないと思ふ。

「埠頭」 港灣内の陸岸の一部を長く海中に突出した構造物で、その兩岸に船を繫留して、海陸の連絡に便す

るもの。

「長田幹彦」 小説家。明治二十三年三月、東京市麹町區九段中坂に生れた。東京高師附屬中學校を経て早稲田大學英文科に入學、専ら英、佛、露の文學を學んだ。明治四十二年頃から、學半ばで漂泊生活に入り、いろ／＼な生活を體驗した。四十四年の暮東京に戻り旅役者の生活を題材にした短篇「落」を發表し、作家生活の第一歩を踏み出した。四十五年の四月には、當時文壇の繪舞臺であつた「中央公論」に、「零落」を發表し、一躍人氣作者となり、以來今日に至るまで、雜誌に新聞に多くの作品を掲げ、その著は百卷にも達してゐる。現在では主として通俗小説に力を注ぎ、文壇の中心勢力からは離れてゐるの觀がある。氏の兄長田秀雄も亦戯曲家、小説家として、文壇に重きをなしてゐる。

「教授篇」 本文は作者の青年時代に書かれた文章で、當時の文章界一般の風潮であつた、非常に象徴的、感覺的な文章である。冒頭の「灰銀と濃緑との緩やかな諧調」といふのを始めとして、「港の海面はあきらめ顔にどろんとした表情を浮べてゐる」とか、「重工業と産業との露骨

な闘だ」とか、「さういつた轟音は……狂燥曲をかんで行く」とか、「向岸の倉庫も……笑つた」とか、その外細かに見ると、限りがない。従つて、本文は、實は一年生程度の生徒には少しく難解かとも思はれたが、説明の仕方によつては、早くかうした、稍古い形式の文章を讀ませておく事は、他の現代風の、軽い卒直な文章の妙味を理解させる上に、却つて有利ではあるまいかと思はれたので、敢へて、こゝに採録したのである。そのつもりで前摘出したやうな個所は、その語彙の意味を説明すると共に、その句の味はひを十分にくだいて説明され、理解させるやうにして頂きたい。後の語句の解説にも、力めて、この點に注意したつもりである。

「灰銀と濃緑との云々」 「諧調」は英語のハーモニー harmony の譯語で、もと／＼高さを異にする數音の美的な結合關係をいふのであるが、轉じて、美しく調和することにいふ。で、こゝは、灰色が、つた銀色と濃い綠色との美しい調和といふ意。即ち、灰銀は空の色、濃緑は海面の色から、ふと、さうしたはつきりした色感となつて出て來たのである。

「岩壁」 こゝは、船泊を陸地に接近させる爲に、港

灣、運河の埠頭や岸に沿うて作つた擁壁。

「突端」 とつばな。突き出た端。

「揚荷」 船から陸揚げされた荷物。

「あてどもなく云々」 どこといふあてもなく、ぼんやり港の中を眺めてゐた。

「陽光がをり／＼云々」 太陽の光が、時々、おつかならしくちらり／＼と、薄く射しては、ものの上に光をたゞよはせてゐる。即ち、太陽の光が弱々しく射して來て、日だまりを作つてゐるといふのである。臆病らしく」とか、「さしよどんで」とかいふ描寫は、いかにも冬の日の光をよく表はしてゐる事に注意。

「防波堤」 外海から波浪を防ぎ、港内を靜穩にする爲に、港灣に築造する突堤。

「標識燈」 めじるしの燈。

「あきらめ顔に云々」 あきらめきつて、ぼんやりしたやうな顔つき。「どろん」は、海面の穩やかな、澱んだ所からいつたもの。「表情」は、心中の感情、情緒を顔や様子に表はすこと。かうした表現もいかにも、薄日を浴びた澱んだ海面の氣分を出してゐる。

「壓倒的なトン數を云々」 「壓倒的」はすぐれて他に

まさるやうな。自分こそは斷然他にまさる大きなトン數である、いや自分こそはだといつたやうに、争ふやうにどれも／＼大きなトン數の船が澤山立重なるやうに浮いてゐる。こゝの「トン」は船舶の容積を表はすトンである。一トンは、毎百立方呎。但し軍艦は排水量を英トン(二二四〇封度)で表はす。

「ひつきりなしに」 やむ時がなく、しよつちゆう。

「鋼鐵が水に浮んでゐる云々」 鐵の船を浮べる水木の船を浮べる水、かう對照して、考へてみると、何だか前者の水はいかにもどんよりした感じを受け、後者の水からはあつさりした感じを受ける。この句はこの氣分を土臺にしたもので、鋼鐵が水に浮いてゐる、成程いかにも鋼鐵を浮かしておける鈍重さが、どこにも一杯になつてゐるといつた意。「鈍重」は動作がにくくて重々しいこと。

「重工業と産業との云々」 「重工業」は容積の割合に重量の大きなものを製造する工業、即ち製鋼業、船舶業、車輛機械器具製造業等で、これに對して、製絲、紡績、織物、食料品工業、化學工業等を輕工業といふ。この句は、港一帯の様子は重工業と、一般産業とのむ

き出しな闘のやうだといふので、以下の文章を讀むとそれが理解されるであらう。

「繫船岸」 船をつなぎとめる爲の岸壁。

「起重機」 重い荷物を揚卸し、又は水平に移動するに用ひる機械。クレーン。(Crane)

「喘ぐ」 息をきらす。せはしく呼吸する。この擬人法もうまい。

「魔術のやうに云々」 魔術でも動かすものゝやうに動く。とてつもない大きな貨物、到底何物でも動かす事が出来まいと思ふやうなものが、案外すら／＼と動くので、魔術でも動かすやうに感じられたのである。

「墜落」 おつこちること。

「どよみ」 響きとゞろくこと。やかましい響。

「緩慢な律を刻んで」 ゆるやかな調子を以て。「律」は調子。

「水壓のハンマー」 水壓を利用した鐵槌。水壓器は、押上ポンプを以て水を壓搾し、その傳達する壓力を利用して物を扛擧、又は壓縮する機械であるが、この水壓器を鐵槌に連絡利用せしめ、小さい力を以て強

力な作用をなさしめろやう作られたものである。

「サイレン」 通氣孔を有する圓板を回轉し、孔から空氣を噴出させて音響を發せしめる装置。工場などでは大抵時の報知の爲に用ひてゐる。

「絶叫」 出来るだけの聲を出して叫ぶこと。

「汽笛」 船舶、工場等で、蒸氣汽罐から發生させる蒸氣力によつて鳴らす笛。

「うめき」 苦しきのあまりうなること。

「引波の音」 寄せて來た波が引いて行く時の音。

「馬のいなゝき」 馬の鳴く聲。

「チェーンのきしり」 鋼鐵の鎖の物とすれて立てる音。

「轟音」 とゞろきさわぐ音。

「一瞬々々に生れては云々」 極めて短かい時々、生れてはすぐと消えて行くあるおもむきをつくり……即ちさうした騒がしい音が起ると、それについて、ちよつとの間、ある氣分が起るが、それはすぐに消えて行つて、又違つた音と共に別な氣分が起り、それも亦すぐと消えて行くといつたやうなのをいふ。「情調」は單純な感覺に伴なふ感じ。おもむき、氣分、氣持。

「解けたりもつれたり云々」 さうした音が、或時は

離れ／＼に別れて來、又或時はもつれあふやうにこんぐらかつて聞えて來、又或時は、お互に響き合つて、圓天井に鳴り渡る管絃樂のやうに、目先にちらつて渦巻いたりしながら……。「管絃樂」は管樂器、絃樂器を以て合奏する音樂。

「近代生活の狂噪曲」 あわたゞしく移り變る近代生活を思はせるやうな獨創的な變化に富んだ曲。こゝは近代生活そのもの、やうな狂噪曲といつた意の方がよい。

「かなでる」 音樂を奏する。

「風の歎息」 歎息するやうな風の意。

「かもめ」 鷗。游禽類の鳥。形は鳩に似て大きく、嘴端は鈎状を爲し、頭と背とは青灰色、腹は白く、脚は黄綠色。飛翔力強く、よく水中に突入して魚類を捕ふ。

「水面を掠める」 水面をすれ／＼に飛ぶ。

「塵芥」 ちりあぐた。

「七彩にゆらめく云々」 七色に揺れてゐる油のまだら模様がいづつと笑ふやうに、更に揺れる。

「デッキ・バー」 甲板と岸壁との間に架け渡した階段。

「赭顔」 赤い顔。

「トップ」 船の最先の方。

「怪物のやうな船腹」 途方もなく大きな船の横腹、側面は、いかにも怪物のやうな感じを與へる。ここの出帆實際のあわたゞしい様子が、實に印象的に描かれてゐる。

「サイレンが港中に云々」 このサイレンは船のサイレンで、いよ／＼動き出す時に鳴らすのである。いよ／＼出帆する船のサイレンが、港中に反響して、一聲長くうなるやうに鳴り出す。

「それを追ふやうに」 二聲目のサイレンの音が鳴り出す、するとその後からすぐに。丁度そのサイレンの音を追うて行くやうに。

「奏樂」 音樂をかなでること。

「オールド・ラング・ザイン」 その曲は、我が國で「螢の光窓の雪」のあの歌詞を附して一般に歌はれてゐる。別れの曲なのである。

「汽船は小刻みに云々」 汽船はもういつでも自分で

ゐる荷物を入れる赤く塗られてゐる庫もにつこり笑つたやうに思はれた。波の反射光が、倉庫に映つて揺れたのを、笑つたといつたのであらう。この邊の描寫も感覺的に、實によく描かれてゐる。

「だしぬけに」 不意に。

「どら」 銅鑼。打樂器の一。唐銅又は響銅で作し、その形は盆形で、紐でつりさげて、槌で打鳴らす。出帆の時は、これをけた、ましく打鳴らす。

「けた、ましく」 せつ急に。騒がしく。

「タラップ」 船客の昇降の爲に船から岸壁へと、船の船側につりさげ、引上げる事の出来る装置の梯。

「中甲板」 「甲板」は船艦で、幾層にもなつてゐる、その床をいふ。最上甲板、上甲板、中甲板、下甲板、防禦甲板、船艙甲板等に分れてゐる。

「船橋」 船舶の上甲板中央部前方にあつて、船長が航海中、こゝにあつて、船の指揮操縦に當る所。

「身輕な恰好をした云々」 いかにも樂々と仕事が出来さうな支度をした水夫が、そつちへ行つたり、こつちに來たり、はせ違つて……。

「ロープ」 綱。

走れるやうに、蒸氣をあげ、機關を運轉してゐるのだが、岸壁から暫く離れて、廣い一定の所に進むまでは自ら航行せずに曳船に引かれて行く事になつてゐるのである。「小刻みにふるふる」は、小さく刻むやうにふるふるのである。

〔上屋〕 岸壁の上に設けられた待合室式のもの。

〔手巾〕 ハンカチと訓ませるのであらう。

〔五色のテープ〕 五色の紙紐。船の人と、見送人との間にその両端を待つてゐて、船が進むに従ひ、紐は張りそして遂に切れるのである。送られる人は、大抵見送人の数だけ、テープを持つやうになるので、全體では夥しいものになる。「網のやうにからまる」といふのや、挿圖の寫眞等を以て推察されたい。

〔見送る人と見送られる人との云々〕 見送る人と、送られる人との悲しい別れの氣持、いよ／＼の別れに望んでの胸のどき／＼するのを、お互にその紐を以て通じ合ふ、さうしたたゞ一本の、いかにも弱々しいつながらである。やがて船の進行で忽ちきれてしまふ弱い紙紐、その紐が、わづかに、お互の別れの悲しみ、心のときめきを傳へ合ふものであるとの意。

〔はかなく切れて〕 あつけなく切れて。

〔ちぎれ／＼に云々〕 とぎれ／＼して聞えて来る。

〔それは見送る人々の心に云々〕 去つてしまふ、去るなら去るで、後に何にも残さないので行くのであつたら、諦めるにも諦めよいが、別れの悲しい思出を残すものがあると、當座は却つて、それによつて、一層その時の悲しい氣持を誘ふものである。こゝはさうした人情の機微をつかんで書かれたもの。

〔たゆたふ〕 ゆら／＼と動いて定まらぬものをいふ。わざとさうするやうに、いつまでも海の上にゆれ動いてゐるやうに思はれたといふのである。

〔参考篇〕 本文は先にも言つたが、作者の舊著「草笛」の中の小品の冒頭を書改めてもらつたのである。だから本文の執筆されたのは、作者が二十代の頃であつたといふ。作者は言ふ、當時の文章はこんなのが流行したので。「灰銀と濃緑との緩かな諧調」といふ冒頭の文句からして、今見るときぎですが、これが當時の流行だつたのだから、私としては得意だつたのです。そしてこの一文は、當時私ども文學青年の敬慕おかなかつた永井荷風先生からひどく褒められたので、全くいゝ氣になつてゐた

のです。今この文を見せられて、往時を懐かしく思ひ出しました、改作といつても、やはり私としては當時のこの氣分を打壞して／＼勇氣はありません。これは何處を描いたのですかつて、やはり横濱です、全く當時の横濱はそれは淋しい港でしたよ。改作——さうですね、では、終の方をもう少し現在の横濱らしく、出帆の光景を賑やかに、現代風景に改める事にしませう。私は今でもどうも少しセンチ過ぎる嫌がありまして、實際出帆の賑々しい裏にひそむ別離の悲哀に涙しないでをられぬのです。去り行く船から微かに流れて来るオールド・ラング・ザインの曲——たまらぬ甘い悲しみを誘はれるのです。と。とにかく、かういふ作者の氣持は、本文に十二分に盛り込まれてゐる。文字を離れて、この情緒に浸らせるやう導いて頂きたい。

一四 久能山東照宮

準備篇

本課は紀行文の一體で、特に或る一箇所の風景並びにその感想を精叙したものである。いふまでもなく紀行文には長い道中のそれからそれと移り變る景を繪巻物のやうに叙述して行くものと、特に或る一箇所を取上げて、その風景、歴史、感想を精叙するものと二種あるのであるが、本課は後者の代表的のものと見る事が出来よう。第七課の「天龍川下り」の前者の代表的なものと對して、紀行文の異なつた様式を學ばせたいのである。生徒の修學旅行などの模範文として、兩々相待つて全きものを得るのである。

〔久能山東照宮〕「久能山」は靜岡縣安倍郡にある山。靜岡市の東方海岸に聳える高さ約三〇〇米の丘陵であるが、水邊から直ちに屹立して、絶崖をなし、戰國時代には頗る要害地とされた。永祿年間武田信玄がここに城を築いたが、後徳川家康の有に歸した。附近は氣候温暖で、近時苺の栽培が盛んに行はれてゐる。

〔東海道〕 京都から東方沿海の諸國に通じた街道。但し、こゝは東海道線（東京驛から西向して神戸市に至る本線）を指してゐる。

〔參詣する機會を云々〕 お参りするをりがなかつた。

〔暮も押詰まつた一日〕 一年の暮ももういよ／＼とつまつた或日。即ち作者のこゝに參詣したのは暮の二十八日であつた。

〔旅寓〕 旅のやどり。旅宿。

〔少閑を利用して〕 ちよつとした暇をうまく用ひて。

〔年來の渴望を云々〕 長い間しきりと望んでゐたのを遂げることが出来た。「渴望」は喉がかはいて湯水を欲するやうに、しきりと望むこと。

〔東道〕 「東道の主」の略で、主人となつて來客の用を辨じ、又は來客を案内すること。左傳の僖公三十年の條に、「燭之武、見秦伯曰、若舍鄭以爲東道主、行李往來、共其乏困、君亦無所害。」とあるのから出てゐる。

〔森本氏〕 當時靜岡師範學校の教諭だつたといふ。

「東照宮」はこの頂上に祀られてゐる。別格官幣社。祭神は徳川家康。元和二年四月、家康が駿府に薨するやその遺骸をこの山上に葬つて廟社を建て、翌年下野日光山に改葬の後も崇敬舊の如く、正保二年宮號を賜はつて東照宮と稱した。社殿莊麗、社地は遠州灘を瞰下して眺望頗る雄大である。

教授篇

本課の眼目は何といつても作者の感想である。國史國文に依つて素養つけられた作者の大きな國家的信念は隨所に現れて、作者の人柄に限りない懐かしみを抱かせる。と同時に、東照宮の祭神たる徳川家康、又廣く人間の力に對する渴仰、敬虔さもゆかしい限りである。本課教授に當つては特にこれ等は見過し難いものであらう。かうした感激感想は凡て東照宮の歴史的展開に基づいてゐるのであるから、教授に當つては特にこゝに注意して、家康、久能山の歴史的解説を詳かにして頂きたい。それによつておのづからに讀者を作者の同感に導く事が出来ようと思ふ。尙全體に於て一年の女生徒には程度が高いやうにも思はれるが語句等には別段難解なものはないのだから、熟讀味讀によつて十分に理解は出来ようと思ふ。この點も豫め注意されたい。

〔斷雲〕 切れ／＼になつた雲。

〔山腹〕 山の中腹。

〔車夫は前後云々〕 車曳の男は、前のと後のと互に呼び合つてかける。

〔一面の冬田云々〕 見渡すところ一面に冬田で、別に見るべき風情とてもない中に。

〔梨木棚〕 梨木の棚。棚作りにした梨木。

〔後園〕 後の庭。

〔累々〕 重なりあふさま。

〔金色を輝かしたオレンジ〕 金色に輝くオレンジ。「オレンジ」はだいく。だいく（橙）は芸香料の常緑喬木。幹は高さ三米位。葉は互生し、卵形。初夏の頃葉腋に白色五瓣の花を開く。果實は冬季に熟して黄色になるが、翌年の夏には又緑色となる。

〔富貴の色を云々〕 黄色は見るからに暖かな感じ、富貴な感じを與へるものである。

〔柑實〕 密柑のやうな實。

〔どこにも豊かな云々〕 こゝも前の「富貴の色を云云」といつたと同じ氣持風情である。冬枯れの見えない中に、黄金色の累々とした實を見たならば、確

かに豊かな天の恵みがあるやうに思はれるであらう。

〔賑やかな冬景色〕 冬の景色はどこも多く蕭條索莫たる感じがするものである。それはすべて黄枯れて、どこにも活気がないからである。それがこの地方には黄金の實が、果々とどこにもかしこにも見られる。それで非常に賑やかに感じられるのである。

〔北國〕 北の方の國。即ち越後、越中から東北方面の國々をいふ。

〔柑橘の類〕 橙、柚、密柑、金柑、佛手柑、文旦など芸香科の果樹で、いづれも印度東部の原産である。

〔挺出して〕 ぬき出して。

〔物資〕 かなもの。

〔納家〕 物を納めておく小屋。ものおき。

〔母家〕 家の中央の部分。又、物置、長屋などに對して、住居に用ひる建物。

〔三々五々〕 三人、五人とつゞいて道を行くさま。又、ちらほらと、あそこ、こゝと散在するさま。こゝは前者の意。

〔陸續〕 ひきつゞくこと。續々とつゞくこと。

〔城下〕 城のもとにある町。こゝは静岡市である。

〔黎明から云々〕 薄暗いうちから起出て、忙しく立働く農家の人々の生活……。作者芳賀先生の國家的な思想の片鱗が、かうした語句によく窺はれる。「黎明」はあけがた。よあけ。「營々」は忙しく立働くさま。

〔オホミタカラ〕 大御寶。古語で、國民をいふ。平安朝以後に出來た語で、大御田子等の轉じたもの。天皇の大御田の田子等の義で、農民を主として、一般民衆をいふやうになつたものだ、大槻博士は言はれてゐる。

〔海が開けて見える〕 海が廣々と見える。

〔數百年來云々〕 かうした見方も、作者の質實な思想の現はれと見るべきであらう。

〔忍んどう〕 豌豆。豇科の一年生草本。莖葉共に帶白綠色で、莖は卷鬚を以て他物に倚り、葉は羽狀複葉で頂部に卷鬚を出す。春、白色又は紫色の蝶形の花を開き、莢を結ぶ。種子、嫩莢は食用に供せられる。

〔旅舎〕 旅籠屋。旅館。

〔小憩〕 ちよつと休む。

〔石磴〕 石段。

〔且は憩ひ云々〕 休みながら、思ふまゝにあたりの

景色を眺める。「且は……且」は、一方では……又一方ではといつたやうな意味に用ひる。

〔大名屋敷の番所〕 大名の屋敷の入口にある番人のゐる小家。

〔日露戦争〕 明治三十七八年に、日本とロシアとの間に行はれた戦争。ロシアの東亞侵略に對して、我が國が自衛上、已むなく應じた戦争で、明治三十七年二月五日國交斷絶以來、同年八月以降の旅順攻撃、陸には三十八年三月上旬の奉天大會戰、海には同五月二十七八日の日本海々戦等で我が軍の連勝に歸した。三十八年九月五日、アメリカ合衆國大統領ルーズベルトの轉旋により、ポーツマスに於て休戰條約成立。同十月六日講和條約公布、この戦役に於て、我が國は韓國（朝鮮）に於ける絶大の權益を得、南滿洲鐵道、關東州租借の讓渡を受け、又北緯五十度以南の樺太を得、一躍して世界の列強に伍することが出來た。

〔戦利品〕 戦争で得た品物。

〔社務所〕 社社の事務を取扱ふ所。

〔禰宜〕 神官の奏任官の神職。又、官國幣社の判任官待遇の神職。官司の命を受け、祭祀に奉仕し、事務を

分掌する。

〔柱隠し〕 柱の表面にかけて、裝飾とするもの。竹、板、陶器、或は金屬、硝子の類で造り、多く書畫などを描いてある。

〔葵の紋所〕 三つ葉の葵の紋所で、徳川家の紋である。

〔書函〕 書物箱。

〔ふさはしい〕 相應してゐる。光圀も徳川家の一門であるから、その人の撰じた本が、同じく徳川家康を祀つたこゝにあるのは、何となく似合はしいやうに思はれたのであらう。

〔規模が大きい〕 しくみが大きい。眺望が全體として壯大なのである。

〔由來〕 ものごとの由つて來る所。由緒。

〔樓門〕 上に樓のある門。やぐらのある門。東照宮の詳しい説明は参考篇にあげた。就いて見られたい。

〔遺品〕 遺された品。

〔徳川將軍初代から云々〕 徳川家の初代の征夷大將軍は家康、二代は秀忠、三代家光、四代家綱、五代綱吉、六代家宣、七代家繼、八代吉宗、九代家重、十代

家治、十一代家齊、十二代家慶、十三代家定、十四代家茂、十五代慶喜。

「今日よりも寧ろ云々」 明治となつて間もない今日——本文は明治四十年頃の執筆になつたものである。従つて、徳川家は一般民衆の頭に、またはつきりと將軍家としての印象があつたのである。そして又、一般に、鎧といつたものに對しても、珍しい感じのなかつた時代である。これが數百年の後であつたなら、徳川家が嘗ては征夷大將軍であつた事も、全く歴史的にしか知る者がなく、鎧といつたものも珍しい存在となるであらう。さうした時代になつたら、これは非常に興味深いものとなるであらうとの意である。

「大立物」 立物の物は、「者」の方がよい。多くの一團の中で最も尊ばれた人。又、一座中の最もすぐれた俳優。「歴史中の大立者」とは、歴史の中で、最も活躍してゐる、すぐれた人の意。

「鷹狩」 隼、蒼鷹(オホタカ)、鶴(ハイタカ)等の鷹を放つて野禽を捉へしめる遊戯。鷹野、又は放鷹ともいふ。仁徳天皇が百舌野(モズノ)で遊獵されたのを始めとして歴代の天皇も多くこの技を好まされたが、嗟

峨天皇は「新修歴経」を作つて天下に行はしめられ、宇

多天皇の宮瀧の行幸は永く斯道の龜鑑と稱せられた。一條天皇の御代には斯道の巧者が多く出、その技術も精しくなり、公卿も好んでこれを行つた。天皇の野に出て放鷹を試み給ふのを野行幸と呼んだ。鎌倉以後は皇室の式微につれて公家の鷹を飼養する風は衰へたが講武の一助として武家の間に行はれるに至り、徳川幕府となつてからは漸く盛んとなり、毎年十一月には將軍自ら鷹をすゑて鶴を捉へるのを例とした。これを鶴御成といつた。明治維新後は殆ど廢滅したが、近年又宮内省御獵場等に行はれ、一般にも漸く行はれようとする氣運に向いて來たやうである。

「不例」 貴人の病氣をいふ。

「薨去」 三位以上の人の死去をいふ。

「遺憾なく云々」 のころとこころなく言ひのこした。

「大御所云々」 「大御所」は隠居した將軍の居所、轉じて隠居した將軍をいふ。こゝは家康を指す。

「大内記」 内記の上位のもの。「内記」は古昔、中務省の官人。詔勅を起草し、宮中の記録を掌つた。大、中、少各二人あり、能文、能筆の人が選任せられた。

「つばらに命せられ」 つまびらかに命せられ「つばら」はくはしいこと。あきよく。

「心入れて」 注意して。誠意をこめて。

「祭奠」 祭祀の供物。

「譜代の族なれば」 代々仕へて來た家すぢであるから。

「心置かるゝ云々」 掛念する事もない。心配する事もない。

「西國鎮護の爲」 この間に、これに反して、西國の諸大名には外様が多いから、自分の死後は、これ等の大名の向背が心配である。それ故に……といふ意を補つて見るべきである。西國の大名を鎮め護る爲に。

「神像」 神様の像。こゝは家康の死體を指していふ。勿論これは、この文の筆者が家康の死體を尊んでいつたものである。

「安置する」 神佛の像をすゑ祭ることを、安置といふ。

「形勝の雄偉云々」 地勢のすぐれてゐること、實にすぐれてたくましく、又大きくうるはしい場所を選んだ。

「心がかかり」 心にかゝること。心配な事。

「どこから見ても云々」 豫め形勝の地を選んで廟所とした事、又、死に當つて前述のやうな遺言をした事等をさす。家康は表面非常に大ざつばのやうで、その實は末の末まで見通してゐるといふ、極めて用意周到な所があつた。それがよく戰國争亂の後を承けて二百年太平の基を開いた所以でもある。これがこの廟所、遺言の中にも現れ、そこが家康風だといはれるところである。

「伊勢、伊豆の岬端」 伊勢の岬端は三重縣志摩半島をいふのであらう。志摩半島は伊勢國ではないが、こゝは伊勢方面のといふ意味で、廣く用ひたもの。伊豆の岬端は伊豆半島の先端をいふ。

「絶景」 非常にすぐれた景色。

「風光明媚」 眺めが美しく清いこと。

「羽衣傳説」 天女が三保の松原におり、羽衣を松にかけて四方の景色を眺めてゐると、漁夫が來てこの羽衣を見付けて、持歸らうとする。天女はその衣を持つて行かれては、再び天上に歸れぬから、戻してくれと歎く。漁夫は天女の請を入れ、その代りに、天女の舞を

見せてもらふといふのが、この三保の松原、羽衣の松の傳説で、謡曲にも作られてある。羽衣の傳説は、この外諸所に多く、我が國のみでも、近江伊香小江、丹後比治山等にもあり、その他類似のものが多い。こゝは、三保の羽衣傳説で、天女が羽衣を忘れてうつとりと眺める程なもの無理はないといつた氣持である。

【この所に老を養ひ云々】 かうした所に老後を暮らし、かうした地に埋葬された昔の英雄、家康の心地よさは、さぞかしであつたらうと思ふ。「快心」は心地よいこと、最も心になふこと。

参考篇 久能山東照宮。

驛の東南約一〇軒、江尻驛の西南約一〇軒、久能山の中腹にあり、兩驛より山麓まで自動車の便がある。山麓より海に面して迂回曲折せる石段を登ること千數百階にして達する境内は老樹繁茂して神さび、諸鳥喜々として囀り、眼下に駿河灣の展望廣く開け、風光極めて明媚である。社殿は國寶に指定された江戸時代初期の權現造で樓門、鼓樓、神樂殿、神庫、唐門、瑞垣、拜殿、本殿などを具備し、樓門より段々に高く山腹の半地に建てられ何れも石段によつて達せられる。本殿には徳川家康を祀

り、その左右に豊臣秀吉、及び織田信長を合祀してある。拜殿は五間二面入母屋造、銅瓦葺、三間の向拜を附け、朱塗の柱を建ててゐる。樹組には縹緗彩色を施し、墓股は緑青色で内部には極彩色牡丹の彫刻があり、欄間には天人が描かれてゐる。長押下は内外とも黒仕立臘色塗で柱間の蔭戸の地板は金箔押、外部長押上の羽目には雲龍が描かれ、内外の裝飾頗る華麗である。石ノ間、及び本殿も黒仕立臘色塗で、隨所に渡金具を附し、樹組は三手先を用ひ、縹緗彩色を施し、墓股、通脇木などは金泥極彩色を加へてゐる。

久能山はもと久能寺のあつた所、永祿年間武田信玄久能寺を今の鐵舟寺に移してこゝに築城したが、後家康の有に歸し、元和二年四月家康薨するに及び、遺言によつてこゝに遺骸を葬り、城を廢して社殿の造營をはじめ、同三年に竣成したのが現存の社殿である。寶物館は境内にあり、家康以下歴代將軍の遺品甲冑太刀その他約三百點の寶物が陳列されてゐる。そのうちには家康の遺品マドリッド製の置時計があり、太刀には國寶に指定されたものが十三口ある。

(日本案内記)

一五 た き 火(童謡)

葛原 齒
川路 柳 虹

豫備篇

古偉人の遺跡を取扱つた前課の後をうけて、思出すもなつかしい焚火の課題の下に「たき火」と「寒雀」との二篇を採つた。作者は詩壇に於ける雄、特に童謡の教育的價值を高めるために不斷の努力をつづけてゐる詩人たちである。今日、女學校の教科書には多くの詩や童謡や寓話が教材とされてゐる。そしてそれぞれの作者によつてその教育的効果を揚げてゐる。本課に採つた童謡はその童謡本來の使命、童心の叫び、それを生徒に深く鑑賞理會させ、一步進んで自ら試作するまでに感興を湧かせたい。童謡そのものについては、卷一の第九課「風鈴」の参考篇を参照されたい。

葛原齒

詩人、教育家。明治十八年、廣島縣深安郡八尋村に生れた。明治四十一年、東京高等師範學校英語科を卒業。祖父勾當は盲人で生田流筆曲の名手且つ文學者であつたので、作者も學生頃から音楽、文學に天才を有して公開演奏もやつた。兒童文學を研究して

大塚講話會を創始した。雑誌「小學生」を主宰したり、博文館の「少年世界」を編輯したりした。日本女子音楽學校、跡見女學校に英語や國語を教へ、今日は九段精華高等女學校同小學校に教鞭をとり、中央音楽學校の講師もしてゐる。特に童謡研究者、作家として日本童謡社を結び、機關誌「日本童謡」を發行してゐる。著作多く「新唱歌集」十二冊、「大正幼年唱歌」十二冊、「大正少年唱歌」十二冊、「大正少年傑作文」七冊、「大正少女傑作文」二冊、その他少女小説集、學校劇集には多くの傑作があり、童謡集「木馬と白兔」「コンコロ踊」「鐘がなる」「葦の笛」等名高い。

川路柳虹

詩人、美術評論家。名は誠。明治二十一年七月八日東京市三田に生まれた。京都の美術工藝學校及び東京美術學校に學ぶ。明治四十一年河井醉茗等の詩草社の同人となり、詩壇最初の口語詩發表者である。氏の詩には家庭、都會の印象、靜物の靜觀などを題材としてゐる。最近是新律格を唱へ一行十七音の詩を發表してゐる。詩作、詩論の他に繪畫美術の評論家として重きをなしてゐる。「路傍の花」「かなたの空」「勝利」「曙の聲」「歩む人」「數學」「言葉」等がある。

教授編

本課收むるところの二篇、共に生徒の生活に關係の深いものであることを知らせ、次に季節から言つて、秋から冬への時候であることを知らせ、そこから秋冬の懐しいものの一つである焚火を捉へ、更にやさしい同情を湧かす寒雀を語つてゐることに注意させて行くべきであらう。焚火は夕方が懐しい、垣根にうつる誰かの影、ふと見上げると一つ葉が梢にさびしく揺れてゐるし、赤く燃える焚火を圍んで頬を赤くしてゐる子供たちこの童謡の中には作者らしい明朗さがあるし、そこが作者の主張してゐる點であることを(参考篇参照)生徒に味はせたい。寒雀は雪の降る日に見出せる詩情豊かなもの。實感味のある第二節をよく鑑賞させたい。童謡教授については教授者諸氏の最も困難とするところであらうが、生徒の心持を講讀から實作へと引伸ばして行く時にこそ童謡教授のいかに興味深さかを感じるであらう。

一 た き 火

「はいて」「掃きて」の口語。

「落葉のお山」 落葉樹の枯れ落葉を焚火とするために山の高く積みあげたのである。

「もえるよ、もえるよ」 盛んに燃えさかつてゐる

よ。「よ」は感動詞。感動を強く表はすために語を重ねたことに注意させたい。

「日くれ方」 日の暮れがた。

「もえる火の手で」 燃えさかつてゐる焰のために。

「一つ残つてる」 一枚だけ残つて居る。

「あがる煙にゆれてゐる」 ぼつぼつと立昇る煙の煽りのために、ゆらりゆらりと揺れてゐる。敏い直感の表現である。

「少しつめたい」 背中の方は焚火に暖まらないから少し冷めたい。が、前の方は暖く、皆の顔も上氣して赤くなつてゐるとの意。「少し」と限定した處に焚火らしい實感味が見出されるし、又この末聯が本詩の生命であることも肯かれる。

二 寒 雀

「寒雀」 寒中の雀。寒いので日當りにふつくらと丸くなつてゐるのが特に趣のあるものである。

「でんせん」 電線。電氣を通ずる導體として用ひる銅線、アルミニウム線、鐵線等の金屬線で、絶縁物で被はれてゐる。

「かるく云々」 ちよんと輕やかに止つてゐるのを

實感味豊かに言ひ表してゐる。次の「ちよんと鳴く」と照應する。

「ふつくら外套云々」 寒いので毛を立てて丸くふつくらとしてゐるのを巧みに表現してゐる。

「はりがね」 電線の針金。

「粉雪」 粉末の様に降る雪。

「玉雪」 丸い玉の様になつて降つて来る雪。

「ぼたん雪」 牡丹雪。ぼたん雪とも。ぼたぼたと固まつて降つて来る雪。

「なにごたのしい」 粉雪、玉雪、牡丹雪の降つて来る中に獨りしよんぼりと電線の上に止つてゐる寒雀への同情は童心を巧みに捉へて餘りあるものである。

参考篇

左に散文譯を試みる。

一 た き 火

「第一節」 たくさん散り敷いた落葉を掃き集めて拵へられた落葉のお山、マツチを摺つて焚きつけると、パチパチパチと勢ひよく燃える、あれ、燃える。日の暮れかかつたお庭――。

「第二節」 燃えあがつてゐる焰のために、近くの垣根に映つてゐるところの、それ、あの影は、その影は、い

つたいだれの影なんでせう。

「第三節」 たつた一つだけ淋しさうに残つてゐる梢の木の葉がある。それが、ポツポツと勢ひよく燃えあがる煙のために、フワリフワリと揺れてゐる。

「第四節」 焚火を圍んで暖まつてゐると皆なの背中の方は冷たい、けれど前の方、頬はほてつて赤くなつてゐるよ。

二 寒 雀

「第一節」 サンサンと雪が降つてゐる日に電線にちよんと止つたあの寒雀。

「第二節」 寒いので暖かさうなふつくらとした外套を身につけてゐる、電線の針金の上で、ちよんと鳴いてゐる。

「第三節」 粉雪や玉雪や牡丹雪がサンサンと降り續いて来る。その中で、いつたい何が楽しいのですかね、寒雀さん。

「葛原氏の童謡觀」 氏は次の如く言ふ「童謡はコドモを伸ばし、オトナを救ふ。そして殊にオトナを淨化する。それが正しく善きものである時、オトナを神にさへ近づけしめる。沈んや感受性の強い少年少女をや。童

論は少くとも兎角陥り易い見榮と、傾き勝な哀愁とから少女をも解放する。世間には、見榮と哀愁とを併せ好む少女に迎へらるるに十分なる美しさと哀しさとに満ちた句と調とより成る小曲めいた童謡の多い事であつた。が、最近に於ては、殆ど全部が明るくも力あり、而も美しいものになつて來た事は、嬉しくも又驚くべき事實である。約二十年を一日の如く、子供界の何事についても、

單純に、しかし、單調でなく、
平明に、しかし、平凡でなく、

苦心しつづけて、ニコニコピンピンをモットーともしてゐる私は、最近の此の事實の現はれる事の何ぞ遅かりしやとさへ且つ慨きつつも、現在の童謡界の趨勢には心から喜んでゐるのである」と、以つて氏の童謡觀を知るべく、又本課の童謡鑑賞に資する點があると信ずる。

一六 師走日記

服部 躬治

(姉 妹)

豫備篇 本課を學習する頃は恰度冬休の近附く頃であらうと思ふ。一年間の既習教課を反省し本年終課としての本課に入らうとす。緊張心を持続せしめて取扱はれたい。さて、これは少女に代つて書かれた師走の日記で少女の日記文の好模範として採録したものである。少女らしい筆致を以つて身の廻りに起るすべてのものを簡潔に、然も、趣味豊かに記されてゐる。——尙作者は新派歌人の先驅者として名高いのであるが、餘り知られてゐないので参考篇に述べておいた。

〔姉妹〕 少女達のためにもした服部躬治の隨筆散文集。

〔服部躬治〕 歌人。福島縣岩瀬郡須賀川町の人。明治八年三月二十八日に生まれた。初め國學院に學び、後に淺香社に入つて落合直文に師事した。明治三十一年夏、久保猪之吉、尾上柴舟、齋藤雄助、大伴來目雄、菊池駒次等と共に雷會を結び、その詠草は主として讀

賣新聞に載せた。跡見女學校の教師となり作歌を教へた事もある。晩年向島の請地に居住し、萬葉集の評譯や國語辭典の編纂に従つたが大正十二年の震災に遇つて草稿家共に滅びた。大正十四年三月六日東京で病歿、年五十一。尙、参考篇を見よ。

教授篇 本課の日記十四日間の短い文ではあるが、簡潔に殆ど個條書のやうに書かれてゐる中に、少女らしい繊細な心づかひと、快活な晴れやかな氣持と、豊かな受性と細かい觀察とが、リズムを打つてひたひたと流れてゐる。思はず微笑をたへずにはゐられない。日記文はやさしいやうで、むづかしい。些細な事でも、その感じ方一つで津津たる興味が湧くのである。日記文の模範として味讀鑑賞せしめる所に本課の意義がある。

〔師走〕 陰曆十二月の異稱。極月。

〔胴著〕 冬などになつて、上衣の下に着用する綿入れの短衣。

〔さすがに〕 しかすがにの約。さうはいふものの。さうは思ふものの。又すぐれたもの程あつて、音に聞えただほどあつて、なるほど、いかにもなどの意。こゝは前者「流石」をさすがと讀ませるのは、晋書にある孫

楚の故事から出たのである。

〔葵の上〕 箏唄の曲名で、長唄ものである。木ノ本屋巴遊の調曲で、箏は常調、三絃は三下りである。謡曲「葵の上」から出たもので、更に溯れば源氏物語に基つたのである。歌詞は参考篇にあげておいた。

〔あがる〕 終ること。しまひ。

〔鐘さえて聞ゆ〕 鐘の音澄んであざやかに聞えること。

〔飛石〕 庭などに少しづつ離して並べ置く平たい石。

〔南天〕 常緑灌木。南方暖地の自生植物であるが、我が國では觀賞用として廣く庭園に栽培せられる。夏、五瓣の小白花を開き、圓い實を結ぶ。秋實熟して赤く冬に至つて尙存してゐる。雪の朝などは特に庭園に一種の風趣を添へるものである。

〔冬牡丹〕 牡丹の一種。秋に葉を出し、初冬より花を開く。寒牡丹ともいふ。香墨の句に「一つ咲いて面起すや冬牡丹。」

〔端切〕 衣服などを作つた裁ち残りの布。

〔歳暮〕 年の暮をいふのであるが、轉じては歳暮の禮年末の贈物をいふ。我が國の俗として十二月下旬に至

ると親戚知人相往來して歳暮を賀し、互に贈答をやり子供には破魔弓、凧、羽子板、歌留多等を贈る。これを歳暮の禮といふ。今は多く中元の禮と共に商家に行はれる。

〔御主人〕 母に代つて書いたのなら、姉の夫はその名を様つけて書くか、御主人と書くのが普通であり、又自分の名で出すのだつたら、お兄様と書くのがよい。

〔春著〕 春着る衣服であるが、特に正月に着る衣服をいふ。ここは後者の意。

〔見つもり〕 見はからひ。

〔部分け〕 部の區別。こゝは洗物は洗物の方へ、張物は張物の方へ、ふりわけること。

〔文庫〕 紙、筆、その他、雜品を入れておく手箱。

〔反古〕 書畫などを書いて紙の不用となつたもの。轉じて不用な物をいふ。

〔冷え〜と空晴れたり〕 空は晴れてゐるが、いかにも冷やかにうすら寒いさまである。

〔霜柱〕 降霜の甚しい時に、濕りのある地上に凍つて五分乃至一寸位、土と共に柱のやうに立つもの。

〔空風〕 冬、木の葉の落ちてしまつてから吹きまくる

風。

〔新曆〕 來年度の曆をいふ。

〔山茶花〕 山茶科に屬する植物。椿の一種である。花實、葉共に椿に似て小さく、花色は白、紅白、紋り等あつて冬に開く。

〔落水〕 秋、稻の實の頃を計つて、田の水を悉く流し去ることをいふのであるが、こゝは庭の泉水などに他から水を引入れる場合、その入口を小さな瀧のやうな風に捨石を越えさせて水を落とす。それをいつたものであらう。

〔雜煮〕 餅に種々の蔬菜を雜へて、煮て羹とした物。

〔新年祝賀などの時に食する。〕

〔獻立〕 膳部に調理する汁、肴などの料理の次第。

〔重詰〕 重箱につめた食物。特に正月は、煮物、酢の物、口取などを重箱につめて、屠蘇を進める時などに出すものをいふ。

〔口取〕 料理の一種。もと本膳料理に、かちぐり、鬘斗、昆布を三方に載せて最初に出したもの。後には、きんとん、かまぼこ、その他、魚鳥の類を味甘く濃厚に調理して取合せたるものの稱。

〔梅花玉子〕 材料——卵五個、砂糖十五匁、鹽小匙に

軽く一杯。方法——まづ卵を水に入れて茹で、沸立つてから十分程経つた時、あげて水に少しく浸して皮をむき、二つに切つて黄味と白味を分け、白味は細かに切つて裏にかけ、その中に砂糖九匁程と鹽六分程加へてよく攪交せる。黄味は、砂糖六匁と鹽四分とを加へてよく攪交せ裏漉にかける。それから俎板の上に美濃紙を擴げ、上に白味を平に伸し、その中央に黄味を棒のやうに細長くのせ、端より捲いて紙の兩側を糸で結び、それをそのまゝ、布を擴げて蒸籠の中に入れ、蒸湯がついたのを見て蒸籠を上げ、五分間くらゐ蒸す。(蒸器は飯蒸器でよい)そして蒸せた時に取出して紙を取り、冷して十片に切り、一人前二片づつ盛つて出す。

〔見る目とにかく美し〕 目で見た外見だけは美しいといふ意。「とにかく」はともかくも。

〔憎まれ口〕 人にくしみを受けることば。人に嫌がられることば。

〔お能見〕 能狂言觀覽のこと。能は能樂で猿樂の餘流より脱化した舞樂である。謡曲に合せ、笛、大鼓、小鼓太鼓の囃子によつて演ずるもの。これを演ずる場所

を能舞臺といふ。登場の役者は少くとも、仕手、脇とよりなり、他のものは連といふ。室町時代初世に観阿彌及び世阿彌等によりて制定せられ、爾來武家の式樂となり、明治以後に至つてもなほ貴紳富豪の間に流行してゐる。觀世、寶生、金剛、金春の四座あり、觀世最も盛んであつた。江戸時代に至り喜多流起りて一時全盛を極めたが、明治以後に又觀世再び榮え、後に梅若流が起つた。

〔米澤紬〕 米澤織の紬。安永五年時の米澤の藩主上杉治憲が越後小千谷より織工を聘して製織業を傳授せしめたのが米澤織の濫觴で、次第に發展して改良を加へられ、種類も亦多様となつた。

〔年玉〕 年始の祝に用ひる贈物。年賜の意で、初は目下の者に向つていふ語であつたが、今は轉じて一般に用ひる。

〔カメリヤ〕 Camellia 椿のこと。園藝上で椿をカメリヤと普通いつてゐる。山茶科の常緑樹、山地に自生し多く觀賞用として庭園に栽培される。幹は高さ二三丈樹皮は灰褐白色又は淡褐色で平滑、枝葉は繁茂する。葉は長楕圓形で尖頭、細鋸齒を有し、厚くて光澤があ

る春の初め花を開く。大小形色種類は多いが、すべて美しい。果實よりは油を搾る。

〔植鐵〕 植は植木屋の植、鐵は植木屋の名、鐵五郎とか鐵吉とかの鐵である。魚商の政五郎を魚政、八百屋の磯次を八百磯といふのと一般。

参考篇

〔葵の上の歌詞〕

げに世にありし古へは、雲上の花の宴、春のあしたの、御遊になれ、仙洞の紅葉の秋の夜は、月にたはむれ色香にそみ、花やかなりし身なれども、衰へぬれば朝顔の、日蔭まつ間の有様に、只いつとなきわが心、ものうき野邊の早蕨の、萌出でそめし思の露、かゝる恨にうき人は、何を歎くぞ葛の葉の、もつれもつれてな、あふ夜はほんに、憎や憎やは、とりがねばかり、外にねたみはなきぞなき、なんなれ菜種のかり寝の夢か、我は胡蝶の花すり衣、袖にちりちり露涙、びんとすねても離れぬつがひ、しんき昔のあだ枕、この上はとて立寄りて、今の恨はありし報い、しんにのほむらは身を焦す、思ひ知らずや思ひ知れ、恨めしの心や、あら恨めしの心や、人の恨の深くして、うきねに泣かせ給

ふとも、生きてこの世にましまさば、水くらし濱邊の螢の蔭よりも、ひかる君とは契ららん、妾は蓬生の、もとあらざりし身となりて、葉末の露と消えもせば、それさへ、ことに恨めしや、夢にだに返らぬものを、我がちぎり昔語りとなりぬれば、なほも思は増鏡、その面影もはづかしや、枕にたてるやれ車、うちのせかくれ行かんとて、いふ聲ばかりは松吹く風、いふ聲ばかりは松吹く風、さめてはかなくなりけり。」

〔作者の歌人生活〕

服部躬治は傳記の項でも述べたが明治時代のいはゆる新派歌人としての先驅者の一人である。明治二十六年の頃落合直文に依り、短歌革新の目的を以て、浅香社なるものが組織されるや、金子薫園・奥謝野鐵幹、尾上柴舟、大町桂月、鹽井雨江、金子元臣、久保猪之吉、國分操子等と共に、社中の人となり、遂に一家をなし、以後明治三十年代に於ては世に謳はれた新進の歌人であつた。まづ、氏が落合門下から世に出て、歌集「迦具土」を出したのは、明治三十四年七月であつた。尤も、その前年に於ても、「戀愛詩評釋」といふものを出したのであるが、勿論それは自家のものではない。又四十四年五月には「春夏秋冬

冬名歌選」といふものを出した。しかし歌人としての氏の全盛は、確に「迦具土」時代である。以後は單に國學者として、世に立ち嘗ては明治大學の豫科に教鞭をとられたこともある。氏の著述としては上述のものだけである。しかしその作風は何といつても氏は歌人である故、その短歌の風をいふならば、明治四十四年の「文章世界」四月號に、孫悟空と名告つた人が次のやうに氏の歌風を評したことがあるが、誠に同感である即ち「服部躬治氏が、剛健の趣味を唱へ出して、萬葉調を若い人々に勧めた時代があつた。それは、一つはその頃の歌風に激した反抗の心もあつたらしいが、感情の自由な流れは他から強ひられた趣味によつて、どうすることも出来るものではない。つまり、彼は萬葉の素材と、その技巧とを好んだものであつた」と、ほんたうにさうであつた。しかしこれは恐らく、氏の性格でもあつたと見え、その文章も表面は柔かに見えてはゐるが、その他に於ては素朴な荒削りな所がある文章である。

一七 新年

豫備篇

古い年から新しい年への交界期である新年に當つて、復活の精神を強く意識させることは、春秋に富む少年にとつて最も有益な事である。しかもこの精神は我が國古來の風習による長い傳統的な歴史を有するものであることを知つては一層感銘の強いものがあるであらう。又、懷古、尊祖の風は實に我が國の美はしい國民性の一つである。新年の儀式に依つて知らず識らずかうした美風を傳へて行くことにより、日本人の根強い國家意識は自然に培れて行く。本課は元旦の意義、風習、朝廷の儀式等に就いて平易に知らしめようとするものである。

教授篇

新年を迎へ新年を祝ふのは、勿論ここに一期を劃して行手に益々新しい光明を求めらる好機としてではあるが、又特に我が國に於ては國史上から見て新年には實に深長な意味が含まれてゐるのである。我が國の新年が、外國のそれと異なる點、その重大な一點に、力強

い凝視を投げかけることに力むべきである。

「曆の改る」 改曆。年が改る意。曆を改正する意もあるが、ここでは當らない。「こよみ」は日讀の轉で、又「ひよみ」ともいひ日を數へてその事を考察する故に起つた名である。曆とは一年間の四季月日、地球と密接の關係ある天文学上種々の現象事項その他一切の時令を、日を逐うて記載したもので、これに太陰曆と太陽曆との二種がある。太陽曆とは、地球が太陽の周圍を一週する期間三百六十五日五時間餘の五時間餘を去つて一年と定め、これを十二箇月に分ち、更に一箇月を三十日と三十一日（二月は二十八日）とし四年目毎に五時間餘の餘つた時間を合せて一日とし二月に加算するもので、太陰曆とは、月の盈虚を基として一年を十二箇月に立て、一箇月を二十九日と三十日とし一年を凡そ三百六十日に分ち、その生ずる餘日が積んで一箇月となれば、その四季の有様によつて十二箇月の或るところに加へ、これを閏と稱へる組織の物である。我が國には推古天皇の十年、宋の元嘉曆が傳來したのが最初であるが、當時はそれを行はなかつた。持統天皇の四年十一月始めて元嘉曆を行つたが、七年

「行く手に光明を求め」 前途に希望の光を求めること。行手は向かつて進む方向。前途。光明はひかりかゞやき。

「處世」 世に處して行くこと、くらしを立てて世をすごすこと。世渡り、よすぎ。

「好機」 もつともよい機會。よいをり。

「大祓」 六月及び十二月晦日に行はれる神事で年中の罪穢を清める儀式のことである。この事は神代から傳はつて、神武天皇以來上古には國中一般に盛んに行はれ、天武天皇の大寶元年百官の大祓を六月十二月の晦日と定められ、親王以下百官朱雀門に會して行はれた。神祇令に、

凡六月十二月晦、大祓、東西文部、上祓刀、讀祓詞、訖、百官男女聚集祓所、中臣宣祓詞、卜部爲解除、とある。又太政官式には、

凡六月十二月晦日、於宮城南路、大祓、大臣以下五位以上、就朱雀門、辨史各一人率中務式部兵部省等、申見參人數、百官男女悉會祓之、臨時亦同。

と見えてゐる。臨時云々とあるのは、大嘗祭の前後、齋宮伊勢に發向の時、大神宮奉幣の時、大神寶使派遣

間で曆が天度に遅れること五十三刻に及んだので改曆し、爾後遅れ或は先立つこと數多く、度々改曆した。その後我が曆學も追々進んだが、徳川幕府の末に至つても未だ全く天度と違はざるを得なかつた。これは太陰曆を基としてゐるからである。而して明治五年に至り、太陰曆を廢し太陽曆を施行して今日に至つた。いはゆる新曆といふのはこの時からの話で、隨つて太陰曆を舊曆といふやうになつた。我が現行の曆は、東京帝國大學で編纂し、神部署でこれを全國に頒布して居る。年の平閏、月の大小、七値、干支、日の赤緯、日の出入、日の南中、晝夜の時間月の出入、月の南中、月の盈虚、潮の満干、日の視半徑、日蝕、月蝕、月の朔弦望、二十四節、雜節、各地潮候差、各地緯經度、各地氣候、大祭祝日、官幣社例祭日等を記載してある。

「くよくよ」 いつも思案に沈むこと、つまらぬ事に心を悩ましてゐること。

「水に流す」 水に流し去つたやうにきれいさつぱり忘れてしまふこと、既往の關係をすべて打消すこと。過去つたことをきれいさつぱりと念頭から去ること。全然忘却してしまふことなどを水に流すといつてゐる。

の時、死穢火災の後等である。この儀式は中世以後陰陽家の職となつて以來古風が追々衰へ、應仁の亂後は禁中の式全然廢絶し、ただ僅かに民間が茅の輪をくゞる事のみとなつた。六月の大祓は夏越祓の義ともいふが、明治四年この六月の大祓が夏越の神事と稱して、大祓式の本儀を失ふ爲舊儀再興の事となり、天下第一般修行せしむるの令を發し、翌年その祓式を定められた又、同年九月大祓の費用は官費とする旨が達せられたが、以來宮中でも、國中一般の神社でも行はれてゐる。

〔祭式〕 祭りの儀式。ここでは大祓の儀式をいふ、

〔復活〕 いきかへること。蘇生すること。衰へたものが再び盛になることにもいふ。

〔風習〕 ならはし。しきり。習慣。

〔春秋に富む〕 春秋は春と秋又は一年の間の意に用ひられ、轉じては年齢のことにも用ひられてゐる。春秋に富むとは、年まだ若くして前途の生先の長いのをいふ。

〔還曆〕 六十一歳になつて祝などを行ふに就いていふ語で、陰曆の上では、六十一歳になると六十干支が一週して初めの歳に還るからかういふのである。俗にも

との干支に歸るので本卦回りといひ、支那では花甲、華子、重逢などと稱へてゐる。

〔古稀〕 七十歳の異稱、唐の詩人杜甫の曲江の詩から出たのである。全詩は「朝より回りにて日々春衣を典す。毎日江頭に醉を盡して歸る。酒債尋常行く處に有り。人生七十古來稀なり。花を穿つ蛺蝶深々として見え。水に點する蜻蜒款々として飛ぶ。語を傳ふ風光共に流轉す、暫時相賞して相違ふこと莫かれ。」

〔簡樸〕 手軽くかざりけのないこと。

〔注連繩〕 神代に尻久米繩といつたその略で、繩を引延べて内外の標とし、入らしめぬしとするものであることである。ここにいふのは神前又は年の始めに人家の門戸に飾る藁繩のことで、内と外を限つて不淨を入れぬ意を持つたものである。製法は、稻の新葉を左捻りとし、一定の間隔をおいて七筋、五筋、三筋と藁の先を捻放して垂れ、更に七筋、五筋、三筋と繰返し繰返して所要の長さに捻り、その七五三の間に御幣を下げる定めである。正月に各家で用ひるから周知のことと思ふ。

〔讓葉〕 交讓木と記し木戟科に屬する植物。暖温兩帶

の山地に自生する常緑喬木である。土佐の國に最も多

く、その大なるものは高さ四丈周圍六尺に及ぶものがある。樹皮は赭黒くして平滑に、葉は長大にして厚く光澤のある綠色で、その裏面は淡白色をなし莖葉は赤い。春新葉が生じて後舊い葉が落ちるのでユヅリハと名づけられたものだといふ。材は緻密、堅軟中庸で、主として匣箱の類を作り、又鍛作して器具を作るに用ひられる。その葉は新年の飾に用ひ、父子相讓るさまに寄せて祝ふのである。

〔白木の三方〕 木地のまゝで塗らない木で作つた三方。三方は食物を載せる器。神供及び貴人の膳部、或は儀式用の盤で檜の白木製を本式とし、塗三方は後世の略儀である、その制は、方形の折敷に方形の臺を附け、臺の三方に孔（眼象）を穿つたもので、四方に孔のあるのを四方といひ、その小さいものを小四方と稱し、又孔のないのを供饗といふのである。又圓形なのを丸三方といふ、昔は大臣以上に四方を、大納言以下に三方を、六位の藏人に細縁の三方を用ひたことが山槐記に見えてゐるが、現今では神への供物を載せるか若しくは結婚、新年その他の儀式の際に主として用ひ

られてゐる。

〔土器〕 粘土に少しの砂を混ぜて焼き、釉薬をかけぬ陶器のことで、普通にはかくして製した盃のこののみをいふ。瓦筒の義で、古へ朝家及び神官では供御を盛る器具に備へ、今も神事に用ひられてゐる。海東諸國記に、「飯食用漆器尊處用土器有筋无匙。」

〔妙味〕 すぐれた味はひ。たへなおもむき。

〔宗家〕 總本家の義。我が國民はすべて皇室と祖先を同一にし、皇室は即ち人民の總本家であることは歴史の明記するところ、これこそ世界に類例なき國からである。これは我が國民の誇であり、又我が國家の強みである。

〔四方拜〕 新年初頭宮中に行はれる儀式。元旦神嘉殿の南庭に屋を設け、中央に簀を敷き、几、燈臺を据ゑ御座を作り、周圍に屏風二雙を立て、用意成つて午前五時半天皇御着座、天地四方山陵を拜し、天下泰平、萬民安寧、五穀豐穰、寶祚長久を祈らせ給ひ、祭後更に賢所を拜せられる。史上には仁和五年に始めて見え往時は清涼殿東庭に於て行はせられた。

〔元始祭〕 正月三日宮中に於て皇統の元始即ち祖宗の

皇靈を祭らせ給ふ祭典で、賢所、皇靈殿、神殿の御祝祭がある。この名稱は明治五年に始めて用ひられたのである。

【臣僚】 臣下に同じ。僚はつかさ。又やくにん。

【御宴】 天皇が臣僚を召して御催しになる宴會。ここでは新年宴會のこと、これは一月五日に行はれ當日は親王以下勅任官以上、及び外國大使等參内、天皇は豊明殿に出御遊ばされ、勅語を給ひ、總理大臣及び首席大使奉答申し上げ、次に酒饌を賜る。明治三年勅して元日、踏歌、白馬の三節を廢し、新年宴會を以てこれに代へ、明治五年以來行はれてゐる。

【橘曙覽】 第一九課豫備篇參照のこと。

【春にあげて云々】 年明けて初春を迎へれば、神代の事が心に爽かに蘇つてくる。まづ第一に讀む書物も決して他の書物は繙かず、何を置いても彼の古事記を手にとり開卷第一頁より「天地初發の時、高天原に」と讀みはじめることであるの意。書は古事記を指す古事記開卷第一に「天地初發の時、高天原に成りませる神の御名は、天之御中主神。次に、高御産巡日神。次に、神産巢日神。この三柱の神は並獨神成りまして

御身を隠し給ひき云々」とある。この歌は曙覽の志濃夫廼舍歌集の中にある。

【元朝や云々】 「元朝」は正月一日の朝のことで、元の字は、もとおこり、はじめ等の意があるから、一年中の初めての朝といふ意味になる。異本には「元日や」とある。「神代」は我が國の開闢から神武天皇の御代の前までの時代。句意は明らかである。「元日の朝は、太古ながらの質素簡樸な儀式や慣習を重んじて行はれるので、自然と、神代のことを思ひ出されて、嚴かな気分になり心もあらたまるやうに感ずる。」の意。この句の作者荒木田守武は、伊勢内宮の祠官。從四位に敘せられ、蘭田長官と稱された、連歌師としても名がある足利氏の末連歌が世に行はれたが、俳諧體の語を以て連歌を作るとは守武に始つたのである。後守武は俳諧體の式を定めた。天文十九年八月八日、七十七歳で歿した。坂本四方太はこの句を評して「守武は伊勢内宮の神官であつて見れば、普通の人よりも更に嚴かに構へてゐるに相違なく、この人の烏帽子直垂姿で、『元朝や』と靜かに讀出した様を思ひ浮かべて見ると、何となく崇高な感じがこの句の中に含まれてゐる云々」

とある。

參考篇

「元旦や晴れて雀の物語」と嵐雪の句にあるやうに老いたるも若きも麗かにさし昇る初日影を仰ぎ見て大御代の新年を壽ぎ合ふ。即ち元日から三日までの三ヶ日は専ら賀客往來するのは、上下一般を通じて行はれる。元日は年の元、月の元、日の元であるから元三といひ、宮中ではこの暁天皇親ら天地四方山陵を拜して年災を拂ひ、寶祚の久しからんことを祈らせたまふ。これを四方拜といひ中古以來の大儀である。四方拜が終つて後文武百官の拜賀をうけさせられる。民間では上下貴賤みな業を休んで謹み祝し、朝風く起きて若水を汲み顔を洗ひ、歳徳神の方角にあたる神佛に詣で又は産土神に詣で一年の幸福を祈る。かくて後家族一同屠蘇酒を汲み雑煮を祝ふのが例である。二日は仕事始で貴賤共に業を始め藝を試みる習がある。昔は宮中で吉書を奉覽する儀式が行はれた。今は民間で書初をしたり、商家は初賣をする。この夜寶舟を買つて枕の下に敷いて寝るとよい初夢を見るといはれる。三日は元始祭で天皇親ら賢所並に天神、地祇、御歴代の皇靈を祭らせられる。四日は御用始、五日は新年宴會、七日は七草の祝八日よりは學校の授業

が始まる。

縁起の話 關根正直

【豫備篇】 新年といふ更生的な教課の後をうけて本課は縁起に關する話を取扱つた。我々の日常生活に最も關係深いものの一つに「縁起がよい、わるい」といふことがあるし、又は方位や吉日凶日、さては家相名相などのことがある。これ等は一概に迷信だとして排斥されもしないだらうが、又勿論全然肯定もされない。要するにこれ等の迷信でも却て善用することによつて生活の安心が得られる。迷信を以て確信に變せしめるといふ意氣を尊重させたいと思ふ。

【關根正直】 東京の人關根七兵衛の長男で萬延元年三月三日に生まれた。明治十九年東京帝國大學古典講習科圖書課を卒業し、古典學者としてその名を馳せ、華族女學校教授學習院教授等に歴任して東京女子高等師範學校教授となつた。四十二年に文學博士の學位を授けられ、有職故實についての權威としてあまねく知られてゐた。大正十三年六月東京女子高師教授を退いた。

昭和七年歿、年七十三。著書としては「更科日記略解」「史談俗談」「増補宮殿調度圖解」「禁秘抄講義」「公事根源新釋」「増訂裝束圖解」等がある。

本文は「史談俗談」の一篇縁起の話に據つたものである。同書は縁起の話を始め「近松一流の身代り劇」「徳川時代初期の風俗」「庭園史話」「中古の禁忌迷信」「狂歌史談」「明治元年の東京」といつた風の趣味談を十五篇收めてある。

【教授篇】 實生活に關係の深い縁起といふものの全然無意義のものではなく、その意味の據つて來たる處種々實例を以て説明してゐる。これは歐米諸國には見られない。東洋、否日本國民性の面白い一面を物語つてゐる。本課によつても判る様に一つ一つの理由から起つてゐることを認めねばならない。豫備篇にも述べておいたが迷信だとして一概に片付けられぬ理由が見出される。然し全然意味のない様な事もあるから、餘りこれに拘泥するのは却て一種の迷信となつてしまふことがあるから注意せねばならぬことを深く悟らせたいのである。

【縁起】 本文に詳説されてゐる。尙、大言海の解説には次の如くある。(一)佛敎ノ語。因縁ノ起源、由來。

(二)佛寺ノ草創ノ由來、又ハ佛ノ靈驗ナド言傳フルコト。又其事ヲ記セル書物。(三)寺ヨリ移リテ神社ノ由來ヲ記シタルニモ云フ。(四)由來ノ義ヨリ轉ジテ事ノ手始ノ吉凶の兆。又、象。サイサキ。えんぎがヨイ。「えんぎがワルイ」吉キえんぎヲ單ニえんぎトモ云フ。「えんぎニ酒一杯」凶シキえんぎヲ消サムト祝フヲえんぎなほしト云フ。

【熟語】 漢字が二字以上集つて、新しい意味の言葉をつくること。成語ともいふ。

【再轉】 再び轉ずること。二度變ること。

【嘉瑞】 めでたいしるし。よいきざし。嘉祥と同じ。

【吉兆】 よいきざし。めでたい前じらせ。祥瑞。

【大晦日】 おほつごもり、一年の最終十二月三十一日のことをいふ。

【身代】 財産のこと。身上。「身代ののびる」は財産が増殖すること。

【新居の四隣】 いはゆる向ふ三軒兩隣にくばるのである。

【附木】 火をうつし、又はたきつけるときに用ひるために木をうすくけづつて端に硫黄をつけたもの。

【硫黄】 ゆわう。火山地に産する黄色の礦物。火を點すれば青焰を發して燃え劇臭を放つ。藥その他の工業品の原料となる。

【なぞ】 謎。あらはにはせずに、遠廻しに氣の附くやうにいふこと。「なぞ」はなぞなどで、何ぞ何ぞの義。

意味を直接にいひあらはさず、つつみ隠したる問ひを掛け、これを推察して對へさせるのをいふ。

【赤飯】 アカメシ。小豆を入れて、色をつけた御飯で祝儀の意味を持つ時につくる。

【重箱】 四角い木製の容器を二、三、四段と重ねたもの、内部は一色(赤、或は黒など)に塗り、外部には蒔繪等を施したのが普通である。

【南天】 難轉の語に響かせて、災難を轉ずる心であるが、また南天燭の葉は食毒を消す效があるから用ひるのだともいふ。しかし、銅鏡の裏や平箱の模様につけるのはやはり縁起である。

【江戸時代】 安土桃山時代の次が江戸時代(徳川時代)である。慶長八年徳川家康が幕府を江戸に開いてから慶應三年、慶喜が大政を朝廷に奉還するまで、十五代

(一) 秀忠、家光、家綱、綱吉、家宣、家繼、吉宗、

家重、家治、家齊、家慶、家定、家茂、慶喜）凡そ二百六十年間の稱。

〔孝徳天皇〕 第三十六代。御名は輕。皇極天皇の同母弟。内禪を受けて位に即き、始めて元を立てて大化と號した。在位十年、白雉四年崩、壽五十九。

〔白雉〕 全身が白い雉。雉は鶉類に屬する鳥。山野に棲む。目赤く、頭、胸、腹、兩羽に麗しい光澤がある。雌雄共に長い尾を持つてゐる。肉は美味である。きざすともいふ。

〔白鳳〕 全身白色の鳳。鳳は鳳凰の雄、鳳は雌。鳳凰は支那で想像上の鳥。高さ五六尺、頭は鶏に似、頸は蛇に似、頰は燕に似、背は龜に似、尾は魚に似、羽に五彩を具へ、聲は五音に當り、梧桐以外には棲まず、禮泉以外には飲まない。飛ぶ時は群鳥皆これに従ふ。至徳の瑞兆としてあらはれると考へられた。

〔私年號〕 公の年號ではないもの。歴史上の年號ではないもの。

〔裏白〕 裏白科。暖地自生の多年生羊齒。高さ四五尺に及ぶ。莖は地中を匍匐する。葉は常緑にして羽狀に分裂し、上面鮮緑に、裏面は白い。

〔だい／＼〕 芸香科に屬し、栽培の常緑樹。高さ十五

尺にも達し樹皮は暗綠色にして平滑。葉は橢圓形にて尖り互生す。初夏白色の花を著く。果實は球形にして徑二寸。冬黄熟して、春綠色となる。果液を酢の代用とする。

〔昆布〕 褐色藻の海草。厚昆布、三石昆布、長昆布、黒昆布等の別がある。海底の岸礁上に著生するが故にこれを採集するには、鎌を長竿の先につけて刈取る。食用に供し、又祝賀に用ひる。こぶ。

參考篇

なほ本文の外にも生徒自身が知つてゐるものがあると思ふ。たとへば蘆はアシ(惡)と聞えるからヨシ(善)といひ替へる。梨はナシ(無)になるから、反對の「アリ(在)の實」といひ替へる例、摺鉢を當り鉢、硯箱を當り箱などといつて「スル」といふ詞を忌むなどもその例である。

〔鶴龜、松竹梅の縁起〕 一二三頁三行目の「鶴龜だの松竹梅だのをおめでたい物にしたのも」とある文には原本「史談俗談」に次の様に出てゐる。

「例へば今も流行の廢らない鶴龜松竹梅の様なものも皆もとは支那の御弊かつぎが言ひ出したものです。ま

づ「鶴千歳極其遊」だの「龜齡過萬年」などいふことは「淮南子」や「廣五行記」などといふ本を始め「文選」などの中にも長壽の動物だとなつてゐる。松竹梅を歳寒の三友といつたことは、「月令廣記」に見えるのが初で松壽の千年を當時の人が歌に詠んだのは平安時代には非常に流行してゐる」とあつて數首の歌を擧げてゐる。「松の苔千歳をかねて生ひしげれ鶴のかひこの巢とも見るべく」「色かへぬ松と竹との末のよをいづれ久しと君のみぞ見む」、平家物語の白拍子祇王が今様「蓬萊山には千歳ふる、萬歳千秋重なれり、松の枝には鶴すくひ、巖の上には龜遊ぶ。」又佛御前が始めて清盛に見えた時「君を始めて見る時は、千代も經ぬべし姫小松、御前の池なる龜岡に、鶴こそむれるて遊ぶなれ。」等。

一八 多年一日の修養 村上專精

(通俗修養論)

豫備篇

本課には趣を變へて修養教材を取扱つた、さて俗諺に「十で神童、十五で才子、二十過ぎてはたゞの人」といふのがあるが、世に十歳神童、十五歳の才子は決して少くないにも拘らず、二十歳を過ぎてその天賦の才を益々伸ばす人は甚だ稀である。これは國家の爲、又全人類の爲にも誠に惜しむべき限りであるが、これら幾多の有用の才が何故に「二十過ぎてはたゞの人」になるのだらうか。おこたりて磨かざりせば光ある玉も互にひとしからまし」の歌は、この疑問に明確に答へてゐる。切瑳琢磨の功を積まずしては、せつかく持つてゐる良質も瓦礫と化してしまふ。西諺にいふ「努力は天才である」と。たとひ天賦の才に短くとも、努力は偉人を作り上げる。本課はすなはちこの點を教へるもので、諺のいふ十五の歳に近い生徒達の深く味讀すべき文字であらう。

〔多年一日の修養〕 多年一日の様に修養を繼續する意。

〔村上專精〕

佛教學者。文學博士。兵庫縣の人である。廣崎宗鑑の長子として嘉永四年に生まれた。明治四年武田行忠に佛を學んだ。後東京帝國大學教授となり、次いで名譽教授となり、大正十四年には大谷大學々長に轉じた。淨土宗出身の學者として京都の前田無雲博士と相並び稱せられた。昭和四年歿、年七十九。著書に因明學全集、日本佛敎史綱、眞宗全史、佛敎統一論等の他に女性訓、誠のしるべ、通俗修養論等の著がある。

教授篇

釋迦や孔子ですらも、多年一日の修養の結果、あのやうに偉い人物になつたのであるが、普通世人は勝れた人を見ると、とかく彼は才子だとか、幸運兒だとかいひたがる。頼山陽についてもさうだが、傳記に依ると、彼は八九歳の頃、偶々眼病に罹り、父に讀書を禁ぜられても、尙隠れて讀書を止めなかつたといひ、また終生著述に勤めて、晩年の大作日本政記は病中に成つたが、病革るに及んでもその刪補を止めなかつたといふ。彼の生涯は勤勉を以て一貫されてゐるのである。山陽に限らず、偉人はみな多年一日の様な修養によつて、自己の天才を喚起したのに違ひない。しかも人間萬事休息す

れば退歩するもので、この修養は生命のあらん限り廢すべきものではない。これが眞の修養である。以上が本課の大意であるが、その徹底を期したい。尙参考篇にも述べておいたが、議論文の文範とさせたい。

〔彌勒〕 彌勒菩薩。梵語梅怛羅耶の音譯。慈氏と譯する。南印度の婆羅門の家に生まれ、兜率天に上生し、兜率の内院にゐて、釋尊の滅後五十六億七千萬年の後に此に出興して釋迦佛の處を補ひ、賢劫千佛中の第五佛となる。故に補處の彌勒といふ。

〔釋迦〕 釋迦は西曆紀元前凡そ六百年の頃、印度伽毘羅國の王家に生まる。父は淨飯王、母は麻耶夫人。その本名は悉達多といふ。釋迦は伽毘羅王家の族名にして、佛陀はその出家成道後の尊號なり。釋迦身は一國の太子に生まれけれども、夙に思を人生の問題に潜め二十九の歳、その妻子を棄てて王城を遁れ、山林に隠れて道を修むること六年、終に人生の奧義を究め、無上の正覺に徹底せり。爾來五十餘年の間、北天竺の各地に巡錫して教化を布き、年八十餘歳にして跋提河の邊に歿しぬ。今の佛敎は即ち釋迦一代の敎訓に基づく。蓋し釋迦の當時、印度には幾多の哲學ありき。されど

徒に思索の高遠を喜びて、人生の疑問に適切ならず。偏に幽玄なる談理と慘憺たる苦行とによりて、安心の道を求めたり。その流派を樹てて相争ふところは、畢竟各自の優劣のみ。未だ一世の元々をして歸命の大道につかしむるに足らず。釋迦この間に生まれ、その浩大なる慈悲と無邊なる智慧とを以て一世の木鐸となり民をしてその歸依するところを知らしめたり。」(世界の四聖)。

〔多年一日の如く云々〕 長い年月を一日の様に修養を繼續した結果として。

〔菩薩〕 佛語。菩提薩埵の略。佛に次ぐ階級。即ち大勇猛心を以て菩提を求め、大慈悲を以て衆生を濟ひ、己に妙覺の果に近づいた人をいふ。我が國では古く朝廷から神又は高僧に與へられたが、聖武天皇の落飾、受戒の時、行基に勅賜あつたのを始めとする。

〔佛陀〕 智者又は覺者と譯す。佛のこと。

〔大聖〕 大聖人。非常に智徳のすぐれた人。徳がすぐれてすべての事によく通じてゐる人。

〔孔子〕 支那の大聖人。名は丘、字は仲尼、その先は宋人、父は叔梁紇、母は顔氏。魯の昌平郷に生まれた。

〔魯の襄公二十一年皇紀——二一〇年〕幼にして禮を好み長じて諸侯に仕へて、用ひられず、半生を諸國遊歴の中に送つた。書傳禮記を叙し、詩を刪り樂を正し、易の彖象、繫辭、說卦、文言を序した。弟子三千、身六藝に通ずる者七十二人といふ。魯の哀公の十四年春秋を作つた。敬王の四十一年歿、年七十二。

〔道〕 人の守り行ふべき條理、仁義忠孝等の徳義。

〔論語〕 四書の一。孔子の語、孔子と弟子或は時の君臣との問答、孔子の行等を集め載せたもの。二十篇から成つてゐる。

〔經歷〕 實際へめぐつて來たこと。經來つた實歴。

〔吾十有五にして云々〕 論語爲政篇に出てゐる。一章の大意は、自分は十五歳の時に學問に心を向け、三十になつて學問が成就した。四十になつて智慧が明かになつて物事に疑惑を生ずることがなく、五十になつて天から命ぜられた己れの本分があつてこれに安んずべきものであることを悟り、六十になつて、聞くところのことが思はずしてたやすく心に通ずるやうになり七十になつて、心のまゝにふるまつても法度に違はないやうになつた。これを見ても孔子の大聖といはれる。

には多年一日の修養が繼續されたことが知られる。

〔學に志す〕 心の之く所之を志と謂ふ(朱子)、志は心に在るの謂なり(皇侃)。學問に心を向けて、飽かず勉める意。

〔三十にして立つ〕 「立」は成立す所有るなり(何晏)。立は自立である。「自立」は即ち自立の意で、己、己の主人となり、貧富榮辱などの外物のために、この心が動かぬことをいふ。ここに至つて學問は成就したのである。(譯註論語)。

〔惑はず〕 疑惑せざるなり(孔安國)、業成つて後己に十年經明に行修まり、政に莅んで以て疑惑無きなり(皇疏)、事物の當に然べき所に於て皆疑ふ所無ければ則ち之れを知ること明かにして守を事とする所無し(朱子)。

〔天命を知る〕 事物の當に然るべき所以の理を天命といふ。朱子は天道の流行して物に賦するもの、即ち事物當に然るべき所以を天命といつてゐる。

〔耳順ふ〕 聲入り心通じ違逆する所無し、之を知るの至思はずして得るなり(朱子)、「順」は從順と熟し、すなほなことである。耳へ入る他人の言葉には、無理な

〔凡人〕 身分又は伎倆などの普通の人。たゞびと。平凡な人。

〔通弊〕 一般に共通する缺點。

〔輕卒に〕 かるがるしく。不注意に。

〔才子〕 才智ある人。才物。

〔幸運兒〕 しあはせよい人。幸運の人。

〔頼山陽〕 文學者にして又歴史家。名は襄、字は子成、通稱は久太郎。山陽はその號。又三十六峯外史とも號した。安藝國竹原の人。春水の子。尾藤二洲の門に學び、力を文章に盡し、最も史學に精しく、詩及び書をよくし、又心を經濟の學に用ひた。京都に住み、天保三年歿、年五十三。その著書に、日本外史、日本政記、日本樂府、山陽詩鈔等有名なものがある。明治二十四年正四位を贈られた。

〔誤謬〕 あやまり。まちがひ。

〔江戸時代〕 徳川時代。慶長八年徳川家康が幕府を江戸に建ててより、慶應三年の瓦解に至るまで、およそ二百六十五年間の稱である。

〔儒者〕 儒學に志長じた人。ズサともいふ。

〔頼春水〕 儒者。名は惟實。字は千秋、通稱は彌太郎。

ものもあれば、邪なものもあるが、すべてすなほに入つて來て、不快を感じさせたり腹立たさせたりしない。これを耳順ふといふ。無理な言、邪な言を聞いて、爲に立腹などするのは、まだ修養が足らぬのである(譯註論語)。

〔心の欲する云々〕 自分が思ふまゝ、氣儘に振舞ふこと。自分の思ふ通りに行動して。

〔矩を踰えず〕 「矩」は禮儀の法式、人道の規則である。ここはその規則に外れないの意。「矩」は法度なり、此境界に至る時は、其心即理なる故に、凡その心欲するままにしたがひて行くとも、をのづから法度の外にこえ出ることなし、たとへば珠の盤中に走るが、ひねもす轉向すれども盤を出ざるが如し、是安んじて行ひ、勉めずして中るなり(中村惕富)。

〔修養〕 學業を修め、徳性を養ふこと。道を修め徳を養ふこと。

〔告白〕 明白に告知すること。包みかくさずに打ちあけること。

〔萬人の光と仰がれる〕 多くの人が光明として尊敬する。多くの人が手本としてこれを尊敬すること。

山陽の父。安藝國竹原の人。大阪に出て、片山北海に學び、業成つて、子弟を教授したが、後尾藤二洲、古賀精里等と共に、程朱の學を唱へ、藩の儒員となり、又幕府から昌平黌の教官を囑託せられた。文化十三年歿、年七十一。大正四年に従四位を贈られた。

〔軍記物〕 戦争の話をかいた書物。軍書。戦記。例へば、源平盛衰記、平家物語等の類をいふ。

〔山陽平生讀書に耽り云々〕 頼山陽は常日頃、書物を好んで讀みふけり、書物を著すことに努力した。著述とは、書物を著し述べ作ること。

〔日本外史〕 二十二卷。漢の司馬遷の「史記」世家の體に倣つて、源平二氏より起つて、徳川氏に至るまでの武家の歴史である。中興の諸將、群雄割據の治亂に關係あつたことを、毎家にこれを別記し或はこれを綜合し、その成敗盛衰の狀を示す爲に、大體の最も明確なものにとり、その中間を貫くのに、帝系年號を以て修理を表してゐる。その巻首には、二十餘項の例言を掲げ、次に文政十年丁亥五月二十一日、少將樂翁侯に奉る書を以て自叙とし、二百數十種の引用書目をかゝげてゐる。本書は二十年を経て成つた大書である。然し

家に秘して出さず、白河樂翁はこれを聞いて、禮を卑くし、幣を厚くしてこれを請ひ、始めて世に公にせられたものであるといふ。本書の後世に於ける製本には大中小本、川越版等の數種がある。

〔日本政記〕 漢文で以て記されてあり、十六卷。神武天皇より、後陽成天皇に至るまでの百八世、二千年間の編年史である。綱紀の弛張、教化の隆盛を記述し、それに附するのに、自家の論斷を以てしてある。頼山陽晩年の作であつて、本書を論述中に筆を握つたまゝ歿したといふ。

〔病が革る〕 病氣が重くなる。危篤になること。

〔我が死まさにせまれり〕 自分の死期が近づいて来た、即ち、もう死に瀕したことをいふ。

〔刪補〕 けづること。補ふこと不要の所をけづり、不足の所を補ふこと。

〔左右を顧み〕 左右にゐる者をふり返つて見ること。側近の者をかへりみることに。

〔我まさに假寝せん〕 自分は今ちよつとたゝねをしよう。一寸横になつて寝よう位な意。「假寝」とは、かりそめにねること。うたゝね。

〔瞑す〕 安心して死ぬこと。往生すること。瞑目すること。

〔末期の傳〕 後年の傳記。老年になつてからのことを書き傳へてあるもの。

〔一貫する〕 一すちに物を貫くこと。一理を以て萬事を貫き通すこと。

〔對飲〕 對酌すること。相對して酒を酌むこと。さし向ひで酒を酌むこと。

〔制限〕 定められた分量。

〔談論〕 談話と議論。或は話し或は論じ合ふこと。

〔五更〕 五夜の内の戌夜(ボヤ)即ち今の午前四時より同六時まで。「五夜」とは、夜を五つに區別したもの。即ち、甲夜(初夜。今の八時から十時まで)。乙夜(イ

ツヤ)(二更、今の十時より十二時まで)、丙夜(三更、今の十二時より午前二時まで)、丁夜(四更、今の午前二時より同四時まで)戌夜(五更、今の午前四時より六時まで)。

〔自ら衾を收めて〕 自分で夜具を始末すること。

〔山陽は才子なりと言ふ者は云々〕 山陽は生まれながらにして才智のある人であるといふ者は、まだ本

當に自分(山陽)をよく知つてゐる者ではない。山陽は一心に努力した者であるといふ人であつてこそ、始めて、自分(山陽)を眞に解してよく知つてくれる人である。

〔彼を思ひ此を考へるに〕 山陽の學力と事業を思ひこの言葉を考へてみるに。

〔長所〕 他に比較して最も勝れてゐるところ。得手の所、得意の點(短所に對する語である)。

〔達人〕 學術、技藝などに達した人。達者。人生を達觀してさとりを開いた人。

〔終世を期す〕 一生涯を約束する。一生を覺悟する。一生を誓ふこと。

〔技能〕 うでまへ。はたらき。藝能。技倆。

〔退歩する〕 あとじさりする。しりごみする。あともどりする。以前より悪くなること。進歩に對する語である。

〔翻る〕 ひらりと返る義。大いに變つた位置又は態度を取ること。ひつくりかへること。

〔みればたゞ何の苦もなき水鳥の云々〕 「足にひまなき」とは足にいとまのないこと、即ち、絶えず足

を働かせてゐることである。本歌では、この作者の思ひを、水鳥の足にかけて詠んでゐるのである。ここにこの歌の生命がある。一首の意は至つて明瞭で、一寸見れば、水面に浮んでゐる水鳥は、さも、樂し相で呑氣に見えるけれども、これに近寄つて見ると決してさう樂に簡單に水鳥は浮かんでゐるのでなく、間斷なくその足を働かし動かすことによつて自分の身體を浮かせてゐるのである。それと同様に自分も、外見だけでは、安閑として遊んでゐるやうに見えるが、決して自分は遊んでゐるのでなく、一心に自分のなすべきことに向つて働いてゐるのである。ちやうど水鳥が足を盛んにかいて浮かんでゐるやうに、

〔水戸黄門〕 徳川光圀のこと。水戸藩第二代の主。頼房の第二子。小字は千代松。字は徳亮。子龍、常山、率然子、梅里先生等多くの號がある。寛文元年、父の封を襲いで城主となつた。性俊邁仁慈で、銳意治を計つた。敬神の念厚く、文武を重んじ、又意を殖産工業に注いだ。彰考館を置いて大日本史を撰み、禮儀類典等を纂じた。晩年西山に閑居して西山隱士と號し、元祿十三年に薨じた。年七十三。義公と諡す。「黄門」と

いふのは、支那に於て、黄門令、黄門侍郎等の官があつて、これを掌つたのである。後世は、宦官の稱となつたのである。又中納言の唐名ともいはれてゐる。

〔江河の水面〕 大きな河の水の上。

〔何の苦もなささう〕 少しの苦しいこともないやうす。

〔外見〕 うはべ。外觀。一寸見た所。

〔人間萬事休息すれば必ず退歩する〕 人間はどんなことに於ても、心身共に休んで活動せずに居れば、きつとだん／＼とそこから後もどりしてしまふものである。

〔水は絶えず流れ動いてゐれば云々〕 水といふものは、いつも休むことなく流れて動いて居ればどんどんと新しいのが後から／＼と流れて來て腐ることはなすが、一度、その水が一定の所に流れずに留つて居れば、新陳代謝が行はれないからちきに腐つてしまふものである（この所の一節とす、ぐ前の一節、即ち人間萬事云々とは丁度相對した所であつて、水が絶えず流れるとは、即ち人間が萬事に休息するところのないさまを、又水が停滯し、そして腐るといふのは、人間が

萬事休息して居れば必ず退歩するといふ所にあてはまる所である。）

參考篇 議論文の第一目的は、いふまでもなく、讀者をして完全に我が論に服せしめるにある。それには第一に、論點の明確さが要求せられ、次にその論點を力強く表現する事が問題となる。本文では劈頭第一に釋迦と孔子を拉し來つて、かゝる大聖人すら多年一日の修養を繼續した結果、始めてあの様な偉い人物となつたのであることを證明し、まして我々凡人は一層修養を續けて行かなければ到底勝れた人物にはなり得ないと斷じた。釋迦、孔子は、キリスト、ソクラテスと共に世界の四聖といはれる最高標準的人物であるから、この第一段からして實にがつしりした構成で、正に是、大上段の構へである。世人一般に才子と評する山陽を次にのべて、その勤勉を明かにしたのも同様の意味で勝れた構成で、本課は議論文範として學ぶべき點に富んでゐる。

(東遊記)

後備篇 「桃李物言はずして下自ら蹊をなす」といひ又「家室を出でずして人を化す」ともいつて、大徳を身に體してをれば、接する人が自然にそれに化されて行くものである。本課は儒者として學問德行一世に高く、近江聖人とまで稱せられた中江藤樹が、いかに徳化力があつたかを、卑近な馬方の美談を通じて記したもので、この話によつて、讀者は藤樹の學徳がいかに勝れたものであつたかを、躍如として見る事が出来ると共に、教化の力のいかに社會人心を左右する現實的力を發揮するものであるかに驚かざるを得ないであらう。又、かうした話を聞いて、「その人こそ眞の學者」と、直ちに走つて入門した熊澤蕃山の話も、學に志す讀者の若い心を打たすにおかぬものがあらう。教化の力——延いて學問の眞の價値といふものに、微かながらも考を進めしめたい。

〔橋南谿〕 江戸時代の醫家、國學者。氏は宮川、名は春暉、字は惠風といひ、南谿の外に梅華仙史とも號

後篇、西遊記續篇、傷寒論分注、傷寒論外傳、北憲瑣談、漢語律呂考、國語律呂考などの著がある。文化三年四月十日歿、年五十三。

〔東遊記〕 橋南谿著。天明二年秋から翌三年の秋まで西國の漫遊記を西遊記といひ、四年の秋から六年の夏にかけて東海、東山、北陸の漫遊記を東遊記といつた。共に正續各五卷、合せて二十卷より成る。

教授篇 我が生命にも拘はるべき二百兩の遺失した金子を返されて、再生の御恩に對する心ばかりの御禮と金子十五兩を出した飛脚に對して、「馬方大きに驚ける面持にて、『そなたの金をそなたに取納め給ふに、何の禮といふことあるべき。』とて手にだに取らず。」といふ馬方の純朴さ——馬方の人と爲りはこの一言で讀者の前に髣髴として来る。更に感に耐へぬ飛脚にその氏素性を尋ねられて、「名ある者にあらず。また何一つ知れる者にもあらず……」と答へる馬方の言葉は、その純眞卒直さを語ると共に、いかにも藤樹の徳化力の自然さ、深き強さを思はせられるのである。熊澤蕃山がこの話を聞いて、「その人こそまことの儒といふものなれ」と直ちに赴いて、門人となつたのは當然至極の事であらう。この蕃山に「人

した。伊勢の人で、代々藤堂氏に仕へた。幼い時から聰敏で儒を藩の儒臣佐野西山に學んだが、十四五歳の時父を喪つたので、生計の道を講ずるため醫を學び、遂に京に上つて醫を業とした。そして、業とした後も益々術の蘊奥を究めることに努めたが、又一方和漢の典籍を涉獵し、詩を賦し歌を詠じ、俳諧を作つた。かくして佛人五井塘雨と相識つて後は、東西漫遊の志がしきりに湧き、母の歿後、遂に意を決して西遊を思ひ立つた。だが、その目的は醫術の修行であつて、山水の奇勝を探るのはむしろその餘事に屬してゐたのである。で、天明二年の秋京畿を立つて、山陽、西海、四國を歴遊し、翌年秋京に還つたが、更に同四年秋には再び京を出て、東海、奥羽、北越の奇勝を探り、六年六月、越後より北陸を経て京に還つた。その他南紀漫遊などを合はせると、歴遊前後四回に及び、足跡天下に至らぬ所がなかつた。そして、東遊より歸ると、又醫を開業したが、後に召されて尙藥となり、從六位下石見介に叙せられ、當時名醫の名が高かつたが、殊に脚氣の研究に見るべきものがあつた。傍ら著述に従ひ、寛政七年に東西遊記を著したが、この外に東遊記

に教へ申す程の學徳なし」とて再三斷つた藤樹のゆかしさそれにも拘らず二日の間その門から去らず、遂に門人となつた蕃山の向學心、——これは正に學に志す者の以て龜鑑とするに足る事である。藤樹が備前侯から招かれた時、自分の代りと蕃山を薦めた事も、師弟の情誼の美しさに心打たれる。「いつれも格別の事ともなり。」と筆者も歎稱してゐるが、當時に於てさへ「格別の事」だつたかうした事が、師弟の間が昔日のとは全く異なつた如く思はれる今日、大いに讀者の反省に資するものがあらう。これ等の點を強調されたい。

〔中江藤樹〕 徳川三代將軍家光時代の學徳完備した儒者。名は原、藤樹は號、俗稱は與右衛門。近江高島郡小川村の人。年十一の時祖父と伊豫の大洲に移つた。一日大學を讀んで大いに感奮するところがあつた。十七の時京都の僧について論語を學び、後四書大全を得て大いに悦び學んだ。王陽明の説を信じ、好んで孝經を講釋して愛敬の道を人に誨へた。藤樹は人となり温厚で、自ら行を先にして言葉を後にしたので、人々賢愚となく皆その徳に服して善行を積むやうになつた。旅舎茶肆と雖も客の忘物があれば、必ずこれを保管し

て忘主の再び来るのを待つたといはれる。近江聖人と
いつて崇拜された事は周知の事である。慶安元年八月
二十五日歿、年四十一。明治四十年十月二十三日正四
位を贈られた。著書は大學解、中庸解、翁問答、孝經
啓蒙等十數種に及んでゐる。

〔江州〕 近江國。

〔大溝〕 近江國高島郡。もと勝野村といつた。明神崎

(三尾崎)の北で、琵琶湖に臨み、小瀨を抱いてゐる。

小川村は青柳村(高島郡)の大字で、藤樹書院(中江藤
樹の講堂であつた)が、今もなほ遺つてゐる。奥地志

略に「藤樹書院は界内二十間ばかり、書院四間に八間、
茅葺の一字なり。傍に祠堂あり。先生の神主を安置

す。大溝城主分部氏の修補するところとす。先生の墓
域は村内玉林寺に在り。」

〔王陽明〕 王陽明は支那明代の哲學者。餘姚の人で、
名は守仁、字を伯安といつた。陽明はその號である。

正徳元年給事載銑等を疏救して、龍陽縣に流謫せられ、
謫所に於て害蟲の來襲、風土の不良に困しめられ、始
めて孟子の性善説から格物致知の理を悟つた。後宸濠
の亂を平定した功によつて新建伯に封ぜられ、死後文

成と諡せられた。その學を陽明學といつて、我が國に

於ても中江藤樹を初め、その門人熊澤蕃山、三輪執齋、
大鹽中齋(平八郎)等その流風を汲む者が多かつた。

その要旨は、心外に理無く事無しとし、心の靈明な部
分を良知と名づけ、何人も均しくこれを有するが、多

くは私慾の蔽ふところとなるから、力めてこれを保全
し、仁義を踏み修養を怠るべからずといふにある。

〔流を汲む〕 その流派に従ふ。その流派を學ぶ。末流
に列する。

〔德行〕 道德にかなつた行爲。正善なるおこなひ。

〔一世〕 その當時。その時代。

〔その風を望む〕 人柄(風采)を仰ぎ慕ふこと。

〔熊澤蕃山〕 京都の人。中江藤樹の門人。名は伯繼、
字は了介、別に息遊軒と號した。曾て備前侯池田光政

に重聘せられて、執政となつて庶政を整理し、學事を
奨励する等、熱心事に當つたが、後辭して京に歸り、
公卿等に教授すること十年、偶々讒に遇つて、大和に

隠れ、貞享四年その時事を論じた著書のため筆禍を受
けて禁錮の刑に處せられた。元祿四年七十三歳を以て
歿した。著書に四書五經等の小解、及び集義和書、紫

女物語等がある。

〔飛脚〕 江戸時代の郵便遞送事業、現在郵便制度の前

身を形づくつたもので、天正十八年徳川氏の江戸に入
府すると、馬込勘解由、高野新右衛門、小宮善右衛門

等に給米を與へて繼飛脚とした。當初は皆官許であつ
たが、元和以後私人の業としてこれを營む者を出し、

漸次發達して、金錢の遞送をなす金飛脚、騎馬を以て
往復する通馬早飛脚等、種々の便利な取扱を爲すに至

つた。以上の外、諸侯飛脚、町飛脚、三度飛脚、仕立
早飛脚、登早繼飛脚、間飛脚、差込幸便、催合幸便等

の稱呼があつた。

〔金子〕 貨幣。かね。金錢

〔兩〕 舊幕時代で本位貨幣。金貨にては一分の四倍、銀

貨にては四匁三分をいふのである。金貨一兩は現今で
は三十圓くらゐの相場に換算されよう。

〔宿〕 街道の宿り。驛、宿場といふと同義。孝徳天皇

の大化二年諸國に驛馬傳馬を置いたことがすでに文書
に見え、文武天皇の大寶令にも、大中小路の諸道三十

里毎に一驛を置き、每驛に驛長を置いた。その後宿驛
は時代の進むとともに益々その數を加へたが、江戸時

代に至り、萬治二年始めて道中奉行を特置して、宿驛
に關する事務を管理せしめた。

〔馬方〕 駄馬を曳くのを職業とするもの。まご。ばく
らう。

〔死したる者の云々〕 大金を失つて生ける心地もし
なかつたものが、その大金があつたと聞いて活きかへ

つたやうな氣がしたこと。「蘇る」は生きかへる。死ん
で一旦冥土へ行つたものが再びかへるといふ意味の言

葉。蘇生する。回生する。復活するなどの意。

〔行李〕 旅行する時荷物を入れるもので、形はつゞら
に似て竹又は柳にて編んで作る。

〔なか〜〕 どうして。なんととして。容易に。たやす
く。

〔當座の御禮〕 さしあたりの御禮。後日重ねて贈る禮
に對しての語である。

〔面持〕 かほつき。顔色。

〔取納め給ふに〕 お受取りになるのにの意。

〔こしらへ言ふ〕 よきやうに取りつくりひいふ。な
だめる。慰めさす。

〔金二歩〕 一分判金二個のこと。金一歩は一兩の四分

の一。一分判金は江戸時代に行はれた金貨の一種で、丹尺一步、又小粒ともいつた。縦五分五厘内外、横三分五厘内外、重量一匁二分内外の長方形で、鑄造の時に因り、慶長一分金、元祿一分金、武藏一分金、文政一分金等數多の種類があつた。藤樹の生存時代に行はれたのは慶長四年の鑄造に係る大阪一分金、雛丸桐一分金、圓一分金、同六年鑄造の慶長一分金で、大阪一分金は、縦六分強、横三分五厘強、重量一匁二分のもの、と縦六分強、横三分五厘強、重量一匁一分五厘のもの、と二種あつて、面に一分と書し、背部に光次の文字と華押とがある。慶長一分金は數種あつたが、各種とも面には桐章及び一分の字、背部には光次華押等がある。

〔理を盡し詞を盡す〕 いろ／＼と道理を並べ、いろいろと言葉をかへていふこと。條理をとききかせること。

〔留め置くべし〕 自分の方に取つて置くの意。

〔餘儀なく〕 止むを得ず。よんどころなく。ぜひなく等。

〔申し請く〕 こひうける意。こは受取るといふ敬語。

〔鳥目〕 青錢のこと。あなあきせん。中央に穴があつて、鶯鳥の目に似てゐることから起つた稱。

〔感に堪へかねて〕 堪へかねるほど感じ入つて、即ち、ひどく感心して。

〔氏素性〕 氏とは往時家系を分つ爲に立てた稱呼。中臣、大伴、源、平、藤原、橘等の類。後世に至り、その所在地の名稱を取つて稱した。これを苗氏といふ。北條、足利等はこれである。素性は素姓で、素からの姓、即ち家系の意。普通素性と書いて、身元、履歷などの意に用ひる。

〔おはす〕 居るの敬語。

〔講釋〕 昔、公衆に對して源平盛衰記、太平記等の軍書を面白く讀聴かしたこと。今は軍書のみに限らず、傳記、小説又は人情話なども、平易に面白く説くこと。こゝでは孝經などの義理を極く平易に、誰にでもわかるやうに毎夜話してきかせたことを指すので、講釋師のそれではない。

〔をりふし行きて〕 ときどき行つて。をりをり行つて。後出の「をりふし田舎よりのほりてゐて」の「をりふし」は、その時ちやうど、あだかも等の意である。

〔無理非道〕 道理にはづれたこと。

〔言捨てて〕 言つたまゝで。

〔からき命〕 あぶない命。將に死なうとした命。

〔各方〕 みなさん。あなたがた。

〔儒〕 學者。儒學を講ずる人。孔子、子思、孟子等の學説を祖述して、四書五經等の聖典に依り、仁義禮智信の五常を守り、それによつて完全な人格を修養し、治國平天下の目的を達する所以の道を講説する倫理學者。

〔隨從〕 つきしたがふこと。こゝでは従つて物を學ぶ意。

〔學徳〕 學問と徳行。

〔更に許し給はず〕 決して、一向に、少しもお許しにならぬ。

〔佇む〕 立ちとゞまる。佇立。

〔いなみがたく〕 斷ることが出来なくて。辭退することが出来なくて。

〔備前侯〕 岡山の城主池田光政。利隆の長子で新太郎と稱した。利隆の後を受けて封播磨を襲いだ。元和三年封を遷して因幡伯耆の二州を領した。同九年八月將

軍徳川家光の諱字を賜うて光政と稱した。寛永三年八月右近衛權少將に任ぜられ、九年五月封を備前に遷された。天和二年五月歿、年七十四。光政學を好んで學校を設置し、熊澤了介(蕃山)を擧げてこれに任じた。教化大に行はれたために名君の稱があつた。

〔いづれも格別の事なり〕 師も師なれば弟子も弟子にて、ともになみなみのことではない。ともに凡庸でないのをほめたのである。

二〇 近江聖人の母

村井弦齋

(近江聖人)

豫備篇

前課に於て、世に近江聖人と呼ばれて中江藤樹その人の徳化のいかに非凡なものがあつたか、即ち近江聖人と呼ばれることの決して偶然でないことをしめしめと味はひ知つた事と思ふ。本課はそれに引續いて中江藤樹をしてよく、かくの如き徳行の人たらしめた母親のその子に對する教育を知らしめたものである。『偉人の陰に賢母あり』とは洋の東西、時の古今を通じて變らぬ眞理である。將來子女の養育に當らねばならぬ女生徒をして、今から心に銘しておかせたい話である。

〔近江聖人〕 近江國の聖人の意。中江藤樹のこと。近江國高島郡の人。與右衛門と稱し、名は原、字は惟命、默軒、等の別號がある。藤太郎はその幼名である。慶長十三年三月七日、近江國高島郡小川村に生まれた。幼時父を亡くしたので祖父吉長に養はれた。九歳の時祖父に伴なはれて伯耆國米子に赴いたが、祖父の主加藤貞泰が伊豫國大洲に移るに及び、吉長とともにこれ

に従うた。十一歳で大學を學び十九歳吉長の後を繼いで加藤侯に仕へたが、性至孝で母を獨り近江國に置くに忍びず、屢々暇を乞うたが許されず、遂に逃れて故郷に歸り、以後孝養を怠らなかつた。而してその傍ら子弟を集めて學を講じた。初め程朱の學を修めたが、既にして王陽明の說を學び、また孝經を以て標旨とし、我が國の學者として、陽明の學を唱へたものは、實にこの人に始まる。而して専心子弟の教育に力を盡したので、徳化四方に遍く近江聖人と稱されるに至つた。慶安元年八月歿、年四十一。中庸解、論語解、孝經啓蒙等約二十部の著がある。

〔村井弦齋〕 氏は三河國の人で、文久三年十二月十八日、豊橋市に生まれた。東京外國語學校露語科に學んだが、卒業はしなかつたといふ。小説家としては、明治三十年前後に於て、文壇に活動した人で、まづ、明治三十年二月に小説「沖の小島」を、同三月には「小猫」を、又翌年一月には「日の出島」を公にして、作家として地歩を確立したのであるが、然し、作家としての系統からいへば、無所屬であつて、硯友社派を當時に於ける本流とするならば、氏は勿論傍流で、しか

も作それ自身の傾向も、どつちがといへば通俗的のものであつたが「日の出島」などは非常な歡迎をうけたものである。しかし、氏が眞に、名聲を贏ち得たのはその後、報知新聞に有名な「食道樂」といふ料理に關する講話を、長い間續けたことによつてである。即ち氏の作家としての生命は、明治四十年頃迄であつた。後は雑誌「婦人世界」の顧問、會社の重役等を勤めてゐる。又氏の斷食療法については人に知られてゐる。氏の代表作としては「沖の小島」「小猫」「日の出島」「槍一筋」「傳書鳩」等の諸作及び「食道樂」等である。

〔近江聖人〕 村井弦齋著。少年文學の一編。明治四十年頃東京博文館發行。近江聖人といはれる中江藤樹の少年時代のことを、正傳といふよりは傳説によつて、少年文學物として書いたものである。當時は非常に愛讀されたものである。

〔可愛い子には旅をさせる〕といふ諺がある。いたづらに恩愛の情に惹かれて、子を甘かすのは子を育てる道ではない。孟母は孟子の修業中途にして歸つたのを見て、機を斷つて戒め、藤樹の母は修業の邪魔を思ふて、心を鬼にして、百里の道を追ひ返へす、賢母の

胸中自ら通ずるものがなくてはならぬ。又、本文の後の原文を見れば、作者の言はんとする所も自ら知れる。即ち「一旦郷里に歸りしが、母の理に諭されて再び百里の道を行き、伊豫の國大洲城内なる叔父の許に到りて、只管勉學に従事したり。固より天稟の聰慧なるに、篤志力行業に勝れたれば、數年にして業大いに進み、二十歳の頃は博學多識城中並ぶもの無きに至れり云々」と。出來るならば、古今の賢母の實話を話し、育兒の任の重大さについて、深く感銘せしめたい。

〔雪ならば幾たび袖を云々〕 出所不明。續千載卷第六に西行法師の「芳野山麓にふらぬ雪ならば花かと思てや尋ねいらまし」などを本歌とした歌であらう。一首の意は滋賀の山を越える時櫻花が雪の嵐のやうに亂れ散つてゐる。もしこれが雪であつたなら、木の下に宿つて幾たびか袖の雪を拂ふことであらうの意。吹雪は吹きに吹き亂れる雪の義。もと風のはげしい形容であつた「滋賀の山」は滋賀縣滋賀郡滋賀村の山。北は比叡山の脈を受け、南は逢坂山に連つてゐる。山を西に越えて京の白川に通ずるのを滋賀越、滋賀の山越といふ。

〔彌生〕「いや生ひ」の義で、草木などの芽の生ひ出る意。轉じて陰曆三月のことをいふ。

〔櫻狩〕 櫻花をたづね歩いて遊び暮らすこと。狩はたづね歩くの意で、紅葉狩、沙千狩等それである。ここは花見の意。

〔これは習はぬ冬の旅〕 雪の滋賀の山越はまだおそはつたこともない。初めての冬の旅である。

〔花の吹雪のそれならで〕 歌に詠まれたやうな花の吹雪ではなくて。

〔霏々〕 雨または雪などの頻りに降る形容。詩經に「雨雪霏々、行道遲々。」とある。

〔凜冽〕 寒さの烈しい形容。ここは膚が裂けるかと思はれるほどはげしく寒さを感じるをいふ。

〔辛苦〕 くるしみ。艱難。苦勞。

〔滿目蕭條〕 見渡す限り物さびしいさまをいふ。滿目は目に見えるかぎり。蕭條は物さびしくしめやかなさま。

〔湖上〕 近江の琵琶湖を指す。琵琶湖は昔は單に淡海といひ、また近江之海といつた。鴨の海ともいふ。近江國にあつて、宇治川の源をなし、日本第一の湖であ

る。南北十七里、東西廣い所が六里、狭い所で一里。

面積は凡そ四十六方里。周圍には八景の勝、即ち石山の秋月、三井の晚鐘、比良の暮雪、矢橋の歸帆、粟津の晴嵐、瀬田の夕照、堅田の落雁、唐崎の夜雨があり湖中には沖之島、竹生島その他の諸島がある。

〔辛崎の松〕 辛崎は滋賀郡にある。大津の北一里。湖濱に巨松があつて、倨然として蟠まつてゐる。枝葉が繁茂して翠蓋地を蔽ひ、數百の支柱をもつてこれを支へてゐる。幹の周五尋、高さ三丈。若し細雨が朦朧として来れば、幽靜佳絶、風色は實に愛すべきである。

夜雨を以て近江八景の一となつてゐる。が、今はこの有名な一つ松も既に枯れてしまつた。芭蕉の句に「唐崎の松は花よりおほろにて。」とある。

〔暮靄朦朧〕 夕暮のもやが、おほろにかすんで暗い有様。

〔堅田〕 大津市の北三里。滋賀郡堅田村本堅田の湖岸に浮御堂がある。海門山滿月院と號し、惠心僧都の草創。落雁を以て近江八景の一となつてゐる。大津市から江若鐵道の便がある。新千載集「春のくる堅田の浦の朝なぎにみるめも知らず立つ霞かな。」(基忠)。林長

老の詩に「鴻雁幾行更不孤。晚風帶月落東湖。囊沙背水堅田浦。猶見孔明八陣圖。」

〔皚々〕 一面に眞白い有様を形容する語。劉楨の詩に「霜氣何皚々。」

〔比良〕 比良山は滋賀郡。木戸、小松の兩村の西に横たはり比叡山の北方に聳えて山勢雄偉である。近江第一の高峰で、高頂は海拔二九〇〇尺。伊吹山と相對して最も高いので雪の降る事が早い。初冬より三月頃まで峰上に白雪を戴き、比良の暮雪は近江八景の一に數へられてゐる。

〔坂本〕 比叡山の東麓で琵琶湖に臨んで居る。今は坂本、下坂本の兩村に分れて居る。延曆寺に登る東路に當るので東坂ともいふ。昔時は延曆寺の僧房がこの村に充滿して居た。

〔我が故郷〕 近江國高島郡小川村が、中江藤樹の郷里である。わが故郷とはこれをさす。父吉次はこの村で農を營み、祖父吉長は伊豫國大洲の加藤貞泰の家臣であり、藤樹もそこで養はれたのである。今はここに藤樹書院が保存されてゐる。又近時藤樹神社の建立も計畫されてゐる。

〔いで〜〕 どれどれ。さあ、「いで」の重語で、人を誘ひ立てるとき、又は思ひたつ時にいふ語。ここは後者の意。

〔心を取直し〕 弱い心をはげますこと。

〔踏みしめて〕 しつかと踏む。ここは足に力をいれての意。

〔山路へこそはかゝりけれ〕 「こそ……けれ」は係結である。助詞「こそ」の係に對しては過去の助動詞「けり」の已然形(けれ)で結ぶことはいふまでもない。ここは山路へとかゝつたの意。

〔痛はしや〕 かあいさうに。氣の毒にも。ふびんにも。

〔藤太郎〕 中江藤樹の幼名。

〔踏みも習はぬ山路〕 踏みなれない山路。不案内な山路。

〔杖にすがりて〕 杖によりすがつて。杖をたよりにして。

〔たどる〕 辿る。たづねさがすの意。延いて不案内な路に迷ひながら尋ね行くこと。

〔闇の夜ながら〕 闇夜ではありながら。闇夜ではあるが。

〔雪明り〕 雪のために闇夜でも明るいこと。

〔いや増す寒さ〕 いや／＼まして来る寒さ。

〔骨にとほりて〕 骨にまで刺すやうに寒さがこたへて。

〔一山〕 全山。山ぜんたい。

〔寂莫〕 ものさびしいこと。ひっそりとしてゐること。

〔閉ぢし氷の下くゞる細谷川〕 水の面は氷がはりつめて、下の方に水の流れてゐる細い谷川。

〔難所〕 行き過ぎ難い所。けはしい所。

〔深山路〕 奥深い山路。

〔進退谷る〕 進むことも、退くことも出来ず、途方にくれること。詩經に「人亦有言、進退維谷。」とある。

〔松の根方〕 松の根元。

〔一入〕 染物を一度染汁に浸すことで、轉じて、一層、一段、ひとときはの意に用ひる。

〔前後も知らず〕 すべてのことを覚え、しやうたいなくなる事。この次ぎに省略されてゐる原文の大意をのべると、この山中に、とある辻堂があつて、一人の老僧が棲んでゐる。この老僧は冬期、旅人がこの山中で雪倒れる者の少なくないのを憂へて、一疋の犬

を飼つて置いて、その雪倒を探さしてゐた。その夜も

犬は峠をたづねてゐたが、雪倒れがあるので、これを老僧に報じた。老僧が行つて見ると一人の少年であつたので、自分の家に連れて来て、種々手あてをしたので、漸く息を吹きかへした。それは即ち藤太郎であつた。ここで粥などの馳走になつて、その夜は辻堂に明かし、翌曉未明に、犬の案内で、故郷の小川の里を指して行くのである。

〔すゝろに〕 そゝろに。何となくの意。

〔須臾〕 しばらくの間。一寸のひま。中庸に「道也者、不可須臾離。」とある。

〔衡門〕 兩柱の上へ冠木を附けた古門。又冠木の上に板屋根をつけたのもある。冠木とは、兩本の柱の横にわたす木をいふ。

〔舊に依つて立つ〕 もとのまゝに立つてゐること。

〔昔日の觀にあらす〕 昔あつたやうな面影はない。

〔築地〕 柱を立て、板を心とし、泥土で塗りがため、屋根を瓦で葺いた垣。土塀。

〔脩竹〕 幹の長く伸びた竹。

〔風情〕 あぢはひ。おもむき。

〔玄關〕 佛語。玄妙の道に入る入口、佛門に歸依する

入口。又禪寺の客殿に入る門。轉じて我が國ではひろく家の正面の入口をいふ。

〔勝手〕 臺所。くりや。

〔車井〕 車しかけにして、釣瓶を上下して水を汲みあげる井戸。

〔きしる〕 軋る。こすれ合ふやうにすること。こすりは摩擦して音を發すること。

〔胸塞がりぬ〕 感情のせまることで、胸がいつばいになること。

〔事の不意なるに〕 だしぬけに起つた出来事に。

〔おつむり〕 「お」は敬語。つむりは頭の義。

〔石の如く立てり〕 石の立つてるやうに身じろきもせずじつとして立つてゐること。化石したやうにじつとして動かぬこと。

〔叔父様〕 祖父吉長。吉長は當時伊豫大洲の加藤侯に仕へてゐた。吉長のもとで藤太郎は學問をしてゐたことは上述の通りである。

〔聲を勵まし〕 聲をふるひあげて。一段と聲を出して。〔和郎〕 またソナタ。お前。目下の人に用ひる對稱代

名詞。

〔眉を揚げ〕 婦人がやさしく怒つた、情の激した形容。

〔怪しからぬ〕 不届た。もつての外だ。

〔此所で聞きませう〕 内へ入らずに、車井の綱をにぎつた、このまゝで聞かうの意。

〔めつたに〕 滅多に。みだりに。むやみに。かれこれのふんべつなしに、めちやなどの意。

〔藤太郎は歸りし次第を云々〕 原本によると、藤太郎は大洲なる祖父の家に来たが、一日母より祖父への消息があつた。その中に母が近頃馴れぬ水仕事をすするため、手足にあかぎれの出来て苦しむ由が記されてあつた。藤太郎は祖父にこの消息を讀み聞かされて、いかにも母をいたはしく思ひ、祖母の家の婢の手を見て、その痛む様を見、益々母をいたはしく、小見心にいかにしてもこれを治させ申さうと焦慮した。偶々大洲を去る六里の地、新谷といふ所に、その妙薬ある由を聞いて一人で城下を出でて、新谷へと向かつた。然るに件の薬は中田長閑齋といふ切支丹宗の信者が製する者で滅多に人に與へなかつたのみならずその時は今しも松山から討手が向かふといふので、四國を落ちて

九州へ行かうとする危急の際であつたが藤太郎の孝心に感じてこれを頷して呉れた。健氣な少年はこの妙薬を一日も早く母に渡さうとて大洲へは歸らずして、そのまゝ唯一人近江に向かつて旅立つた。されど旅の経験なく、あまつさへ、一文の旅費もない身とて、その晩既に宿する家すらもなく、夕暮の道にさまようてゐると、ある親切な家の夫人に救はれて、その夜はその家に宿つた。明くる日旅費などもくれ、旅路の用意などまでとのへてくれたので、藤太郎は嬉しさ身にしみてそこを立出で、辛苦艱難を経て十日ばかりで、漸く水陸百里に近い近江國に辿りつくことを得たのである。それから本文の滋賀の山越になるのである。

【心根】 こころの奥。心のそこ。心のうち。

【あつばれ】 「あはれ」の轉。讚美驚嘆の時に發する語。

【難儀を忍ぶのも】 苦しいのを堪へるのも。困難苦勞を我慢するの意。

【その足ですぐ】 すぐそのまゝの意。ここまですぐて來た足で直ちに。

【大洲】 伊豫(愛媛縣)喜多郡の町。現在郡第一の繁華な地。四圍皆山であるが、肱川市外を環り、四里にし

て長濱港に達し、その間舟楫の便がある。元和二年加藤貞泰、伯耆國米子より移り、六萬石に封ぜられ、以後これをついで明治に至つた。現在人口約五千。

【餘りの事に】 餘り以外なことに。

【默然】 又モクセン。口をつぐんでだまつてゐること。ものいはぬさま。

【力抜ける】 骨が抜けたやうにからだがかたくなること。精神がうつとりとして、身に添はぬの氣が抜けるといふ。

【恩愛の情】 めぐみいつくしむ心。親子の情。

【なまなか】 物事が中途半端。不徹底な態度。

【修業の邪魔】 修業は學問藝術を習ひをさめること。仕事をほえつとめること。ここは、學問を修めるのにさまたげになることの意。

【獅子は子を千仞の谷に落す】 太平記卷十六、正成兵庫に下向の事の條に、正成が正行を河内へ返し遣すとして庭訓を残しけるは、「獅子、子を生みて三日を経る時、數千丈の石壁より是を擲ぐ、その子獅子の機分あれば教へざるに中より跳返りて死するを得ずといへり。」とある。即ち、獅子は子を産んで三日経ると數千

丈の石壁からこれを突落し、もし子が勇氣があれば途中で跳返つて死なないといふ。子を難局に當らせて試みる諺。無門關に「獅子教兒迷子訣」とある。

【聲はうるみぬ】 涙のために咽び聲になつてゐること

【うるむ】は泣聲が交じること。

【素直】 心が和らかたよしまないこと。正直で柔和なこと。おとなしいこと。

【腸の絞らるゝ思ひ】 悲しみに堪へざるさまにいふ語である。腸を絞られるやうな辛い悲しい思ひ。

【忍泣き】 聲を立てずにひそかに泣くこと。涙をかみしめて、人知れず泣くこと。

【聲を呑む】 聲を發しやうとして強ひてのみこんで物をいはぬこと。

【きつとして】 形を正して。屹は山の高くそばだつてゐるさまで、轉じて直立不動のさまをいふ。

【あかざれ】 赤切れの義。寒さのため、手足の皮の裂ける傷状。手足の皮が裂けて赤い肉があらはれるものである。

【妙藥】 きゝめの靈妙なる藥、勝れてきゝめのある藥。

【途中にて得し】 新谷の中田長閑齋から得たことは上

述の通りである。

【雪はなほ霏々たり】 この前に次の原文が省略されてある。「母は何思ひけん身を轉じて家に入り、何物かを取り來つて、我が子に渡し『是は藥の代りに母が和郎に遣すのぢや、それを持つて叔父様の許へお歸りなさい』藤太郎は母の恵みの品を手に取り、『是は金子』母『途中の路用に。藤太郎は押戻し『私は路用なくとも行かれます。それより母様が是で水仕の女でも。』母は堰き來る涙を呑んで、『要りません』と言放つ。雪はなほ霏々たり云々」とつづくのである。

【薄氷】 ここは一面にうすい氷が張つたの意。

【路悠々】 路が遠くはるかであること。

二二 麥 笛

加藤 武雄
(わが小畫板)

豫備 筆者幼時の思ひ出の記二篇である。一は「富士隠し」の話、一は、麥笛と麥ふみとの話。一には、子供に共通の郷土自慢が懐かしくほゝゑまれ、二には、遠いあこがれを胸に秘めた感じ易い憂鬱な農村少年の姿があり／＼と描かれてゐる。そして、どちらにも素朴な農村の少年の生活が懐かしく浮出てる。幼時の回想は人を生れた郷土に結びつける。年と共に郷土から離れ行かうとする心を、しつかと郷土に結びつけるものは、幼時の思出である。中等學校一年の生徒には、或はまだその必要はないとも思はれるが、かうした教材を通じて、その幼時を回想させ、郷土への愛著を更に感じさせる事は決して必要ではないと思ふ。又、かうした教材からの感銘は、その將來、郷土から離れようとする時に會した時、きつと再考させる機縁ともなると思ふ。かうした事も念頭に置いて、十分に味讀させたい。

〔加藤武雄〕 小説家。明治二十一年五月、神奈川縣津

「處女の死」「春の幻」「祭の夜の出來事」、感想集「我が小畫板」等がある。

〔わが小畫板〕 加藤武雄著。大正十三年十月、東京新潮社發行。感想小品叢書の第九編として發行された。

教授篇 「十五の春。私はその時初めて春の哀しみを知つた。それでなくてさへ没落の運命にあつた私の家はその前の年の暮に火事を出して何もかもすつかり焼けてしまつた。たゞ一つ焼け残つた裏庭の土蔵の廂の日だまりにうづくまつて、「東京苦學案内」といふ本を讀んでゐる、とそこへ父がやつて來た。父は私の手からその本をとりあげて、ちよつと表紙を見て、だまつて私の手に戻したが、その時の父の微笑は淋しかつた——」昨者はこんな思出も持つてゐる人だ。そして自分の少青年時代を「淋しい野中の一本道、鳥もなかな路傍に一莖の草花さへ見出されないやうな淋しい道」にたとへてゐる。こんなことを胸にふくませておいて本文を讀むと、友もなく「麥畑、桑畑の間を帯のやうに伸びた野道を」、いろいろな夢をみながら、朝に晩にこつ／＼と歩み続け「たその頃の作者の姿も、淋しく眼の前に浮かび上つてくるのである。あの單調

久井郡川尻村に生れ、小學校を卒業してから以後、十五歳の春より十七歳の春まで郷里を出て横濱に居り、十七歳の春より二十三歳まで郷里で小學校教員を勤め後上京して新潮社に入り、以後二十年精勵一日の如く新潮社の編輯部にあつて金子薫園氏等と共に「文章俱樂部」をして、今日の隆盛を致さしめたのである。

〔「文章俱樂部」は今廢刊されて、それに代つて「文學時代」——昭和四年五月創刊——が刊行されてゐた。〕そして、文筆生活者としての氏の搖籃は雜誌「文章世界」であつて、中村武羅夫、故水野仙子、秦豊吉などの諸氏と共に實に「文章世界」に於ける第一期の投書家であつて、加藤冬海の名で盛に投書したものである。なほ、新潮社へ入社當時も小林愛川の名を以て健筆を振ひ、大正五六年の頃、「新潮」に小説を發表し、當時の新進、芥川龍之介、久米正雄氏等とその雄を競ひ、一躍中堅作家となり遂に大家の名を壇にするに至つたもので、近來は短篇に餘り力作を見せず、専ら通俗小説的な長篇に力を注いでゐるやうである。著作には長篇小説「惱ましき春」「久遠の像」「東京の顔」「都會へ」「練獄の火」等、短篇集「郷愁」「夢見る日」「幸福の國へ」

な、やるせない響を出す麥笛——それをたゞ一つのながさめ、友だちにしてゐた作者の幼い心も、おろかなかけすの話をきいて、それに同情したりする心も、しみじみと感じられてくるのである。本文の始の方は、「北相模の高原の山裾の村に」春がくるまでの——冬の頃の敘景だが、遠山に來た初雪をはじめ見る時の氣持、「おらの村からは富士山が見えるぞ。」と自慢する氣持などが、わづかに少年らしい澁澁さをあらはしてゐる。そして、全體を通じて何ともいへない郷土的な匂が、なつかしく遍滿してゐるのは、その場所のためとしても、ともかく作者の筆のうまさであるといはねばならない。それにしても——最後にいひたいことは、この短い回想記の一斷片が、甘さ、柔かさ、しめやかさ、さういつた感じのものを、實にしつとりと融合させてゐて、一種いふにいはれない、なやましきの中に、讀者をひき入れるまでに魅力を持つてゐることだ。加藤氏の文章は、どんなものでもみな、抒情詩のやうな印象を與へるものであるが、これなどにも、そのやうな特色が十分に現れてゐるのが見られるであらう。

〔神嘗祭〕 正しくはカンナマツリといふ。毎年秋季

に新穀の御饗を伊勢大神宮に奉られる祭典。宮中から勅使を派遣せられる。もとは陰暦九月十七日であつたが、明治以後十月十七日に定められた。

〔山茶花〕 茶梅とも書く。山茶科の常緑喬木。幹は丈餘。葉は椿に似て厚く光澤がある。花も亦椿のやうに紅白の種類があるが、椿が春開くに對して冬開く。

〔眺めやられる〕 遠くの方に眺めることの出来る――。

〔國境〕 本文は作者が郷里に於ける少年時代のことを回想したものである。作者の郷里である相模國は、武藏、甲斐、駿河、伊豆等に接してゐるが、ここでは、その山の方に富士が見えるといふのだから、甲斐境の方であらう。作者の郷里――神奈川縣津久井郡川尻村あたりから見れば、富士は西南に當つてゐる。

〔まだら〕 一面にはなく、ぼつぼつと、あちこちに。

〔――に瞳をあげる心持〕――を眺めやる時の心持。見上げるときの心持。

〔きいと心が引きしまるやうな云々〕 きゆつと胸がひきしめられるやうな、緊張した生き／＼とした民持。遠山にいよ／＼雪が降つたのを見て、「さあ、冬だぞ！」といふやうな感じがピリツとくる――時の氣持

である。

〔白い部分を云々〕 雪の降つてゐるところが増して行つて――雪が多くなつて行つて、やがて始は斑だつたのが、すっかり眞白になつてしまふ。

〔富士隠し〕 文字通り富士をかくして殆ど見えなくしてゐるから、かう呼ばれるやうになつたのであらう。

〔呼びならはしてゐた〕 普段さう呼んでゐた。――さう呼びなれてゐた。

〔一際高い峯〕 連山のなかで、「一際」は、一段。大體に於てなだらかにうね／＼と續いてゐる連山の中にこれだけが一段と高くなつてゐるのである。

〔肩〕 山の中腹と頂上との間あたりを指していふ。

〔額〕 人間でいへば、額にあたるところ――富士の頂の梯形になつてゐるあたり。逆に富士山のやうな形になつてゐる人間の額を富士額といふから、ここではなほこの言葉が利いてゐる。

〔光線の工合云々〕 光線の加減で、見えるやうになるのであらう。光線の具合といへば、この場合では日光のさし工合で、富士山や連山に日の當り方が變つてきたのであらう。

〔梯形〕 二邊だけが平行してゐる四邊形――といつても、ここは富士山の形容に用ひてゐるのだから、二等邊梯形（相對する二邊が平行し、他の相對する平行してゐない二邊の長さが等しいもの）である。

〔八朶の花〕 蓮の花のこと。八つに分れた花瓣の意で蓮の花は八瓣よりもすつと多いが、佛教の方では八瓣といふことに定められてゐるのである。日本では富士山の頂に正しく環聳してゐる八峰――劍峰、白山、久須志、大日、伊豆、成就、淺間、三島――が一樣に純白の雪を被つてゐるのを遠望すると、ちやうど八瓣の白蓮のやうに見えるので「八朶の花」といへば富士山の形容に限つて用ひられる。富士山に芙蓉峰（芙蓉は蓮のこと）、蓮山などといふ異名がついてゐるのもやはこのためである。が、山を八朶の花、即ち芙蓉にたとへるのは必ずしも、富士山に限つたことではないので、支那の荊州記によると「衡山一峰名芙蓉。」とあり、衡山を稱して芙蓉嶺といつたことがわかる。

〔はうふつすべくはなかつた〕 髣髴されはしなかつた。全體の姿を眼の前に描いて見ることは出来なかつた。「髣髴」は眼の前にあり／＼とちらつくこと。又

よく似てゐること。又ほのかなこと。

〔おらの村〕 私の村。

〔匂やかな紫紺の山肌〕 つややかにうるはしい紫紺色になつた山の肌。「匂やか」はつやつやくと麗しい。

〔紫紺〕は、紫がかつた紺。「山肌」は、山の地肌、草木などによつてかくされてゐない山の表面。

〔光を含んだ藍色の空〕 冬の、灰色の、底の底まで曇つたやうな空ではなく、輝かしい日光をふくませてゐる藍色の空。

〔ほのめく〕 かすかに見える。ほのかに現れてゐる。「ほの」はほのか、かすか、ほんやり等の意。雪が消えて山は青み、それが、明るい藍色の空の彼方にかすんで見えるのである。

〔どうかすると〕 ともすると。

〔輪郭〕 とりがこんでゐるすぢ。まはりの線。山の形を表してゐる線。

〔一抹〕 一なすり。筆で一なすりちよつとなすつたやうに出でゐる。

〔夕雲に溶こんで〕 うねうねとした山々の輪郭が、やはらかに夕雲のかけになつて、山とも雪ともわから

なくなつてしまふ。海でいへば、水天髣髴といふところである。

〔北相模〕 相模の北部。ここでは作者の郷里、即ち、津久井郡川尻村のあるあたりをさしてゐる。

〔高原〕 Plateau. あたりの土地より、比較的急激に隆起してゐる廣い平原。山脈に圍まれた高地、火山の噴出物の堆積から成つてゐる高地等、多く高原である。

〔山裾〕 山の麓のあたり。ここでは、山裾あたりが一帶の高原になつてゐるのであらうと思はれる。川尻村は相模の北部、武蔵との國境のすぐ近くにある。そしてその邊には、七國峠とか、小佛峠とかがあり、又、高尾山とか、城山とか、石老山とかいふ、一千尺、乃至二千尺ぐらゐの山々が集つてゐて、川尻村はそれ等の山々の山裾で出来上つた高原の中に、甲州街道に沿うてもよんほりとあるのだ。

〔春が深くなる〕 春が深む——春がたける——次第に春の盛りに近づいて行く。

〔帯のやうに〕 うねうねと細長く。

〔部落〕 少しばかりの人家が集まつて村里をなしてゐるところ。五軒でも十軒でも集つてゐれば、部落とい

へる。

〔驛〕 街道に沿うて、宿屋などがあつて、ちよつとした町をなしてゐるところ。宿場。宿驛。

〔高臺〕 土地が一帶に高くなつてゐるところ。

〔尋常を四年、高等を四年〕 小學校は明治三十三年より、四十年までは、尋常四年、高等四年の制度であつた。が、明治二十一年生までの作者が小學生となつたのは、明治二十七年頃であつたらう。そしてその頃——三十三年以前は、尋常科は三年又は四年だつたのだから、作者は四年の方の課程をふんだのであらう。

〔私は偏窟な子供だつた〕 「偏窟」に、性質が、かたよつて、いぢけて、かたくなること。この頃——小學生時代——から少し後、小學校を出ると間もなく作者は自分の村から二里ほどはなれた村の小學校の代用教員をしてゐた。本文の時期からは少しおくれるが、その頃の作者の回想を記してみれば、「その時分の私は、一個の嫌人主義者だつた。生來『へんくつ』は、内氣な私は、不仕合せな境遇のため、いろ／＼の壓迫でいやといふほどいぢめつけられて、すつかり心持がいぢけてゐた。やうやく世間に出始めた頃から、早くも白

眼に世を見ることを教へられた私は、たとへば、途で知つてゐる人にあつても頭を反けて通り、或は人にあふのがいやさに、わざと誰も通らない小徑を選んで行くといふ風だつた。私は日の光を憚るもぐらもちのやうに人を怖れた。怖から人を憎んだ。おどおどふるへる私の眼の隅に、いかにはげしい反抗と呪咀との思が燃えてゐたことであらう。どこへ行つてもさうだつた

が、私はその小學校でも變物扱にされて、誰からも好意を持たれなかつた。私は路傍の石ころのやうに、淋しく冷やかに、そして孤獨だつた——といふやうな淋しいものである。

〔麥笛〕 説明は續いて本文にある。

「夜寝ても口笛吹きぬ

口笛は

十五の我の歌にしありけり。

この石川啄木の歌は、私に、私の寂しい少年時代を思ひ出させた。

孤獨を愛する事は私の性である。村の小學校に通ふにも、私は友達に交らずに、あの長い野の道を一人で往來した。初夏の日のあまりに明るすぎる淋しさ

に、麥笛を作つて、高く鳴らしながら歩いた幼い日の記憶は、今も、あの麥の莖の甘いやうな、淡い刺戟性の味覺と共に、鮮に私によみがへつてくる——。やがてもつと底深い淋しさが、かすかな口笛となつて唇に上るやうになつた。まことに『口笛は十五の我の歌』であつた。『麥笛と口笛と、これも淋しい作者の思ひ出の一節である。』

〔單調〕 單純な、變化のない調子。

〔甘酸っぱい〕 甘いやうな酸っぱいやうな。本文でもわかるやうに、麥笛は、切りとつたばかりの生の莖を口に含めるのだ。その莖から出る甘味を持つた酸っぱい汁が、吹くにつれて口の中にじんできてる。

〔舌ざはり〕 物を口に入れて舌に觸れたときの感じ。

ここではたゞ甘酸っぱい味覺といふやうな意。「足ざわり」「肌ざはり」などといふ語もある。

〔喚び起す〕 心の中に——。思ひ出す。

〔あこがれ〕 憧憬。ある事を望み、その幻を心に描いて、是非その望を達したいと思ひこがれること。

〔調べ〕 かなでること。奏すること。又、音曲。ここでは麥笛で「吹く歌」。

【飛白】 緋——の模様を置くは、黒い土に青い芽生で、ポツポツ、ポツポツと飛白の模様をそめ出すのである。笛に作れる頃には、もうすつとのびてゐるから、もう一面に青くなつて、少くとも青い太い縞にはなつてゐる。

【霜柱】 冬、寒さが烈しい頃、土中の水分が凝結して柱状の氷となつて、地表の土をもち上げて直立してゐるもの。従つて根の浅い草などは（例へばこの麦のやうに）、下からもち上げられてふらくしてしまふ。

【刺戟】 刺戟とも書く。感覺器に作用を及して感覺せしめること。又はその變化を誘起させること。轉じてはげますすめる、ふるひ起させる意に用ひられるが、こゝは後者。

【かし】 櫻殼斗科の常緑喬木。葉は椎の葉に似て比較的小さい長橢圓形、尖鋭、上面は深綠色で光澤がある。幹は高さ二三丈、樹皮は平滑灰色である。實も椎に似てゐる。材は頗る堅く用途が多い。

【祖父】 作者自身の文を引いておく——「祖父は模範的な農人であつた、野の勇者ともいふべき人であつた。彼は、村の者から『一聯隊』と呼ばれたほどの大勢の

てゐる、記憶してゐることの意でもある。作者は又、

このかけすの話について、次のやうにも書いてゐる。

「——その麦踏の時などに、土の中から小さな栗の實や椎の實が、ころころと足の爪先に轉げ出す事がある。山裾の林の蔭の畑でもあるならば不思議はないが、廣い野原の眞中へ、そんな栗の實などがどこから飛んで来たか。——それについてこんな話を教へられた。それは、かけすが嘴にのせて運んで来たのだ。かけすといふのは、雀より少し大きい、鳩より少し小さいくらの鳥なのだが、彼は空にある雲をめじるしに、くはへて来た木の實をその下に大事に埋めておく。が、雲は常にくらごころを變へるので、埋めておいた場所がわからなくなつてしまふのだ。かけすは利口な鳥なんだが、鳥は鳥だけの智慧しかないのだ——と。私は面白い話だと思つた。近頃では人間の考もこのかけすのやり方とちつとも變らないと思つてゐる。」

【すぐ動き去つたり云々】 いはゆる「舟に刻して劍を求む」のたぐひである。が、捕へて来た蛙を木の枝にさしたまゝ、雲をすら心覺にしないばかりではな

い、捕へて来たそのことすらけりりと忘れてしまふ百

下男共を率ゐて、朝から晩まで野に闘うて、疲れる事を知らなかつた。彼の用ひた鎌は、村中で一番大きな鎌だつた……祖父は生粹の農夫ではあつたが、又、好學の人で書が得意だつた。八九歳の頃から、私はこの祖父から支那の詩文を讀誦せしめられた。とるところと燃える爐の火の明りに、大型の和本の紙魚くさい頁をひろげては、折りとつた櫛の小枝で、一字一字を指し示しながら、祖父は私のために、いろいろな詩文を讀み且つ講じてくれた……六十餘歳でその粒々辛苦の生涯を終つた祖父が、村はづれの茅蠅のなく丘の上の墓地に埋められてから、もうかれこれ二十年近くなる。その祖父が、ありし日の作者に次のやうな話（本文にある話）をしてくれたのである。

【かけす】 懸巢と書かれてゐる。燕雀類の鳥。鳩より稍小さく、背面は赤茶色、腹面は色淡く、頭は白くて黒い條がある。嘴は大きく、その根元は剛い羽毛があつて鼻孔を蔽つてゐる。秋の末頃群飛する。他鳥の音聲をまねするのが巧だから、飼養される事もある。昆蟲や莓を食べる。一名、かしどり。

【心覚え】 記憶しておくためのしるし、又、心に覚え

舌のやうな奴もある。

【せつかく】 わざわざ。これに折角といふ字をあてるが、これは後漢の郭林宗といふ者が、途中で雨に降られてその中の角が折れたのを、人々がわざわざまねて巾の角を折つたといふ故事から出でゐる。

【私は子供心に】 木の實を見附けられないかけすの話聞いて、子供らしい心から——「子供心」は、子供らしい、分別がなく、經驗などの少い、罪のない心。さういふ心からばかばかしいなどと思はず、眞面目になつて信じて——。

【かけすばかりの悲しみではない】 又人間の悲みでもある。前記した作者の引用文の中に「——人間の考もこのかけすのやり方とちつとも變らないと思つてゐる。」といふ言葉があつた。なるほど人間も、いはれて見れば、頼りにならないものを頼つたり、空中に樓閣を作つて樂みにして待つてゐたり、根も葉もないことを信じて見たりしては、いよくとなつてから歎いたり吐息したりしてゐるではないか……子供の時は、かけすに眞剣に同情したりしたが、今この年になつて考へてみれば、なに、人間だつて誰かから同情される

身分なのだ、かけすを憐むなんて、柄にもないことだ
つた。

参考篇 筆者加藤武雄氏は、精力家であり健筆家であることは、文壇周知の事であるが、全く達者な文章で、流れるやうな澁みのない文章である。そして作の傾向は素朴な郷土趣味を帯びた、いはゆる郷土藝術的な作である。故に、或批評家は、「氏の本道、それは農民小説、それとも郷土藝術とでもいはうか、氏の初期の作には農村を題材にしたものが少くない。しかも『祭の夜の出来事』などは、よく農村を書いているといふばかりではなく農民に對する理解と意志が働いてゐるのを見通してはならない。」といつてゐる。なほ、中西伊之助氏は、直接この「祭の夜の出来事」を評して、「ドストイェフスキーの作、『カラマーゾフ兄弟』にちよつと似よつた處がある。」といひ「最初から、讀者の興味をぐんぐんと惹きつけて行く所もさすが練達されたものだと思つた。」といつて氏の作とその文章とを賞して居り、又、細田源吉氏は、大正八年氏が賣出した頃「文章世界」の五月號に載つた「小さい謀叛人」を評して、「楽しみにしてゐた祭の日に、朝からこき使はれる奉公人の、主人に對する反抗心を描いたも

ので、祭にあこがれるその子供心や、逃げ出さうとした主家から、あべこべに追出されて、實家へ歸らずに町の伯父を頼つて行く心理などが、極めて素直に表されてをり、また點出されたそれ／＼の人物も、巧に表されてゐる。」といつてゐる。そしてこの二つの評中に於ける「極めて素直に」といふ言葉や「讀者の興味をぐんぐん／＼惹きつけて行く所もさすが練達され……」といふやうな言葉は、まことに氏の筆致を評するものとしては最も適確な言葉であらう。かくの如く、氏は文章に於ては流れるやうな文章を書く人であり、その作は郷土藝術、乃至は農民文學とでもいふべきものであらう。

二三 新 柳 與謝野晶子

豫備篇 本學年に於ける韻文教課の最後として、少し早目ではあるが、初々しくも爽快な感じのする新柳の詩を据ゑた。作者の名は本教科書として現はれる最初のものではあるが、すでに文學雜誌などで知つてゐる生徒もある筈である、それほど女流文學者としては名高いのである。その用意を豫想して本課を親しませ、教授を進めて行き、本學年度の最後の韻文教授として生徒たちに韻文の何たるかを組織的に統一的まとまりをつけさせたいと思ふ。

「與謝野晶子」 詩人、歌人、文藝評論家。詩人、歌人國文學者であつた鐵幹與謝野寛の未亡人。工學博士鳳秀太郎の妹。明治十一年十二月、大阪府堺市に生れた。堺市立高等女學校を卒業後、史學、文學を獨習し、三十三年以來新詩社同人として歌壇に新機軸を出した。大正元年夫寛の後を追うてフランスに旅し歐洲を漫遊して歸つた。評論家としては夫寛の主宰した雑誌「明

星」の同人となり異彩を放つてゐる。現在は文化學院の學監を勤め理想的な現代的生活力を有する女性漸養に努め、家庭にあつては十餘人の母性として、夫寛を助けて來た。作風は自然の美景に傾倒する心と日本古典文學に對するあこがれとが根本を爲してゐて、その上に西洋のロマンテイシズムの傾向が影響してゐると思はれる。著書多く、「新譯源氏物語」「新譯榮花物語」「晶子短歌集」「火の鳥」「若き人へ」「心頭雜草」「愛」「理性及勇氣」「春泥集」「夏より秋へ」その他五十種以上。「與謝野晶子全集」が刊行されてゐる。

教授篇 詩の取扱については本書卷一にもすでに觸れておいたが、尙、總括的に生徒に注意させておきたい。韻文は低誦微吟することによつて、その中に流れてゐる妙趣妙味が感動的に味はれること、巧妙な措辭と語句の排列とによつて盛られてゐる無限の詩心が味得出來、從つて詩句に對する鋭敏な觀察を忘れてはならぬこと、詩を味はふことによつて詩人の想念を生徒各自の心象の中に再構成させその詩人と同一の詩境に到達してこそ詩の魅力、効果があるのであるから、そこまで徹底すべきである。尙、本詩は四節に分れ、遠望から近望、新柳の下、

新柳の枝を引く、といふ様に遠方から身近かにと距離を近づけつつ各の情趣を極彩色の様に鮮明に描き出している點に生徒の注意を惹かせたい。

〔るり色〕 瑠璃色。紫色に似た紺色。

〔雨のあと〕 雨の降り止んだあと。

〔並木〕 街道に立並んだ樹木。

〔柳云々〕 柳の木が遠くから見れば圓形に見えるからさういふ。尙柳そのものについては参考篇参照。

〔淺みどり〕 うすみどり色。深みどりの對。

〔日傘か〕 日傘とでも言はれようか。柳の圓い形を日傘に形容したのが面白い。

〔鳳凰〕 支那で麟、龜、龍と共に四瑞として尊ばれた假想的な鳥であつて、聖徳の天子の兆として現れるといはれてゐる。形は前が麟、後が鹿、頭が蛇、尾が魚、文様は龍背は龜領、嘴(あご)は燕、嘴は鶏に似てゐる身に五彩を備へ、高さ二米位。聲は五音に中り、梧桐に棲み竹實を食ひ、醴泉を飲み、衆禽必ずこれに従つて集るといはれる。

〔錦尾〕 錦織の様な麗しい尾。柳の枝の形容。

〔翡翠〕 寶石の一種。鮮やかな翠綠色を呈する硬玉で緞

密で光澤がある。支那やビルマ等に産する。新柳の葉に宿つた露だから翠綠色に感じられたので、特に翡翠と形容した。

参考篇 左に散文譯を試みる。

〔第一節〕 (新柳の遠望) 空は瑠璃色の美しさだ。雨の降つたあとである。すつと並んだ並木の柳は遠くから見ればまんまるい形をしてゐて、そよ吹く風のためにサツサツと靡いてゐるうすみどりの色の麗しい新しい柳の芽。

〔第二節〕 (新柳の近望) 並木の新柳を少し離れた距離にして見る時は、恰度散歩してゐる路の少女たちが上半身を深々と隠す様に指してゐる傘とでも言はれ様かしら。

〔第三節〕 (新柳の下にて) 並木の新柳の木蔭に立寄つて見る時は、それは恰度立派な繪の中に舞ひ躍つてゐる鳳凰が雲の上から垂れてゐる錦織の様な麗しい尾とでも言はれ様かしら。

〔第四節〕 (新柳に觸れてみる) 空は瑠璃色の美しさだ。雨の降つたあとである。すつと並んだ並木の柳のその枝を、ぐつと引けば翡翠の様な露がハラハラと散

る。

〔柳の種類と柳の句〕 楊柳科の落葉喬木で、多く水邊に生じ、枝を折つて地に挿しても容易く根を生ずる。くらゐる生長力が強い。

〔枝垂柳〕 は樹皮は灰白色で稍赤味を帯び、枝條細くして下垂する特性がある。葉は細く鮮緑で挿木として繁殖し易い。一般に柳といふのはこの種類を指すのである。

〔水楊〕 は原野の水邊に多く、高さ二三尺から四五尺で、樹皮は赭黒色、葉は披針形で互生し、尖頭にして細鋸齒がある。春日葉に先だつて花を開く。花は雌雄異種、穂状をなして黄綠色である。

〔白楊〕 は山地に自生し、幹の高さ十數尺に達し、葉は互生して廣楕圓形で稍菱形をなし、先端は尖り縁邊は鋸齒になつてゐる。葉柄が長い。ため風に動き易い。四月頃紫褐色の穂状花を開く。箱柳、やまならし、瘤柳の異名がある。

〔杞柳〕 は水邊に自生し廣く栽培せられる。年々枝條を刈り取るために叢生灌木状をしてゐる。枝條は皮を剥ぎ、漂白して行李を編む故に、行李柳とも云ふ。枝條は

長く延び葉は針狀披針形で、對生或は輪生し、縁邊に微鋸齒がある。單性異株で春褐紫色の穂状の花を開く。

〔猫柳〕 は河邊に生じ、又園養せられる。高さ五六尺、葉は長楕圓形で稍厚く、雌雄異株、早春葉先だつて花を開く。雄花穂はその蕾に柔滑絹絲狀の白色を密生する。花は紅色で黄菊がある。普通挿花にするのはこの雄花で、雌花は果が熟して絮を飛散する。(俳諧歳事記)

○あち東風や面々さばき柳髮

芭蕉

○引よせてはなしかねたる柳かな

丈草

○釣竿の糸吹そめて柳まで

千代女

○大犬をこそぐり起す柳哉

一茶

○大門や柳かぶつて灯をとます

子規

〔柳の詩〕

川柳 小山内薫

照り日照り續ける十日

川やなぎ川にいへらく

「雨降らぬ空ゆるなれど

わが枝もわが緑葉も

塵に染み土に染まりて

むさくろき幹や梢や
かかる身を君に映して
わがこころ心苦しき。」

夕立の來れる夕

川やなぎ川にいへらく

「すは今ぞ、身もすがくし

うつさなむ、清き姿を。」

よろこびて頸をのせば

いま川は濁りて流る。

〔作者近詠〕

春風（昭和十一年四月）

○雪を被て甲斐上野の山立てる春の都の白蘭の花

○雪がちの春に漏れて野梅さへまじり緋桃に若芽柳に

○柔かに陽春の日の初まりて花の林へ鳥きたり啼く

○柔かに遠山を据ゑ大木の柳の下を霏ゆききする

○浅みどり春の大野の柔毛をば撫づる小雨のなつかしき頃

三三 三都氣質 鶴見祐輔

（三都物語）

〔豫備篇〕 本課は趣をかへて世界主義者ともいふべき作者の得意の文を据ゑた。これは又本課自修文と共に併讀させるべきものである。作者は外遊數度、内地に居た年月よりも寧ろその方が長かつただけに、よく彼の地の風土に親しみ、歐米人の氣質の表も裏も知盡してゐる。かうした氏が、フランス人とイギリス人とアメリカ人の氣質の相違を知らした文である。空虚な評論でなく、又強ひて訓戒的な語句も用ひず、ただ端的な實例に依つてそれを述べてゐる。この事は讀者にとつて、より深い興味と、より強い感激とを與へずには惜かぬであらう。

〔三都氣質〕 本文にもある様にアメリカのニューヨーク、イギリスのロンドン、フランスのパリといふ様に三大都市に於ける國民性の比較である。「氣質」は、生まれながら備へてゐる性質。もちまへの性質、例へば江戸ッ兒の氣質といへば、潔癖で義理堅く、瘡我慢が強くて涙もろく、しかも見え坊で、癩癩持で、弱氣で

オツチヨコチヨイといふが如きである。しかし「書生氣質」「侍氣質」「職人氣質」等の場合には、その身分に相應した特殊な氣性の意であつて、「カタギ」と讀むのが普通である。

〔鶴見祐輔〕 政治家、評論家、小説家。明治十八年群馬縣前橋市に生まれた。明治四十三年、東京帝國大學政治科を卒業。後藤新平子の女婿で、曾ては鐵道省の參事官として、省内切つての手腕家として有名であつたが大正十二年官を辭し、普選最初の代議士として將來の大政治家を囑されてゐる。氏は幾度となく歐米に遊び各國元首や大政治家等に會ひその意見を交換したことは殆ど無數といつてよいといふ。故によく世界の事情に通じ、その見聞の廣き、又はその識見の高き、新進政治家として、まさに代表的人物である。最近は「母」以下幾多の小説をものしてゐる。氏の著としては講演集「鶴見祐輔氏大講演集」等もあるが、自ら筆を執つたいはゆる代表作は「三都物語」「南洋遊記」「思想・山水・人物」「北米遊説記」などである。

〔三都物語〕 鶴見祐輔著。パリ、ロンドン、ニューヨークの三都を主題として佛英米の三國民の文明を説い

たもので、興味深い著である。大正十二年五月東京丁未出版社發行。

【著者】 作者の文章には優れた常識と該博な知識と高邁な識見とが根柢をなして居り、而もくくだしい理窟はなく、何人にも解り易い常識的な言葉で説いてくれる。本課の如き實にその文範であつて、明快な才筆である。軽々とした動作の中には國民性の根は蔓つてゐることがわかるであらう。筆者は文中に些かも註評がましいことを書いてゐないが、それでゐて、その鋭い觀察眼と批評眼が諸所に生彩を放つて表れてゐる。本課によつて英、米、佛の人々の勤勉ぶりを知つた我々は、では我々の勤勉ぶりはどうであるかといふことを、考へて見なければならぬ。そこに筆者が本文を草した意圖もあるはずであるからこの點に十分力を入れて説いて頂きたい。尚、参考篇に本課の大意段落を示しておいた。

【勤勉】 怠らずつとめること。努力すること。

【それ自身】 of itself の譯語から來する。ここは勤勉といふことの意味を強調したので、勤勉といふこととすること、勤勉そのもの——即ち勤勉といふことの實質の意。

「本來の差」 初からのちがひ、もとからの相違。

「勤勉性」 勤勉な性質。努力する性質。

「外形上、形式上」 Apparently, Formally また外見上といつても外觀上といつても同じで、要するに表面にあらはれてゐる上では、外に見えてゐる上ではの意で、内容上の對である。

「國民性」 Nationality. その國民に特有な氣質、一國民全體に通じてゐる性質。

「パリ」 フランスの首府。歐洲第二の大都會。人口約二九〇萬。セーヌ川に跨がり、ヨーロッパ鐵道系の大中心で、市街外觀の整齊、内部の華麗、美術工藝の發達、歴史的建築物及び美術品の豊富、遊興機關の完備等他に比類なく、實に世界最大の娛樂都市、世界風尚の大中心たると同時に、また世界の最大の城塞市である。公園にはシャンゼリゼー、ルクサンブル、シャルダン・デ・ブラン、モンソー、ピユット・シヨモン、ボア・ド・ブローニユ、ボア・ド・ヴァンセンヌ等がある。

「都會はその國の國民性を云々」 都會では、そのあらゆる地方、あらゆる階級、あらゆる職業の人々が

大集團をなし共同生活を營んでゐるのであるから、都會に於てその國の國民性が最もはつきりと、手ツ取早く知れるわけである。「鮮かに映し出す」は鏡に物象を映すやうにはつきりと現す意。

「ニューヨーク」 大西洋の正門と稱せられ、ハドソン川の口に臨み、世界第一の大都會。人口約六九三萬。

いはゆる摩天閣が統一もなくむやみに高さを競ひ、殺風景な自動車がちやちやと街に滿ち、またその海岸、河邊には無数の棧橋が櫛比し、商船の出入が頻繁で世界の大市场となり、その總額は世界諸港の第一に位してゐる。實にこの街は人口、建築物、市況、貿易額、何でもかでも表面的な世界第一を誇ることにのみ汲々としてゐるのである。もとはオランダ人がニューアムステルダムと稱して、ハドソン河中のマンハッタン島上に創建した小さな一市に過ぎなかつた。

「歐洲化」 精神的にも外觀的にもヨーロッパの影響を受けて、ヨーロッパ的になること。思想、風俗、習慣等から建築等に至るまで、すべてヨーロッパ式になること。

「アメリカの大空氣」 世界一の富をもつて新興の威

を振つてゐるアメリカの偉大な威勢のいゝ潑刺たる雰圍氣——一面に漂つてゐる氣分、感じ。

「躍動」 をどりうごく。ここではアメリカの大空氣が身體全體に強く流れこんで、生き生きとした元氣の籠つた感銘を與へられる意。

「意識する」 意識は心理作用の總稱。「意識する」は感ずる、覺える意。

「ニューヨークはやはり米國である」 ニューヨークはいくら歐洲化してゐるといつても、やはり米國の都會であるから、米國らしい色合をもつてゐることは争はれないといふのである。

「ロンドン」 イギリスの首府。イングランドの東南部にあり、テムス川に跨がり、同河口から二十四哩の所にある。歐洲第一、世界第二の大都會で人口約四三九萬。接續市街を合すると人口七五〇萬となる。世界に於ける商業、工業、交通の三大中心地となつてゐる。市の内外にはセント・ポール寺院、ウエストミンスター寺院、バッキンガム宮殿、中央政廳、國會議事堂、イングランド銀行、ロンドン塔等宏壯な建築物が多い。煤煙と濃霧はこの市の名物で、一年中に快晴は十餘日

に過ぎぬといふ。

【舗道】 Pavement の譯語。普通一般に「舗」と書くが、正しくは「鋪」である。「鋪」は、敷く、つらねる、ならべるの意。石や煉瓦や木煉瓦やアスファルトなどを敷いてある道路。

【打水】 地上を濕して塵を鎮めたり、或は夏の日涼氣を催すために大地にまく水。

【凱旋門】 Triumphant arch 戦に勝つてかへる軍隊を歓迎し、その戦勝を永遠に記念するために、都會の主要な街路などに建てる門。この凱旋門は例のバリのシヤン・セリゼー街頭にある有名なアルク・ド・トリオン・フ・ド・レトアル (Arc de Triomphe de l'Étoile) である。ナポレオン一世及びルイ・フィリップによつて建てられたもの。石造で、三個のアーチより成り、一八〇六年十月建設に着手し、同三六年に至つて竣工した。高さ一六二尺、幅一四七尺。凱旋門の周圍を星の廣場といひ、ナポレオン三世の通じた道が、その廣場を中心にして放射線に出でる。そのうち正面に東西に通じてゐる大通が、有名なシヤン・セリゼーである。

な花があるのを見た時、私はまあどんなにうれしく感じたこととせう、冬なればこそなほ更に……。

【新聞賣の小舎】 小舎の中で新聞を賣つてゐるのである。

【象徴してゐる】 ここは形にあらはして見せてゐるくらゐに簡単に解釋して置いていふ。「象徴」は Symbol である物事の内容を、それと相似せる屬性をもつてゐるものか、又はそれを聯想させるもの（それは形、色、音等すべて五官に訴へるものに限る）かによつて端的に單純に表すこと。例へば花は美貌を、劍は武勇を、又赤は情熱を表すといつた風に。

【黒い質素な著作を着た女たち】 花賣娘である。なほ一般にパリでは「往來を通る人の服装は殆ど黒に限られてゐる。わけで女の服装は一人残らず黒いといつて差支へなかつた。眼を惹くやうな派手な色合は、どこにも見當らなかつた。」(柳澤健氏著南歐遊記)

【耳に快い】 耳に心地よく響く。

【興ずる】 おもしろがる。興に入る。興がる。

【下町】 山の手に對する。東京では山の手(山に近い方の意)は高臺をなして住宅や學校官衙などの多い方

【露臺】 二階以上にある

張出縁)のことではなく、露店の臺といふほどの意である。道ばたに屋根のない臺を設けて、そこで店を開いてゐるのである。屋臺店。

次に森口多里氏の書いたバリの花賣の文の一節を引く。私どもを迎へてくれたのは冬のバリです。襟元に感ずる戸外の空氣の殊更に冷たい冬のバリです。けれども私はこの冬枯の時節にパリを訪れたのを決して悔いませぬ。なぜならば冬なればこそ殊更に深く私を喜ばせたものがあるからです。それはしかし百貨商店の華やかな飾窓でもなければ、巨大な廣告繪の奇矯な意匠でもありません。路傍で花を商ふ小さな屋臺店です。淡紫のリラ、黄のミモザ、藍青の矢車菊、紅白の薔薇、八重撫子、縞模様のチュールリッパ、濃紫の堇の束、葉を赤く染めた 柘 椈に南天——といったやうなさまざまの色彩の花の枝を一杯に盛つた屋臺店は、大通なれば人道の一隅に容易に見出すことが出来ます。その數々の花の間から青い毛糸の頭巾をかぶつた女が白粉氣のない赤い頬をのぞかせて立寄る客を待つてゐます。こんなに冬枯のバリであるのに、こんなに豊富

面を指し下町といへば山の手に對して低地で、商業區になつてゐる方面を指すことになつてゐる。で、ここに「ロンドンの下町」といふのは、東京の下町といふ名稱があるから「東京でいへば下町に相當するロンドンの商業區」といふ意を含めてあるので即ちイースト・エンド (East End. 市の東部) の商業區を指したものである。ロンドンではウエスト・エンド (West End. 市の西部) が東京の山の手に當つてゐる。

【側道】 街路の中央が車道になつてゐて、兩側が人道になつてゐる。側道は即ちその人道の意である。

【商館】 英語の Merchantile house 譯語。商人が營業する建物。

【書記】 英語の Clerk 文字を書きしるす役。又は上役の命を受けて庶務に従事する官吏。

【縫ふやうに】 頻繁な人通りの間を、人を右や左によけよけ通つて行く形容。

【遠いアフリカや印度の貿易云々】 アフリカ洲の英領は南アフリカ聯邦、ローデシヤ、ソマリーランド、ケニア、西部アフリカの各地、元獨領南西アフリカ、タンガニイカ(委任統治)等があり、印度は勿論英領

である。「アフリカや印度の貿易を机の上で云々」はアフリカや印度で行はれる自國對外國の商業上の取引を遠いその領土に足を運ぶことなしに、通信を利用して自國に居ながら、その事務を机上で取扱つてゐるといふのである。

〔日常生活〕 毎日の生活。平生の生活。

〔或小説家〕 フランスの女流作家クールヴアン (Colette) を指す。一九一五年に歿した。

〔腦裡に閃いた〕 頭のうちにふとチラリと或記憶(又は考)が浮かんで来たこと。「腦裡」は頭腦のうち。「ひらめく」(閃)はフット頭に記憶の浮かび出たのになつたのである。

〔蜜蜂のやうに、蟻のやうに〕 本文にも後に説明してあるが、なほ一言すれば、蜜蜂の勤勉さは、絶えず幸福を得たために、その幸福を求めやうと不斷の努力を続けるのであり、蟻の勤勉さは、未來の幸福を得たために、現在の刻苦を忘れて、忍耐して働くのである。蜜蜂は、蜂の一種で、古來飼養せられ、變種及び品種が甚だ多い。群栖して巢を營み、一社會をなす。一匹の女王及び少數の雄蜂は、ただ巢内にあつて

生殖に従事し、他の幾多の生殖機能のない職蜂は、花蜜及び花粉の採集又は巢の營造及び育児等に従事するその巢中に貯藏して冬期の食料に充てる蜜及びその巢から製造せられる蠟は、種々の用に供せられる。(蟻もその社會状態に於て蜜蜂に變らない。)

〔精勵〕 精出して勉め勵むこと。

〔日一日と〕 一日一日と。

〔頭腦に深くしみみて行つた〕 頭に深くしみこんでいつた。次第にその意味がはつきりとわかつて来るやうになつたといふ意。

〔寸刻〕 少しの時間。寸時。

〔翔る〕 鳥や蝶などがはねをのばして高く飛ぶこと。

〔可憐な〕 あはれむべき意から轉じて、愛らしい意に用ひるやうになつた。

〔營々〕 あくせくするさま。奔走するさま。一所懸命に力を入れるさま。

〔餌〕 鳥獸蟲魚の食物。

〔けなげな〕 かひなくしい。心がけがよい。殊勝な。

〔精根〕 身體精神の元氣。根氣。忍耐力。

〔淺草の觀音堂〕 東京市淺草區の金龍山淺草寺。聖

觀世音を安置する。本堂は十八間四面、東都第一の大伽藍である。推古天皇の三十六年三月十八日、都からこの地に流浪して来た土師臣中臣が家臣檜熊清成、竹成の兄弟とともに宮戸川に網を下して觀世音の尊像を得たと傳へられてゐる。一寸八分の白金像であるとのことである。なほ本堂の他に仁王門、五重塔等がありその周圍一帯はいはゆる淺草公園で、瓜生岩子、市川團十郎の銅像や、瓢箪池等があり、有名な凌雲閣十二階は大地震でなくなつたが、活動寫眞館、劇場、オペラ館、曲馬大會、安來節、花屋敷、メリー・ゴー・ラウンド、曲藝、射的、玉ころがし等、殆ど民衆娛樂のすべてを網羅し、民衆的な飲食店、カフェーなども亦構比し、仁王門前の仲見世の賑はひ、活動寫眞街の輻の大群等、一として民衆的ならぬものはなく、東京の大歡樂場となつてゐる。

〔入込〕 人のこみあふこと。又その場所。ここは後者の意。

〔押し合ひ壓合ひ〕 互に押し合ふこと。「壓合ひ」も亦押し合ふこと。おしつけて入りこむことを「へしいる」といふのと同じやうな語例である。

〔地上の豆〕 仁王門から觀音堂に至る石疊の兩側には婆が大きな傘の下に屋臺店を構へ、一皿一錢の豆を賣つてゐる。童子たちがその豆を買つて地上にまいて鳩に與へるのである。踏みつぶされた多くの豆、これ亦淺草の一情景となつてゐるのである。

〔脅される〕 おどされる。おびえさせられる。

〔半分氣を外に配りながら〕 半分は他の事に氣を用ひながら。一方の事に注意すると同様な程度にもう一方の事にも注意し用心しながら。

〔眼の色を變へて〕 眼つきをかへて。物に熱中してゐる眼つきをいつたのである。

〔まさに〕 ちやうど。たしかに。間違なく。

〔餘裕がない〕 ゆとりがない。餘裕は、餘りがあつて豊かなこと。餘地があつて窮屈でなくゆつたりとしてゐること。

〔出勤時間〕 朝、官廳又は會社等に出る時間。通勤時間ともいふ。出勤時間の街々の混雜のさまは本文に詳しく出てゐるが、人々が始業時間に遅れまいとしてあらゆる混雜を侵して、我先にと電車などに突進する所から、近來ラッシュ・アワー (Rush-hour) 突進

時間)といふ語が出来た。

〔地下鐵道〕 Under ground railway. 地下に架設された鐵道。最初に計畫されたのは西紀一八五三年起工のロンドン市内の循環線である。ニューヨークの地下鐵道は、延長二哩の中、一六哩は地下、五哩は高架鐵道であるが、これが工事費は約三千五百萬弗で、線路中最も困難だつた部分は、四哩半に對して千五百萬弗を要したといふ。東京にも地下鐵道が計畫せられ、淺草新橋間だけは既に開通してゐる。

〔この世ながらの〕 死後ではなく、この世に居りながら見ることの出来るの意。

〔阿鼻叫喚〕 阿鼻地獄、叫喚地獄の略。共に八大地獄

(等活、黑繩、衆合、叫喚、大叫喚、焦熱、大焦熱、阿鼻)の一。「阿鼻」は梵語 Avici で無間と意譯する。

故に無間地獄ともいふ。五逆罪の一を犯したものはこの獄に墮ちて、一劫の間、間斷なく痛苦を受けるといふ。「叫喚地獄」は罪人を苦しめ惱ましめて、常に叫喚せしめるよりこの名がある。(叫喚はさけびわめく意)

〔雜沓〕 人や馬の入り雜ること。ひとこみ。こみあひ。

〔目撃する〕 目にとまること。見とめること。撃はふ

れる。

〔市内營業所〕 市内各驛發行の各種乗車券類の發賣、手小荷物の受託及び鐵道の連絡、船車の接續その他一般旅客貨物に關する各種案内等の事項を停車場とは別に取扱つてゐる所。東京では京橋區銀座松屋吳服店、日本橋區駿河町三越、下谷區上野松坂屋吳服店に各鐵道案内所があり、大阪では南區心齋橋筋大丸吳服店、東區高麗橋筋三越に、京都では下京區四條通り大丸吳服店、名古屋では中區南大津町松坂屋吳服店にある。

〔營業〕は特に商業上の關係を有する事業の意。

〔係〕 擔任する者。受持。

〔あつけにとられて〕 「あつけ」は驚きあきれること。「あつけにとられる」は意外な事に出あつて非常にあきれて、ぼんやりとなること。

〔くわつと〕 ここは俄に勢ひこんださま。

〔手に運轉をつける〕 輕快に手が動くやうに勢をつける。

〔噴出す〕 をかしさに堪へかねて笑ひ出す。失笑。噴飯。

〔商務院〕 The Board of Trade と稱する。英國の商

務院は日本の商工省に當る。商務院總裁は内閣閣員に

列すること勿論である。英國の閣員は、首相、國璽尙書、樞密院議長、大法官、大藏大臣、内務大臣、外務大臣、植民大臣、印度事務大臣、陸軍大臣、航空大臣、海軍大臣、商務院總裁、保健大臣、農務大臣、スコットランド事務大臣、文部大臣、逓信大臣、工部大臣、労働大臣である。

〔鐵道局〕 商務院(商務院總裁の管理に屬す)内に設けられた全國鐵道の監督に當る官廳である。日本で鐵道局といへば東京、名古屋、神戸、門司、仙臺、札幌等鐵道系統上の要路に置かれた官廳で、鐵道大臣の統轄の下に屬し、その意思を受けて、その管掌區域内に於ける國有鐵道の現業事務及びその附帶事務を掌る官廳であるが、ここでは當らない。

〔賃金〕 勞力の報酬として受ける金銭。賃錢。

〔一覽表〕 諸種の項目を一目に見ることの出来るやうにした表。

〔紳士〕 淑女に對して、性行が正しくて氣品の高い男子。品格があつて禮儀にあつた人。又上流社會の身分の高い人にもいふ。英語の Gentleman に當てて用ひ

る。

〔統計表〕 同じ多くの個々の事柄をあつめて數字計算をしてその狀況を表にして示したものをいふ。

〔書類〕 かきつけ。

〔累々〕 物の多くかさなつてゐるさま。

〔堆積〕 うづたかく積まれてあること。

〔件〕 タダリの音便。前文に擧げた事項。前の箇條。

〔件の〕は前記の、前にいつた、あの。

〔當惑〕 思案に暮れること。事に當つて惑ひ苦しむこと。

〔筆寫〕 書きうつすこと。

〔タイピスト〕 Typist. タイプライター(Typewriter. 印字器)を使用して文書を印出する事を業とする人といふ、多く婦人である。タイプライターは通信文又は原稿等を活字で自由自在に印刷することの出来る器械。前面にアルハベット、數字等を記した圓形の挿釘を配置し、指先でこれを打てば、槓杆(てこの作用によつて後方に挟んだ紙面に、打つた挿釘に相當する文字が印刷せられるもの。文化の利器として、各官廳、諸會社等に盛に使用せられてゐる。近來これに模して、漢字

及び假名を印字する邦文タイプライターといふものも完成され、使用されてゐる。印刷の速度は邦文のでも熟練したタイピストであるならば、手で書くよりもすつと速いのである。

〔原本〕 書き寫したり拔萃したりしたものなどに對して、そのもとの本をいふ。

〔面食つた形〕 もと目眩の義。泡を食つた姿。まごついた様子。ここは何が何やら譯がわからないであつけにとられたさま。

〔異様〕 普通と違つた風。

〔淨書法〕 綺麗に寫しなほす方法。淨書は清書、淨寫に同じく綺麗に書きなほすこと。

〔諳記〕 暗記とも書く。暗も語もそらんずること。そらおぼえ。

〔遣方〕 爲方。方法。

〔猛烈〕 勢が非常にはげしいこと。激烈。

〔書留小包〕 特殊郵便の一。郵便局で配達を確保し、若し紛失した時は成規の辨償をする小包郵便。差出人には受取證を交付し、受取人よりは受取證を徴する。

〔受取人欄〕 受取人の姓名を書くことを指定されてあ

る箇所。「欄」は文書などの罫線で圍んだ輪郭内。

〔つと〕 急に身を動かして。いそいで。

〔抹消〕 なすり消すこと。棒消しにすること。

〔送票〕 受取人の住所姓名、差出人の住所姓名を書いて小包に付けて送る札。

〔鳩と、蟻と、蜜蜂と〕 鳩のやうな米國人の餘裕のない齷齪とした勤勉ぶり、蟻のやうな英國人の綿密な正確な（そしてどことなく窮屈な）働きぶり、蜜蜂のやうな佛國人の機轉の利いた樂々とした執務ぶりを「頭の中で列べて見た。」といふのである。

参考文献 稍長文であるので本課の大意と段落とを示しておいた。

國が異なるに従つて、人民の氣質も異つてくる。そしてこの國民性の相違は、各國の大都會に於て、殊更に著しく目につく。

パリの凱旋門附近の朝を見、ロンドンの下町の晝を見た作者は、フランスの或る小説家の「佛國人は蜜蜂のやうに勤勉である。」と言つた言葉を泌々と味はふ事が出来た。そしてそれから延いて、米國人のいら／＼した忙しさを、淺草觀音の鳩のやうに餘裕のない忙しさだと考へ

た。そして作者はこの具體的な例として、ニューヨークの切符賣の奇狂な有様と、ロンドンの役人の着實綿密な仕事振りと、パリの郵便局員の、機敏な鮮かな處置振りとを見たまゝ、感じたまゝに述べてゐる。

〔段落〕 は五段に區切ることが出来る。

〔第一段〕 は一四四頁の冒頭から同頁末行までで、三國の國民性を比較してみたといふ總論。

〔第二段〕 は一四五頁末行までで、國民性の反映する三大都市について。

〔第三段〕 は更に三段に小分けされる。

〔イ〕は一四六頁十行目までで、フランスのパリ、
〔ロ〕は一四八頁三行目までで、イギリスのロンドン、
〔ハ〕は一四八頁末行までで、アメリカ人、以上三國民の勤勉性と作者の感想とについて。

〔第四段〕 は一五〇頁五行目まででアメリカ國民性の一端。

〔第五段〕 は一五三頁一行目までで、イギリス國民性の一端。

〔第六段〕 は終りまでで、フランス國民性の一端。

豫備篇

前課三都氣質に於てアメリカ、フランス、イギリスの國民性の一端に觸れる事が出來たが、更に本課も亦英國魂に關する一挿話——キツチナー元帥と一老婆との交渉——を盛込んだものである。單に老婆が元帥に手紙を出したといふだけの文章ではない。一介の老婆の手紙……しかも専門外の事への差出口を受入れるだけの雅量のある所が中心眼目であることはいふまでもない。要するに單なる外國崇拜の意味でなく、採長補短の意味に於て前課と併せ學ぶべき佳話である。

〔穂積重遠〕 法學博士、東京帝國大學教授。男爵。明治十六年陳重男爵を父として東京に生まれた。現日本國民法の權威で、「裁判の簡易化」、「ロシア革命と婚姻法」等の著がある。

教授篇

淡々として、法學者に似ない軽い筆致である。陸軍大臣から返事が來たといふ一五六頁四行目あたりが本課のヤマであるが、一五七頁中程に至り「英國の

立憲政治の美しい所以」と一轉したあたり、必ずしも我田引水論ではない。何故ならば、一五七頁の終りに至つて「日本の國を美しくする所以」を強調する爲に、特に一應英國の立憲政治を擧げてみると見られるからである。即ち採長補短の意を巧みに英國の例をとつて論述したものである。

〔留學生〕 外國に行つて學問を勉強する學生。

〔早稻田〕 東京市牛込區。もとは東京市の西北郊に接してゐる。殆ど田舎風景であつたが、早稻田大學を擁して頗る殷盛になつた今時の状態では、本課の文に引いた意味とは少し違つてゐる。

〔オールドミス〕 Old miss 未婚のまゝ、年老いた女性をいふので、老嬢と譯されてゐる。

〔大した人間ではない〕 別にとり立てていふ程きは立つたもののない人間。

〔キツチナー將軍〕 一八八八年スダン遠征に従ひ、その後ナイル、南阿等に奉職、一九〇二年印度駐在軍總司令官となり、世界大戰當初は陸軍大臣となつた。一九一六年六月、巡洋艦に乗じてロシアに向ふ途中北海に於て艦と共に沈んだ。

〔だしぬけに〕 突然に、何の豫告もなく急に。

〔めんくらふ〕 あわてる。周章狼狽する。

〔レターライター〕 Letter writer 書翰文の要領を書いた文範のやうな書籍。

〔手引の本〕 案内書、入門書。

〔何だつて〕 何の意味で。一體何の目的で。

〔ベルギー人が云々〕 歐洲大戰の當初に獨軍が白耳義の中立を犯して強行通過を敢てしたので、白軍は抵抗に抵抗を重ねたが破れ、白國民は續々英米等の海外國に避難したのであつた。

〔亡國の民〕 母國を喪つた國民。國が減じて寄るべきところのない國民。ここはほろびかかつた國の民。

〔のめく〕 恥を恥としないであつかましく。

〔敵愾心〕 敵と争ひ打ち勝たうとする志氣。

〔駈出して〕 ひつぱり出して。

〔軍國多事〕 戦争のある爲、國事の忙しいこと。

〔金釘流〕 金釘をつらねたやうなぎくしやくした下手な字體を、御家流など書道の流派に對していつたので、惡筆を嘲つていふ稱。

〔署名〕 姓名をしるすこと。所謂サインである。

〔篇と〕 念を入れて。

〔詮議する〕 人々が集つて、物事をしらべさだめること。

〔御趣意に副ふ〕 御心持・御意見にかなふやうにする。

〔國家の重きに任ずる〕 重大な國家の仕事を負ふ。

〔國家の要路に立つ〕 國家の政務の重要な位置に立ち、重要なこと爲す。

參考篇

本課教授の参考としては特に一五七頁にある「英國の立憲政治云々」に關聯して英國の政治を略述することとした。そも／＼イングランドとアイルランドとは別々の王國であつたが、一七〇七年イングランドとスコットランドと合して大ブリテン王國となり、一八〇一年アイルランド加はつて大ブリテンアイルランド聯合王國が建設された。今はアイルランドは北東部を除く大部分は自治を認められて自由國となつた。夙に立憲政治を行ひ、政黨政治、責任内閣制の模範國といはれる。國王は全領土の元首でまた印度皇帝を兼ね、内閣は行政を掌り、二院制議會があつて立法に參與してゐる。

二四 禮儀作法

豫備篇 その昔、唐人は日本使節の禮儀正しいことに感嘆して、我が國を君子國と讃へたことは、誰でも知つてゐる。本課は我が國のこの正しい禮儀作法が遠い祖先に基因するところを説いて、我が國體との關係を詳にしたものである。封建時代の複雑な階級制度が禮儀作法の上に著しい影響を及ぼしたことは暫く措き、遠く古代に溯つて、國語上から、又國民性上から禮儀作法のいかにして發達したかを究め、その支那、西洋の禮儀作法とは根抵に於て相違してゐることを述べてゐる。即ち我が國の禮節は外國のそれとは自ら異なつたところのあることと、國體と離るべからざることを論證したので、我はかうした自覺の下に、今後も益々我が國の禮儀作法を發達させなければならぬのである。本課の大意と段落を參考篇に述べておいた。

〔禮儀作法〕 「禮儀」は禮の仕方。禮式。身分や階級などに従つてそれぞれさまつてゐる禮法。「作法」は身の

こなしかた、たちふるまひの仕方。

教授篇 禮儀作法といへば、すぐ形式の方面のみ考へて、現代の文化生活とは縁の甚だ遠い、いはゆる繁文縟禮として、時代錯誤か何かのやうに思ひ易い傾向がある。が、眞の意味での禮儀作法といふものは、實に文化生活の基調となるべきものであり、禮節を無視した文化生活は考へ得られないのである。「かみを祭り、かみに對する時ほど、心の正しい時はない。」と筆者はいつてゐるが、禮節とは畢竟この敬虔な「正しい心」を持する意である。心が主で、形は従である。特に我が國の禮儀作法は外國のそれとは根本に於て異なつてゐる點、國體に立脚し、國民性に立脚してゐる點などを思ふ時、いかに我が國民にとつて、禮節は重んじなければならぬかといふことが知れるのである。多忙な生活と禮節、財のために汲々する生活と禮節、又簡易生活の主張と禮節、かういふ關係に於て、矛盾を生ずるやうに思ふ者があるかも知れない。が、本課を精讀したならば、それ等の考の誤であることも自ら明白になるであらう。特に本學年が終らうとするに當つて本課の意義を徹底せしめたいと思ふ。

〔禮儀正しい國民〕 禮儀を正しくする國民。禮儀を

粗略にせずに正しく守る國民。

〔知人〕 知りあひのもの。

〔往來〕 ゆきまきする道。街道。

〔お辭儀〕 敬禮。あいさつ。ゑしやく。

〔自國の風俗に較べて〕 西洋人が自分の國の風俗に

比較しての意。「風俗」はならはし、國々の人情、風習。

〔社會〕 Society. 共同の生活をするもののみならず、

共同生活をする團體。又狭く仲間の意味もある。「西洋

の社會」は西洋人のつくつてゐる社會。

〔應對〕 面會してのうけこたへ。

〔簡易〕 手軽なこと。簡單平易なこと。

〔芝居〕 もと芝生に居ることの義。今、芝居といへば

一般に演劇の意に用ひてゐる。演劇は役者が脚本により、種々の扮装をして、種々の言動を觀客の前に演ずる藝術。芝居の語原は、我が劇場史上原始時代に、芝生の上に見物の居所を求めたことに由來する。その起源は普通、南都興福寺の薪の能に結びつけられてゐる。南都興福寺南大門の芝生で、毎年二月七日から一七日の修法の餘興に行はれる演能が即ち薪の能で、室町初期から法會は廢れたが、能は却つて盛になり、江戸時

代へかけて、神聖な禮式化して各元が交代に勤めた

能樂道の盛儀であつた。その場合高貴は棧敷に見物席を設け、民衆は所謂芝居で見物するのであつた。そこで民衆的演劇はいつしか芝居と呼び慣らされ、操り芝居、歌舞伎芝居などといふ言葉が成立するに至つたのである。

〔王様の前に云々〕 勿論、役者の扮した王様であり、

家來である。

〔行儀よく〕 たちふるまひが正しく。「行儀」は進退動作の禮貌。たちふるまひの作法。轉じてたちふるまひのこと。「行儀よく並びませぬ」とはちやんと正しくそろつて、並ぶこともしない意。こたことと不秩序に並ぶこと。

〔異様〕 かはつたさま。

〔日本の芝居云々〕 原文には「日本の芝居の並び大名や、腰元の揃つて出てくるところなどを見慣れた目には、餘程奇體に感ずるのである。西洋の歴史畫を見ても王や皇后の前で寝そべつたり、足を投げ出してゐるものが澤山ある。元來が座る事がなく椅子によつてゐるので、日常の禮儀はすべて立禮であるから一體に簡

易である。」

〔奇怪〕 不思議なこと。心得がたいこと。又あやしいことの意味もある。

〔禮節〕 禮の作法。即ち禮儀に同じ。

〔封建時代〕 封建制度の行はれてきた時代。鎌倉時代より明治維新までの時代の稱。「封建制度」は縣郡制度の對で、諸大名に封土を私有せしめ、子孫相繼いで世襲し、封内の政治を隨意に扱はしめた制度をいふ。即ち鎌倉時代より明治維新まではこの制度が行はれ、諸大名が各地に割據して、その土地人民を領有してゐたのである。この制度の起原は、支那三代(夏、殷、周)の世に、天子の郡四方千里を畿内といひ、その他は諸侯を封じて、各その地を領せしめたのに起つてゐる。(封は諸侯の領地の意)

〔煩はしく〕 面倒に。

〔上下種々な階級〕 例へば江戸時代の如き、將軍の下に大名と旗本があり、それに臣従する諸侍があり、更にその下に、庶民即ち農、工、商があり、最下級には非人、穢多があつた。(階級は世襲的の身分及び職業によつて區別した社會的地位をいふ)

〔主君〕 仰ぎいたゞいて仕へる君。主公。

〔度〕 度合。程度。ほどあひ。

〔土下座〕 貴人などが通行の際、ひざまづいて敬禮すること。

〔禮儀の階級や尊卑の階級〕 その一例を挙げると

「徳川時代には手紙の宛名の下に書く敬稱にも様とかき、殿とかくには大きな相違があり、その様にもカウ様(楷書)、美様(行書)、ヒラ様(草書)と幾様にも書方があり、殿にも楷書が第一、行書が第二と順番があつて、目下の者には自分の名よりも低くどのへと書くのであつて、これは殆ど敬稱ではなかつたのである。その外冒頭の書方、止所の詞などにも古い時代からそれぞれ書方がある。弘安禮節にはこの止所の詞に幾段もあつて、一が頓首誠恐謹言、二が誠恐謹言、三が恐惶謹言、四が恐々謹言、五が謹言、更に之狀如件などがあつると貞丈雜記に書いてある。」(國民性十論)

〔尊嚴を保つ〕 尊嚴を汚されないやうに全くして持つ意。「尊嚴」はたふとくしておごそかなこと、たふとくして犯すべからざること。

〔だん／＼と下の方へ向つて〕 次々に即ち將軍か

ら大名、大名から侍といふやうに次々に下の階級に對して。

〔嚴重〕 きびしいこと。

〔階級の制度〕 士、農、工、商等のやうに、世襲の身分及び職業を基礎として、人の社會上の地位の區別を立てる制度。「制度」は制定せられた法度。さだめ。

〔七重の膝を八重にも折る〕 すでに低く曲げてゐる腰を更に低く曲げて禮をする意。丁寧な上にも丁寧に腰をかゝめて禮をすること。吾吟我集に「交らへば七重の膝を八重に折る袴のひだのむづかしの世や」原文には

「幕府の詞には非常に敬語が多かつたが、宮中の用語はかへつて敬語が簡單であるとの事である。このやうに幕府の權勢で七重の膝を八重にも折らせたことが、今日の日本人の禮節といふものを作つて居るには相違ないが、さりとて日本人は始めから西洋人のやうに平等主義ではなかつた。これは清淨を貴ぶ風と同様、つまり神を貴ぶ風から出たのである云々」

〔本源にさかのぼる〕 もとの起りをたづね探る意。

〔本源はおほもと。みなもと。さかのぼる〕は逆上るの

義。流にさからつて上ること、既往又は根本にたどり及ぶこと。

〔民族の風〕 民族の風習。人民の種族、祖先、言語、風俗、習慣等を同じくする種族。

〔古代の國語〕 古事記や日本書記の文章を指す。

〔敬語〕 うやまひのことば。敬意を表すに用ひる語。

〔古事記〕 三卷。神代から推古天皇に至るまでの歴史であつて現存してゐる我が國最古の勅撰史籍である。天武天皇の御世、諸家に傳へてゐる帝記及び本辭がすでに正實に違ひ、多く虚偽を加へてゐるのを憂ひ給うて、稗田阿禮(當時二十八歳)に勅語して帝皇の日記、先代の舊辭を習誦せしめ給うたが、阿禮はこれを記憶して忘れなかつた。後、和銅四年九月十八日、元明天皇は太安廬に勅して、阿禮(當時六十前後であつたらう)の誦するところの勅語を撰録せしめられ、安廬は同五年正月二十八日に完成して奏上した。これが古事記である。純粹の國文で記してあるが、當時はまだ假名の發明がなかつたから「於底津石根、宮柱布斗斯理、於高天原、氷椽多迦斯理而坐也」といふ體裁に記してある。この書を本居宣長が詳密に註解したものに古事記

傳四十八卷(内、三卷は目錄)がある。

〔神名の上に天、神、稜威(嚴)云々〕 原文には「神名の上に天、神、稜威(嚴)、齋(忌)、湯、御、廣、大、磐、眞、生、瓊、日、彌等の語のあるのは、皆その事業や性行などについての尊美の形容詞である。最も長いには天邇(天邇)志國邇(志國邇)志天津日高日子番能邇(番能邇)々(邇)命などいふのがある。」

〔天〕 おほざらのこと。徳の廣大な義に用ひる。天照大神、天兒屋根命等はその例。

〔神〕 神皇産靈神、神日本磐余彦尊(神武天皇)はその例。

〔稜威〕 嚴、尊嚴な威光の義。稜威雄走神(神武天皇)出雲征討の時天痛に居られた)はその例。

〔齋〕 又イハヒ。忌。穢れを避けて、清淨にする義。齋主神(軍の首途の時道に神祇を齋ひ祭つて行先の平安を祈る)はその例。

〔御〕 物事に冠して尊稱に用ひる語。御倉舉之神(天照大神に賜つた御頸球の名)はその例である。

〔廣〕 あまねく行きわたる義。廣國排武金日尊(雄略天皇の御子)はその例。

〔大〕 讚美又は尊敬の意を表す語。大山祇神、大國主命はその例。

〔その事業〕 その成就した仕事。

〔性行〕 性質と行狀(身のおこなひ)。

〔讚美の意を表した〕 ほめた、へる意味を名としてあらはしたの意。即ち天、神など皆讚美の意味の籠つた語である。

〔ひこ〕「ひめ」は「日子」「日女」である。ひこ(彦)は男子の美稱で、古事記に「飯依比古」「海佐知毘古」などあるはこれで「子」に「日」といふ語を冠して敬意を表したのである。(これは「靈異兒」の意であるといふ説もある)「ひめ」(姫、彦の對)は女子の美稱で「女」に「日」を冠した語である。(これも「靈異女」の意であるといふ説もある)

〔みこと〕 神又は貴人の稱呼に添へていふ尊稱。古事記に「やちほこの神の美許等」萬葉集に「はしきよしなせのみこと」などとある。「御事」の意で尊又は命の字を宛てて書く。伊弉諾尊、日本武尊などはその例である。

〔御子〕 皇子。天皇の御子。天皇の御子孫。萬葉集卷

一に「ひなめしの皇子のみこと」の馬なめてみ狩立たしし時はきむかふ。」

〔御家〕 宮。御屋の義。皇居。御所。古事記に「もしきのおほみや人は云々」

〔敬稱辭〕 他を尊敬していふ時に用ひる言葉。敬語。

〔おほ〕「は」「大」「多」等の語基。語基は言語學上の語で、語幹又は語根ともいひ、用言の語尾(變化する部分)を去つてその變化しない部分をいふ。但しここでは種々の語を形造る基本となる部分の意味をも附加へて用ひてある。即ち「おほ」(大)は「おほいに」、「おほよそ」、「おほかた」等の語基であり、「おほ」(多)は「おほく」、「おほし」、「おほき」、「おほけれ」等の語基である。

〔皇室〕 天皇陛下を中心とした皇家の全體。時としては天皇陛下の御直系のみを、他の皇族と區別して稱することもある。

〔皇族〕 天皇の御身内。皇室の御一族。

〔大臣、公卿〕 「大臣」は太政官の上官、即ち太政大臣左大臣、右大臣、内大臣等の稱。(現在は宮内大臣及び各省大臣の稱)「公卿」は公は攝政、關白、大臣、卿は

參議、大中納言及び三位以上の官吏の總稱。但し、大臣公卿と並べていふ時には公卿は普通にいふ卿の意味に用ひるのである。公卿は又コウケイ、クゲともよむ。

〔一般人〕 おしなべて、すべての人。

〔祖先崇拜〕 祖先をあがめたふとぶこと。「崇」をスウとよむのは慣用音。

〔祭祀〕 まつり。書經に「天神曰祀、地祇曰祭。」

〔社稷〕 「社」は土の神、「稷」は穀物の神。君主が居城をたてる時、この二神を王宮の右に祭り、宗廟(祖先のおたまや)を左に祭る。書經に「宗廟社稷罔和ニ祇肅」とある。これから轉じて、國家、朝廷、宗廟の意味に用ひられる。

〔孔子〕 名は丘、字は仲尼。魯の人。その先は宋の潁公より出た。孔防叔に至つて始めて魯人となつた。防叔の子を伯夏、伯夏の子を叔梁紇といふ。これが孔子の父である。母を顔氏徴在といふ。魯の襄公の二十一年(周の靈王二十年)十月二十一日魯の昌平郷の陬邑(今の山東省兗州府曲阜縣)に生まれた。我が綏靖天皇三十一年で二千四百餘年の昔である。襁褓の中にその父を喪つた。兒として嬉戲するや、常に俎豆(祭器)を

陳ね、禮容を設く、長じて、季氏の吏となり、料量平かなり。かつて司楫の吏となつて、蓄蕃息した。まことに後年禮樂に通達する徴が、すでにこの時現れてゐたのである。周に適き禮を老子に問ひ、門弟は益々ふえた。後、高大な識見を懷き、經國濟民の志を有したが、齊魯等で志を得ず、多くの門弟とともに諸國を歴遊し、後魯に歸つて、國老の禮を以て待遇せられた。書經禮記を敘し、詩を刪り、樂を正し、易の象象、繫辭、說卦、文言を序した。門弟三千、身六藝に通ずる者七十二人。魯の哀公の十四年春秋を作つた。哀公の十六年四月十一日（周の教王四十一年）卒、年七十四（一説に七十三）。魯の城北泗上に葬つた。

〔禮を第一に數へてある〕 支那で古昔、士以上の者が學修すべき六種の技藝、即ち六藝（禮、樂、射、御、書、數）の第一に、禮が擧げてあることをいつたのである。禮は禮式、樂は音樂、射は弓術、御は馬術、書は書法、數は數學である。史記の孔子傳に「弟子三千人、身通六藝者七十二人」とある。論語爲政第二に「子曰。生事之以禮。死葬之以禮。祭之以禮。」

むこと。

〔祝詞〕 祭祀の折或はこれに類する儀式の際に神の前に於て唱へた詞で、奈良朝以前に於て成立した我が國最古の散文である。舊くは太祝詞事。又は天津祝詞乃布刀祝詞事ともいつた。古事記傳卷八に「名の義は宣説言なるべし。能流は必ずしも貴人の命ならでも人に物をいひ聞するをいふ。彼の大祓ノ詞に大中臣に宣といへるが如し。その外にも例いと多かり。説は書紀に太諄辭と書ける諄の字（説文に告曉之熟也といへり）の意なり云々」といひ、更にのりとはのりときごとの略で、俗にのつと又はのつといふ訛であるといつてゐる。

〔文の結構〕 文章のくみたて。

〔恰もその儀容を見るやうに〕 儀容は禮儀にかなつた容貌。但しここでは儀式の様子の意に用ひてある。ちやうど神を祭る時の儀式の様子を見るやうに、祝詞そのものの文も語句が整然として莊重であることをいつたのである。

〔語を重複し對句を重複し文段を重複して〕 「語」はことば。言辭。「重複」は同じ物事が重なり合ふこ

〔この教が我が國に入つた〕 儒教が我が國に傳來したのは應神天皇の朝である。神功皇后の御時頃から朝鮮海峡の交通が自由になり、盛に支那文化が輸入されるやうになつた。即ち應神天皇の十五年、百濟から阿直岐が來朝し、太子菟道稚郎子はこれに従つて漢學を學ばれ、翌年王仁が來て論語千字文を獻じ、太子はまたこれを師とされたといふ。

〔これを待つて〕 そのおかげで。

〔上代〕 我が國では神武天皇から大化の革新の頃までをいふ。

〔まつりごとを以て國を建てた〕 神祇を祭ること、を以て國家の基礎をたてた意。「まつりごと」は今では專ら政治の意に用ひてゐるが、これは祭事の義で、我が國の上代、諸事簡易で祭事と政事との區別がなく（いはゆる祭政一致で）天皇の皇祖を尊崇し給ふのは、即ち國家を統御し給ふ所以で、天皇は神祇に祈つて、國民の安寧幸福を希はれた。即ち宮殿が神宮の正宮と皇居とを兼ねてゐたのである。今も宮中に賢所が奉安してあることはいふまでもない。

〔禮拜〕 ライハイ。敬意を表して、拜すること。をが

と。「對句」は詩歌、文章などで、語句を同じ形に重ねあはせたもの。「柳は綠、花は紅。」はその一例。「文段」は文章の段落。一文章中の大きな一句切り。左に六月 晦大祓の一節を引く。

「高天の原に神留ります、皇が親神漏岐神漏美の命以て八百萬の神等を、神集へ集へ給ひ、神議り議り給ひて、我が皇御孫の命は、豐葦原の水穗の國を安國と、平けく知ろしめせと、事依さし奉りき。かく依さし奉りし國中に荒ぶる神等をば、神問はしに問はし給ひ、神掃ひに掃ひ給ひて語問ひし磐根樹立、草の垣葉をも、語止めて、天の磐座放し、天の八重雲を伊頭の千別きに千別きて、天降し、依さし奉りき。かく依さし奉りし四方の國中と、大倭日高見之國を、安國と定め奉りて、下つ磐根に、宮柱太敷立て、高天の原に、千木高知りて、皇御孫の命の美頭の御舍に仕へ奉りて、天の御蔭日の御蔭と隠り坐して安國と平らけく知ろしめさむ國中に、成出でむ天の益人等が過ち犯しけむ、雑々の罪事は天津罪とは呼放ち、溝埋め、樋放ち、頻時、串刺、生剝、逆剝、尿戸、こごだくの罪を天つ罪と宣り別けて、國の罪とは生膚斷ち死膚斷ち云々」

〔莊重森嚴〕 おもおもしろくておごそかなこと。莊重はいかめしく重々しいこと。森嚴はぞつとするほどおごそかなこと。

〔儀禮〕 儀式。典禮（定まつた儀式）。

〔坐作進退〕 坐作も進退もたちふるまひのこと。身のこなし。舉動。周禮に「大司馬之職、教坐作進退疾徐疏數之節」

〔心の正しい時〕 邪念なく、嚴肅な心になる時の意。

〔みや〕 りやまふ、即ちうやまふこと。禮。神代記に「盡主人之禮」

〔みやノしく〕 「みや」を重ねた語。「うやうやしく」に同じ。恭しいさま。つゝしんで。

〔神を祭る時の態度がみやである〕 神をお祭りする時の恭しい様子それが禮であるの意。態度は物事に對する舉動、様子の意。又或物事に對する心のもちかたの意もある。

〔身を修め〕 禮をもつて心掛を直し、行を正しくすること。

〔則とる〕 「のりとる」の音便。「のり」は一定のおきて、てほん。標準として従ふ、模範として従ふ、法と

しての意。

〔行跡〕 みもち。品行。行狀。人の行爲の痕跡の義。

〔一室に獨坐する時でも云々〕 即ちその獨を慎むの意である。たとひ一室に獨坐してゐる場合でも禮に適つた心掛と態度とを忘れずに居らねばならぬといふ意。大學に「君子必慎其獨也」とある。

〔儒教〕 儒學の教。儒學は孔子、子思、孟子等の説によつて、四書五經を聖典として仁、義、禮、智、信の五常を守り、以て完全な人としての務を修め整へ、ひいては家を齊へ國を治め、天下を平にすることを究明する學問。

〔國民性〕 Nationality. その國民に特有な氣質。一國民全體に通じてゐる性質。

〔かの聲望ある人の權威命令は云々〕 日本には古代から下々のものは上のものを尊重する氣風があつたので、かの勢力や人望のあつた人（例へば攝政、關白將軍、執權などをいふ）が古來の風習を利用して、自分の權力、威光、命令でもつて今まで以上に上下禮儀の等級を生ずるやうにさせたのに過ぎないといふ意。

前の「日本人の現今の禮節は、久しい間の封建時代を

經て云々」から「……七重の膝を八重にも折るといふ禮節を作つてゐるには相違ない」までのところと照應する。「權威」は權力の威勢。侵すべからざる威嚴。聲望はほまれ、評判、名聲、人望。

〔交際上の習慣〕 つぎあひ上の習慣。「習慣」はならひ。ならはし。

〔騎士道〕 Knighthood. の譯語。歐洲に於て、中世期封建時代に騎士（Knight）の間に行はれた道徳。騎士

風ともいふ。忠節、武勇、禮儀、義侠を尊重した點は我が國の武士道及び男伊達に酷似してゐる。騎士は中

世に於ける一階級で、中流良家の子弟より成り、幼時から貴族に事へ長じて武藝を練習し、やうやくその資格を得たのである。忠義廉恥を重んじ、言行を慎み、

婦女を敬し、常に騎馬で往來し、一朝事あれば君主に従つて出陣し、戦功をたて、武人の花と稱せられた。

その起源は遠くローマ時代にあるので、封建時代に至つて隆盛を極め、十六七世紀頃から漸次衰微して遂に廢絶したのである。

〔婦人を重んずる事が主になつてゐる〕 原文にはこの次に「西洋の男が街道で女の手を引くのもこれを

扶助する意である。宴席に婦人を手にかけて案内するのもこれがためである。内では中のわるい夫婦でも人前では甚だ睦ましい。我が國とは反對である。」

〔文明國〕 文明開化の國。開けた國。文明は文明開化で教化が開け、文物、政法の大いに善美なること。人文の明らかなこと。

〔當然〕 あたりまへ。理の當に然るべきこと。

〔元來〕 元から、始から。

〔平等主義〕 主従上下の區別を設けず、彼我の階級を撤して人々を平等に遇する主義。平等は異同なく一様なこと。差別のないこと。「主義」は自己が執り守る一定の進路。旨として主張する根本の標準。

〔かみ崇拜〕 「かみ」(神)「かみ」上(上のもの)。みな同語源であつて、この「かみ」崇拜は、單に神崇拜、祖先崇拜の意には限らず、廣く上のものを崇拜する意に取る方がよい。

〔廢棄〕 うちすてる。とりのぞく。

〔文物〕 文化に關する事物。ここでは西洋の學術技藝その他一切の文化に關した物を指してゐる。

〔輸入〕 はこび入れる義。特に外國の物産を内國に買

入れること、外國のものを内國に入れる意に用ひる。
「輪」をユとよむのは慣用音で、正しくはシユ。

「今日の我が國の禮儀作法は云々」 原文には「今日の日本は何事も混雜の世で一切の禮儀作法は大いに亂れた。それもそのはず、數百年來三百諸藩それぞれの習慣風俗も一固りになり、東西の風俗も混交したからである。禮節としては何も極つて居らぬ。今の社會の上流に立つ人は、いはゆる明治維新時代の亂暴な時世を経過した人で、これ等の人々の禮儀を頓着しない風が國民に影響した事も多い。」

〔學生社會〕 學生仲間。

〔禮節の觀念が薄い〕 禮節に對する考がうすい。禮節を思ふことがなげやりになつたこと。「觀念」はかんがへおもふこと。心理學上では事物が我々の精神に映じて生ずる心像。即ち心中の森羅萬象をいひ、佛教では餘事を思はずに一心に佛道を念ずることをいふ。

〔禮節の國民〕 禮節を重んずる國民。

〔一切の舊禮を忘れる〕 すべてのふるい禮儀を棄ててかへりみない。この「ふるい禮儀」とは將軍、大名等に對する禮儀を指す。

〔變革〕 かはりあらたまること。又はかへあらたまること。

〔明治維新〕 「維新」は國政の改まること。「これあらたなり」の義。詩經大雅に「周雖舊邦、其命維新。」とあるのから出た。我が國では特に明治初年の政變即ち王政復古に限つて用ひられる。慶應三年十月、徳川慶喜は大政を奉還し、十二月九日、明治天皇は王政復古の大號令を發せられ、翌慶應四年九月八日、明治と改元された。

〔せめては〕 せめての事に、思ふことがかなはねば。その十が一、二なりとも。已むを得ずば。

〔秩序〕 物事の條理。物事の順番。しだい。順序。

〔統一〕 まとまり。一つにすべまとめること。

〔國體〕 國家をその組織、特にその主權の所在によつて觀察した稱。これを君主國體と共和國體との二つに分つのである。

〔參考篇〕 長文であるので大意と段落を示しておく。

〔大意〕 日本人は禮儀正しい國民である。應待挨拶なども極めて丁寧でかのすべてを簡易にやつてのける西洋人などとは比べものにならない。さて日本人の現今

の禮節はどこに由來するか。長く續いた封建的階級制度の影響は勿論ある。しかし、その本源は遠く溯つて

上代に求めなければならぬ。敬神——「かみ」を崇敬する心と拜跪する姿とが凝つて自ら渾然たる禮節を形成するに至つたのである。「拜む」「禮」などいふ大和言葉の一つ一つが含蓄する深長の意味によつても、この間の消息は十分に窺はれる。かの後來の孔子教によつて始めて我が國民が禮を知つたといふが如き、畢竟歴史に味き者の謬説にすぎぬ。尤も儒教思想の浸潤によつて、我が國本來の氣風が一層助長されてきたことは認めなければならぬが……西洋にも亦種々の禮儀作法があるがそれは本來平等思想の上に立つものである。「かみ」崇拜のそれとは全然區別さるべきものである。然るに階級制度の廢棄と西洋文明の輸入とで、今日我が國の禮儀作法は、大いに亂れてきた。殊にその傾向は學生社會に於て最も甚しい。敢て舊套を墨守せよとはいはないが、もう少し秩序あり統一ある禮節を守らねたいといふのがその大意。

〔段落〕 次の六段に區切つてみる事が出来る。

第一段 一五九頁の冒頭から一六〇頁八行目まで

日本人の禮儀正しいこと、西洋人との比較。

〔第二段〕 一六二頁九行目まで、封建的階級制度と儀禮(前半)と、敬神の風と禮節(後半)とについて。

〔第三段〕 一六三頁七行目まで、孔子教の影響について。

〔第四段〕 一六四頁四行目まで、禮儀作法の出來た由來について。

〔第五段〕 一六五頁三行目まで、「禮」の意味内容について。

〔第六段〕 終りまで、日本禮節と西洋のそれとの根本相異(前半)と、禮節觀念の稀薄化に對する反省と自覺とについて。

尙、本課は故芳賀矢一博士の名著「國民性十論」のうち第九章の「禮儀作法」に據つた。

二五 家庭に於ける禮讓 鳩山 春子

孫備備

前課に於て、我が國民の禮節が、いかに我が國體に根ざした國民性の一つとして著しい特色を持つてゐるかを知つた。即ち、我が國民の禮節の傳統を知つた。本課はこれに關聯して、その禮節が家庭生活を、大成する上に、いかに重要な役目を持つてゐるかを明かにした一文である。將來一家の主婦として、家庭生活の中心勢力とならねばならぬ女子の、今から心に留めておかねばならぬ説として傾聴すべきであらう。

「家庭に於ける禮讓」 「禮讓」は禮をつくして、他人にへりくだること。家庭生活と禮讓との大切な關聯について説いたものである。

「鳩山春子」 教育家。共立女子専門學校、共立女子職業學校長。昭和十三年歿、年七十八。女子高等師範學校の英語科を出、早くから教育に従來した。鳩山和夫氏の夫人で、嘗ての文相鳩山一郎氏はその子息である。

教授備

作者の本文起草の趣旨は、その最後に「社會

の基本は一家であります。社會の美風は一家の美風を擴大する事によつて實現する事が出来ませう。私も現代の女性に更に一步を進めて、一家の美風の源流は女子の心情にあるといふ信念の下に、自重努力して、禮讓の美風を家庭に實現しようではありませんか。」といつてゐるので明らかである。叙述の推移を辿つて、本文の主旨を是つきりと理解し、作者のこの結語に添はしむべく、十分生徒に銘せしめねばならぬ。

「萬物の靈長」 天地間のすべてのものの中で、最もすぐれたもの。「萬物の靈」ともいふ。

「自稱する」 自ら自分をほめほこる。

「人類」 我々の同類を他の生物と區別していふ語。人間。

「高尚」 程度の高いこと。學術などの意義の高く深くして容易に解し難いこと。けだかいこと。こゝは最後の意。

「野卑」 野鄙とも書く。げびてゐること。

「文明の恩澤」 世の中がひらけ進んで、すべてのことが便利重寶になつて來たことから受けるめぐみ。なまけ。

「軒を並べて云々」 家を接して住む、即ち共に生活してゐる。

「人品の高下」 人がらの高い低い。

「品位」 人格の有するそれ自身目的ある所の独自の價値。こゝでは簡單に人がらといつてもよい。

「眞の意味に於ける紳士淑女」 紳士とは性行正しく禮儀に厚く學徳ある人、品格があつて禮儀にあつて人。普通には上流社會の人をいふ。が、こゝでは、このもとゝの本當の意味での紳士の……淑女とは、徳行の備はつたしとやかな婦人。これも普通に上流の婦人をいふが、こゝではその本當の意味での淑女の……といつた意味。

「資格」 身分、地位。又その要件。こゝは後者の意。

「法律」 帝國議會の協賛を経て、天皇の御裁可を得た成文法。おきて。

「侮辱」 あなどつてはづかしめること。

「自分の義務を怠る」 自分のなさねばならぬつとめをなまける。

「制裁」 國家が、法規違背者に對して與へる應報。慣習又は規定に違反したものに加へる惡報。

「具體的に善處の方法を云々」 かうした場合にはかういふ風に處置する、あつた事にはかうすれば宜しいといふやうに、一つ／＼事實に則して、そのよきに適する處置方法を教へるものではない。「具體的」は具象的といつても同じく、實際に形にあらはしての……といふ意。「善處」は、機宜に應じて、うまく處置すること。

「經驗」 實際にためし試みたこと、又、それから得た知識、技能、觀察、實驗等の方法によつて得た知識。

「感情を和げる」 氣持をおたやかにする。

「エドモンド・バーク」 Edmund Burke アイアランドに生れた。西紀一七五六年頃から文筆を以て顯れ、六五年首相ロッキンガムの秘書となり、これ以來政治家として活躍、ジョージ三世の獨裁政治に反對したり、アメリカの獨立運動に同情したり、大藏省出納局長の職に就いたり、フランス革命の際には書を著して、その過激化を警告したりした。

「氏より育ち」 家柄の貴さよりも人格的教養が大切であるとの意。

「習、性となる」 習慣が遂にその人の性質となると

の意。

〔人間生存の第一義たる精神〕 人がこの世の中に生きて行く上に最も大切な精神の意。「第一義」とはこの上もない深い妙義。諸法實相の理。

〔墮落〕 くだけおちること。品行の修まらぬこと。身もちもくづすこと。おちぶれること。こゝは、くだらぬものとするといった意。

〔野蕃化させる〕 野蕃にしてしまふ。

〔乃至〕 數、階級、種類等の上と下とを擧げて、中間を略するに用ひる語。また、あるひは。

〔間斷なく〕 間がとぎれることなく。始終。

〔決定的に云々〕 きちんと、恰ももとく定まつてゐるやうな風に、人の一生の運を或はよくし、悪くする。「運命」は人の身にめぐり來る善惡吉凶の事情。めぐりあはせ。

〔朱に交れば赤くなる〕 人は交はる友によつて、善惡共に感化されるとのたとへ。

〔適切に〕 よくあてはることに於て。ぴつたりと。

〔家庭の空氣〕 家庭にたゞよつてゐる氣分。家庭に感じられる氣分。

〔基礎〕 どだい。もとめ。

〔見るに足らぬ〕 十分に見ることが出來ない。こゝは、効果が、はつきり、それと分るやうにあらはれないの意。

〔取締〕 しめくゝる、管理する。

〔向上〕 現在の状態を不完だとし、これに満足せずして、理想を實行し人格を完成しようと、歩いて自己の發展を企圖すること。

〔圓滑〕 かどだゝすなめらかなこと。物事が故障なく行はれること。

〔源流〕 水の流れ出る源。みなもと。

〔お早うございますとか云々〕 かうした觀察は、日常のごく通常の事について、よく、その心理的影響の深さをきはめてゐる。主婦の智慧は、かうした細かい所から働かせて行かねばならぬものと思ふ。

〔應接〕 あしらひ。もてなし。

〔社會〕 Society 相互に結合し、相互に協力して共同生活をなす組織又は團體。世の中。世間。

〔心情〕 こゝろ。

〔信念〕 自信の心。

〔明治天皇畝傍御陵親謁〕 (口繪) 吉田秋光

圖は明治神宮外苑なる聖徳記念繪畫館の壁畫の一人で、明治十年二月十一日、明治天皇畝傍に親謁し給ふ光景を書いた日本畫である。住友吉右門氏の奉納にかゝる。

○吉田秋光 名は清二。明治二十年、金澤市に生れた。明治四十三年、東京美術學校を卒業し、寺崎廣業の門に學び、文展には二回、帝展には第一回より毎回出品してをり、帝展第四回には特選、第六回には帝展委員となつた。

〔仲秋〕 (一四頁) 深田直城

圖は大正二年大阪に開かれた月百題展に出品されたもので、尺八絹本着色のものである。月と秋の七草とを題材としてゐる。

○深田直城 文久元年生。關西の人。森川曾文に就いて四條派を學び、筆の達者な人で、文展、帝展等に出品しながら、畫壇の變人である。

〔水田の六月〕 (二〇頁) 中村徳二

本圖は昭和九年帝展第十四回に入選した日本畫で、多

分に洋畫の描寫法を取入れ、寫實的のものであつて、

よく山田の植附頃の情趣をとらへてゐるが、いかにも畫面全體に若々しい筆致が見られる異色な出來榮えである。

○中村徳二 明治三十三年生。松岡映丘の門に技を得た人で、帝展には第九回の入選がある。

〔たき火〕 (一枚刷) 青柳喜美子

本圖は帝展第十二回に入選した日本畫で、二曲屏風に描かれたもの。たき火の中に、二人の少女を扱つて、霜の朝の感じを巧みに寫してあり、單純化した構圖もこの人の頭のよさをよく示してゐる。筆者はこの圖の他に帝展第十五回に「煙草賣る店」の發表作があるがまだ若い閨秀作家で、師傳等今詳かでない。

〔白鳳出現〕 (一枚刷) 太田天洋

本圖は、大正十四年の帝展第六回に出品された日本畫で、六曲一双の中左半双である。年號白鳳は私年號で正史としては扱はれてゐないが、佛教上の方には屢々用ひられてゐる年號で、この圖は天武記に據つて描か

れたものである。土佐新派とも稱すべき作風で、原畫は非帝にあてやかなものである。

○太田天洋 本名を福藏、明治十七年東京本郷に生れた。初め山名貫義について畫技を修め、貫義歿後は小堀桐音、松岡映丘兩氏の指導のもとに研究し、大正二年東京美術學校を卒業した。嘗て大下藤次郎に就いて洋畫を學んだこともある。氏は有職故實に明るくその作に驚くべき堪能さを示してゐる。池畔俱樂部、日本畫會、革丙會、獨立畫會等の會員である。帝展にはこの他第二回に「工の家」第三回に「繪姿」第四回に「蘆生の夢」第五回に「高麗の文使」、第七回に「定大行樂」等の發表がある。

〔山陽の幼時〕 (二一五頁)

水野 年方

本圖は山陽が幼時、勉學のさまを描いたもので、眼を病んで讀書を禁じられた際、燈火を秘して讀書するを題したものだといふ。筆者としては若い時代の作で、歴史教訓圖の一として描かれたもの。

○水野年方 江戸神田山本町の左官職野中吉五郎の息で、初め水野芳年の弟子となつて歌川派の錦繪を學び、傍ら山田柳塘に陶器畫を受け、又南畫家柴田芳州にも就き、三島燕窓、渡邊省亭等の影響を受けた。明治二十一年頃より師芳年の後を承けて、「大和新聞」の挿畫を擔當し、斯界に一生涯を開いた。日本美術協會、日本美術院、日本畫會等の

評議員となり、又審査員にも擧げられた。繊細緻密の畫を數多く描いてゐるが、中でも、三十六佳選は最も有名である。門下には鍋木清方、池田輝方、池田蕉園、荒井寛方等がある。明治四十一年四月、年歿四十三。

〔麥笛〕 (一三九頁)

田中 針水

圖は昭和九年帝展第十五回に出品された日本畫である。

○田中針水 名は源一。明治三十五年、北海道小樽に生れた。川合玉堂の門に枝を修め、帝展第八回に「春」を出品したのを最初として「歌ふまゝに」「繩とび」等多くあり、昭和十三年には「蟲籠」の作がある。人物を得意とし、現代の婦女生活に材をとつた作が多い。

昭和十三年十月十二日印刷
昭和十三年十月十五日發行

女子新國文提要

(一卷—十卷)

非 賣 品

著 者
發 行 者
代 表 者
印 刷 所

富 山 房 編 輯 部
東京市神田區神保町一丁目三番地
合 資 會 社 富 山 房
同 所 富 山 房 社 長
坂 本 守 正
東京市小石川區西古川町二十五番地
中 外 印 刷 株 式 會 社

發 行 所

東京市神田區神保町一丁目三番地
合 資 會 社 富 山 房

電話神田二一七一—八番
振替東京五〇一番

終